

---

# 夜行遊女

ワシワシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜行遊女

### 【Nコード】

N3764S

### 【作者名】

ワシワシ

### 【あらすじ】

中華風ファンタジー。

鼻水を垂らして逃げ回る人間臭いヒロインがコンセプト。シンデレラ要素と成り上がり要素あり。残酷な妖鳥に襲撃された村の生き残りの少女思嵐（すらん）。醜い痣とやせ細った身体、陰鬱な少女は人々の生と死の狭間で、次第に成長して行く。やがて物語は西遊記の世界へとつながるが……。

残酷表現多々ございますので、ご注意ください。ヒロインの不幸ぶりには定評があります。

（自サイトより実験的に移植中。お目汚しご勘弁ください）

なお、ストック切れ後は、更新は緩やかに……遅筆なので、お許しください。

最終的には恋愛ものを目指していますととりあえずつぶやいておきます。

## 序幕

夜行遊女。あるいは姑獲鳥<sup>こかくちょう</sup>、上帝少女、鬼鳥ともいう。その性残忍にして残虐を極む。嬰兒<sup>みどりこ</sup>を攫<sup>さら</sup>いてその血肉を好み、若い男女の肝を抉<sup>えく</sup>り喰す。

一度見えれば、逃るる術なし。甘んじて死ぬるより他なし。

### 夜行遊女。

思嵐<sup>すらん</sup>はぼんやりと呆けた顔で天を仰いだ。周囲には怒号と悲鳴が満ちていた。転んで泣いている子供を気にする者はなかった。その母親が気づいて慌てて駆け寄り、我が子の手を引いて立ち去った。

方々で火の手があがった。木造と、白漆喰、藁葺きの屋根はあつという間に火に包まれた。炎はちろちろと大蛇の舌のように家屋を嘗<sup>な</sup>めあげ、たちまち踊る赤と燦<sup>くすぶ</sup>る黒い煙の色に染め変えた。

煙は縦横無尽に流れて人々の退路を塞ぎ、目を痛め、呼吸を妨げた。

思嵐はふらふらと立ち上った。唐突に頭に浮んだものがあつた。

母さん。

里外れの傾いた小さな屋に、母は寝たきりで過ごしている筈だっ

た。幼い妹も。妹はまだ九ヶ月にもならない赤ん坊だった。

逃……げなきゃ。

一度思い定めると、思嵐は辺りを探り伺いながら、じりじりと後ずさった。くるり、と踵を返す。

身を翻した後方で断末魔の声と甲高く狂おしい哄笑がきこえ、思嵐はびくりと肩を揺らした。

早くしないと……！

焦りが先行した。

思嵐の家は里落でも地位が低かったが、それが今日この日幸いた。里の中心部はいまや惨劇の舞台と化していることだろう。

友人の壮絶な最期が脳裏に焼き付いて離れない。

高蘭。  
たかし

## 二人の少女

普段は編み下げ髪にしている高蘭の長い黒髪は、組み紐を解くと滝のように椅子の背から膝のあたりまで流れ落ちた。芳香油でとらずとも艶やかな碧なす黒髪は、まるで生きもののようなうねりをみせている。

ほう、と感嘆の吐息が零れ落ちる。梳る手<sup>くしはず</sup>が止まった。

「どうしたの？」

凜と通る、涼やかな声音。

高蘭の不思議そうな問いに下婢<sup>げじょ</sup>は自分の立場を思い出し、はっとする。

「あ、申し訳ありません」

鼈甲<sup>べっこう</sup>の櫛<sup>くし</sup>をつよく握り締めたまま、咄嗟に謝罪した胃下婢 思嵐を、小家碧玉と賞賛される美貌の娘が怒った風に咎めた。

「もうしわけありませんじゃないでしょーなんべんいったらわかるのよーけいごはやめろっていつてるでしょー」

「……お嬢さま」

無言で言葉使いに抗議した思嵐に、高蘭は舌を出す。その拍子に雪の如く白い肌理から甘い芳香が立ち上った。そういうはしたない仕草も不思議と上品に愛らしく見えてしまう娘だった。赤い舌がち

ろりと覗く様は、娘の健全さとは対照的にどこか扇情的で色香を感じさせる趣すらある。

厭だわ。

思わず赤面してしまった思嵐はふいと顔を背けた。自分の醜い顔を見られたくないせいもあった。

そう、思嵐はまれにみる醜女<sup>しうめ</sup>だった。

不幸なことに、顔の半分を占める大きな痣<sup>あざ</sup>がある。これは思嵐に一生消えない劣等感を与えていた。また身体は栄養不足の為此の年ごろの娘らしい丸みを帯びるけはいもなく、真麻<sup>まの</sup>の繊維で織り上げた粗末な粗布<sup>そふ</sup>で棒切れのようながりがりに痩せた身を包んでいるだけであった。日に焼け酷使した手には、老人と同様、白い粉さえ吹いていた。

ああ。

これが、若い娘の手か。

黒々とした絶望が溢れ出す。

比べることさえも恐れ多いけれど、高蘭と思嵐のなんと異なることよ。

高蘭は小作人をたくさん抱えた里の豪農の一人娘で、その父を胡耳、母を呂氏といった。何不自由ない暮らしに加え、生まれ持った玲瓏たる容色と、明朗闊達な気質で誰からも愛された。

思嵐も高蘭も笄年をむかえている。笄年とは女子の十五歳をいい、初めて笄をつける年である。婚約がととのえば、笄をさして成人式を挙げ、字をつけた。字は、名と意味上関連のある文字を使うことが普通である。

高蘭は求婚の意味で、邑里の主だった若者から笄や花鈿（額飾り）を幾度となく贈られていた。

しかし高蘭は、いやその父である胡耳は求婚をことごとく断っていた。慈しみ育てた掌中の珠を一介の百姓などにくれてやるのは許せないだろう。いずれ然るべき月下氷人を介して、貴人のもとに輿入れさせようとあれこれ画策しているのかもしれない。

おそらく、と思嵐は想像する。高蘭の婚礼は商家の娘には不遜であるほど盛大なものとなるだろう。

胡耳は溺愛する彼女の為に財を投じるのを惜しむまいて。練り絹の婚礼衣装を着て、真珠に水玉（水晶）、紅玉髓に青玉、翡翠、まるで一国の公主のようにその肢体を宝玉で飾り立てるのだ。

しずしずと輿は嫁ぎ先へと導かれるだろう。花嫁が頭からすっぽりと被った赤い絹の蓋頭は、新郎によって取り除かれ、初めて夫婦となる二人は顔を合わせる。新郎は現れた花嫁のかんばせに、一目で心を奪われるだろう。

高蘭を娶った男は一身に嫉妬と羨望を浴びるだろうが、三国一の



果報者には違いあるまい。

だけど。

私は、高蘭と違って、一生誰かと添い遂げることはないだろう。

思嵐は面を伏せて哀しみを押し殺した。高蘭と全く対照的な自分は、その人生をも全く対照的に歩んで、終わらせるだろう。唯一同じなのは、生まれて死ぬことだけだ。

「……嵐」

耳元ではっきりと声がした。

「思嵐！」

呼び声に、思嵐は顔を上げた。

「……え……？」

すぐに少女特有のしのび笑いが重なる。

「どうしたの、思嵐すいあんってば？ 今日には本当にぼんやりねえ。立ったまま寝てる？」

「あ……はい……うん」

敬語を使つな、と言われたのを思い出して、思嵐はどもりながら曖昧な返事を寄越した。

高蘭はくすくすと笑って思嵐の顔を下から覗き込んだ。思嵐の顔半分以上を覆う、長い前髪の帳も、真下から覗き込まれては何の障壁にもならなかった。まともに視線が合う。

「ほうら。まだ晴が寝てる」

言われて、瞬間何を指摘されたのか分からなかった。

眼前に同性でも息を呑む人間離れした美貌の細面がある。こんなにも間近にはつきりと。

同時に気づいて恐慌をきたした。

顔を、見られた……！！

お互いに真正面から、お互いの天と地程もかけ離れた顔を。高蘭のけぶる睫毛まつげに囲まれた、杏仁形あんじんがたの漆黒の晴が、自分をじっと見つめていた。花唇かしんが淡い微笑をたたえている。

それが、思嵐の一割の嫉妬と九割の劣等感に歪められた晴には、嘲笑と映った。

いやっ

頭に血が上り、顔面にはカッと朱が走った。

慌てて両腕で顔を覆い、その場を飛び退いた。

襲ったのは激しい羞恥心。見られたのはこの醜い顔だ。よりによ

ってこの美しい娘に！！

惨めだった。己の顔を直視した高蘭に、憎しみさえ覚えた。

「見……見ないで下さい」

内実は嵐が荒れ狂っていたが、おどおどとした声で顔を隠しながら頼んだ。卑屈であると、思嵐はますます自分を嫌悪した。

高蘭が呆れたように背筋を伸ばし、大仰な仕草で柳腰に手をあてた。そして恫喝する。

「もう。思嵐はびくびくし過ぎよ！ あなたそんな自分で言うほど酷い顔じゃないわよ！」

そうやって前髪を簾すだれみたいになくして顔を隠してるから、かえって悪い印象を持たれるのよ」

娘はすばと容赦無く指摘する。

高蘭が自分の為を思ってあれこれ叱咤してくれるのだと分かっているにしても、それは無理なのだと思嵐は顔をそむけ、絶えいんばかりに目を瞑った。

この顔を堂々と晒して歩くのは、私には耐えられないのよ……

分かるまい。お前などには分かるまい。

大きな醜い痣あざを、人に見られるくらいなら、溶けて淡雪のごとく消えてしまいたい。

高蘭にはきつと死ぬまで、いや死んでも分からないだろう。

「いいの……いいんです。これでいいの。私は……」

俯いてぼそぼそと言う思嵐に、高蘭はふつと肩の力を抜くと、やおら思嵐の手を引いた。

「あ」

思嵐は体勢を崩して、高蘭の胸に倒れ込む。高蘭は華奢な身体の割に、力が強い。一緒に倒れ込むこともなく思嵐を支えた。

「お嬢さま      高蘭」

身を起こしてさすがに文句を言おうとした思嵐を、高蘭が背を押さえて遮る。

「思嵐」

真剣な声音に思嵐は動きを止めた。体が強張る。

まただ。

顔を上げずとも、高蘭の笑みが絶えたけはいがする。

一種恐怖に似た感情が思嵐を襲う。

高蘭の容姿はあまりに完璧過ぎるのだ。しかし普段はその陽気な性格が人形じみた厭世的な美貌えんせいてきの与える畏怖を中和している。だが

高蘭が一度表情をなくすと、その本性がたちまち露わになる。

見る者は一瞬にして悟らざるをえない。

これは、人外の美だ、と。

いつもは擬態しているとしか思われない。そんな空恐ろしさを覚える。

高蘭は優しく思嵐の背を撫ぜた。母が子にするような慈愛の手つきだった。思嵐は知らず母の手を思い出していた。母は体調を崩して久しく、家計を支える思嵐は心配をかけない為にも肩を張るしかなく、誰にも甘えることができない。

高蘭を嫉妬しているのに、同時にこんなにも慕わしい。

私……ばかみたい。

矛盾して、ぐるぐるスキとキライの間を往復している。

働き過ぎて身も心も疲れきっている思嵐は、安心したせいもあるのか、使用人としてあるまじきことではあるが、次第に睡魔に襲われた。

顔を埋めた衣裳からは何かの香を焚き染めているのだろう、良い香りが思嵐の鼻腔を刺激し、次第に思考力を麻痺させた。

それは実際、高蘭の身につけた匂い袋から漏れていた。

高蘭はゆっくりと、噛んで含めるように言い聞かす。

「いいのよ、それでもいいんだわ。ううん、それがいい。思嵐はそのままでもいい。」

もうすぐだから。もうすぐだから待ってて」

何を言っているのだろう。

思嵐は夢現に思った。おちていく。

眠りにおちた思嵐の頭をゆっくりと膝の上に乗せて、高蘭はひっそりと毒が広がるが如く嗤<sup>わら</sup>う。

「痣<sup>あざ</sup>があつて良かった」

くつと肩が揺れた。

「我ながら、嗤えるな」

この妄執は。

## 執着

胡耳は娘を手放したくなくて、あるいは娘に相応しい大夫を探してことごとく求婚を断っているわけではない。

高蘭こうらんが初めて思嵐しやうらんと顔を合わせたのは七つの時だった。それまで高蘭は身体が弱くて、ずっと臥榻に寝たきりで縛り付けられていたから、里の子供とも殆んど接触したことがなかった。六つを過ぎた辺りから次第に快方に向かい、七つになる頃にはすっかり健康体となっていた高蘭は、今までの不自由を取り戻すように外に出て近所の子供たちと遊び回った。

それである日、いつもぼつんと独りでいる思嵐と出会った。

最初に顔を合わせた時、雷に打たれたかと思った。

私はこれを知っている。

唐突に高蘭は知っていることを思い出した。名前や姿かたちを知っていたわけではなく、『これ』を知っているのだと。

どこかで擦れ違ったとか、似た人物を知っていたとかそういう程度ではない。強烈な直感であり確信だった。

懐かしさと慕わしさに、不覚にも涙が零れ落ちそうになった。

何故か、など知らない。どういうわけで知っているだのと思った

のかも。

ただ手に入れたいと強く思った。

むろんその為に色々手を打った。思嵐の家が大黒柱を病で亡くして困窮しんきゆうしているのをいいことに、父に頼んで侍婢にした。本人が妙な劣等感を持っているのも好都合だった。孤立して、誰の手も取らぬのであればそれで良かった。

前世、というものがあるのか高蘭には分からない。しかし前世で深い縁を結んでいたのだから、説明のつかない激しい渴望だった。

高蘭は美醜びしゆうというものに実は拘らない。人は皮を剥いちまい剥はげれば皆肉の塊である。形というものは生まれ落ちたその時から崩壊を始めている。滅びるよう運命付けられたものが命である。形の良し悪しを論じるなど無意味だ。

かといって醜女しゆうめの思嵐の内面に、何か澄んだ美しいものを見出したわけでもない。むしろ思嵐は常人より後ろ向きでひたすら内向的内にどろどろした粘着質の闇を抱えた娘だった。

だから、疎む理由こそあれ、執着するのに理由などないのだ。だのに欲しかった。

ただ手に入れる。それだけが高蘭の内を占めた。

驕慢きょうまんに育てられたが故の独占欲の発露であつたか。それとも。

周囲が思うほど無邪気でも優しくもなかった高蘭は、更に可憐で



才氣煥發さいきかんぱつな婦女子の擬態を装うようになる。

十を過ぎた辺り、母の呂氏が高蘭の臥榻がとつ（寝台）に忍び込んできた。毎夜交わされる行為に高蘭は悟った。

我が性は陽である。

昔、天と地も分かれず、陰と陽も分かれず、全てが渾沌こんとんとして、あたかも溶き卵のように形が定まらない時に、かすかなもののきざしがあらわれた。その中で清く澄んで明るいものは高く上にあがってたなびき、天となり、重くて濁ったものは固まって地となった。清く細かなものは集まりやすく、重く濁ったものは固まりがたい。そのため、先に天ができ、地があとにできた。

『日本書記』

天ははじめに上に生じたので一、地は後から下に生じたので二、天と地の構成を一と二を合わせて三とする。

万物はこの天地陰陽から生まれるものであつて、全てをその陰と陽に分類することができる。男女もまた陰陽に分けることができる。

陽とは、すなわち男性である。女性は陰。

高蘭は陽の性、畢竟女兒ならざる男児であつた。

これは驚嘆すべきことである。女子の姿をしていた高蘭は、その時まで己が女であるを疑うこともなかった。しかし今や眞実は明らかであつた。

故に呂氏が犯した不義・不道德は息子との姦通。

されど。陰陽は和合する。それを求める。

陰と陽に気が通ずることによつて五行が生じ、その作用によつて森羅万象は生ずるのである。新しい命も陰陽の和合より生まれるのだ。

高蘭が陽であれば呂氏が陰の性で陽を求めたのは意味が通り、陽の高蘭が陰の思嵐を求めたのも自然の掟に反しない。

心の働き　高蘭が思嵐に惹かれたのはこれで説明がつく。

しかし。もう一つの問題がある。

何故高蘭は女子の形をしていたのか。それは先も述べたように彼女　いや彼の体が非常に弱かつたことにあつた。

生まれた瞬間より呼吸困難に陥つた我が子を、呂氏は氣も狂わんばかりに生き長らえさせようとした。胡耳も八方手を尽くして、幼い息子の命を助けようとした。

しかし財力にものいわせて招いた医生も皆役に立たず、一年以内の死を宣告した。

そこにふらりと訪れたのが身なりの汚い道士である。

「成人するまで女子の姿をさせるがよい。さすれば命数は伸び、健康なままいかなる疾病・靈障も免れ白寿まで生きるだろう。しかし成人する前にその約束を破って男子の姿に戻れば、私は安全を保障しない」

道士はそう言うたちまち白い雲が湧き出てその中に消えてしまった。

若い夫婦は呆然とした。

「あれはきつと亜山に洞府を構える仙人だろう」

亜山はこの里のすぐ背後に聳える、道士の修行場としても有名な深山幽谷を供えた名山である。

「おっしやった通りにいたしましょう」

これは実は高蘭の陽の気があまりに盛んであった為に起きた弊害であった。過度なものは毒となる。故に、女子の格好をし、その振る舞いを真似て荒ぶる魂魄を慰撫することで、陰の気を補ったのである。

果たして仙人の言う通り、高蘭は丈夫な身体になってすくすく成長した。今年で十五、女子の成人を迎える。しかし男子としてはあと五年待たなければならぬ。

その約束が高蘭を縛っている。

あと五年も待てるか。

酷薄<sup>こくはく</sup>な笑みを浮かべて高蘭は思った。

これは恋情ではないだろう。ただ、何かが高蘭を突き動かすのだ。それは多分前世からの業だろう。一度や二度関わっただけではなく、幾度も生を交えているような気がする。

手に入れたと思うからには何としても手に入れよう。

彼の命数が一年であつたのは、天がこの者の徳を鑑みて、そのように定めた為である。それを無理やり伸ばしたつけが、今回<sup>ねじ</sup>としてこようとしていた。すなわち天命、天数は振れたのである。

## 天界

「最近は妖魔の動きが活発というが……」

沈痛な面持ちで縫腋ほうえきに纓冠えいかんを付けた文官は、同僚に声を潜め漏らした。

「やれ、下界では惨劇が繰り広げられておると聴く。下界に根を張る風伯かぜのかみ、水神みずのかみによると妖魔どもはますます数を増やし、天界まで台頭する勢いと言うが」

「一体どうなっておるのだ……」

分からぬ。

文官は答え、眉根を揉む。

「ここは玉皇大帝のしろしめす天界、金闕宮きんけつきゅうにある、諸神が集って政を行なう靈霄殿れいしやうでんの一角である。」

中岳・嵩山すうざんの西北五万里にある崑崙山は太丘の天柱とも称す九層の楼閣では、風は穏やかに花咲き乱れ、宮城は玉で色とりどりにまるで暗雲垂れ込める気配もない。

だが、更に下った太丘の麓では、妖魔の影色濃く、前衛の武官は群がる魔变化生まへんけしやうのものに戦陣を開いているという。

されど、と今一人の文官が不安を払いのけるよう口を開く。

「某（それがし）の聞き及びしところでは、とある女仙が獅子奮迅（ししふんじん）の働きにて妖魔を駆逐しておるとか」

阿呆（あほう）め、と一人が眉間（みけん）に皺（しわ）を刻む。

「それが頭痛の種よ。まるで協調性というものを知らぬ、その女仙の身勝手極まりない振る舞いに、規律が乱れ私闘を挑む者まで出る始末。一人の並々ならぬ働きより、軍をいかに合理的に動かすかが肝要なのだ」

「その者はそれほどまでに得て勝手を？　しかし凄まじい働きなのであろう？」

「あれは」

彼は英々と流るる果てしない雲海を望む。

「凄まじい、などというものではない。まるで血に飢えておるかのよう……天界の者にはあるまじき狂気よ。他の者がその異端ぶりに拒絶反応を起こすも道理……」

## 異変

初め、空にぽつんと見たのは、塗りこめたような紺碧こんぺきの中の黒い染みだった。

染みは筆先から絹布けんぷにぱたんと落ちた墨汁のようにじわりと広がり、やがて形を成した。

子供が、何も知らずに指を指して悦んだ。

ひとがた           ではあるが、背せなに禍々しい翼の生えた異形いぎよう。

「ひっ」

誰かが、息を吞んだ。

彼は指摘する。

「夜行遊女だああああああ           っっ」

里落中しりくちゅうが、水を打ったように不自然なほどしん、と静まり返った。

一瞬の長閑のどかとすら言える静寂の後。

「うわあああああああああああああ！！」

魂切たまぎる絶叫が、恐慌に火を点けた。

それを機に、怒号と悲鳴と恐怖とが一気に爆発する。

四方八方に駆け出した村人は、互いにぶつかって罵り合って、揉みくちやにされながら逃げ惑う。

混乱と、黒く塗り潰された絶望の淵に、人々は本能で感じ取っていた。

逃げられない。

「もう、この邑里はお仕舞だああ」

はたり、と二枚の猛禽の翼を羽ばたいて、異形が広場に舞い降りた。

「あーん、見て見てっ バカどもが逃げ回ってるよーん」

幼い顔つきをした、それでも将来的には男を惑わす美貌の主になるだろうと思わせる、翼の生えた娘が身をくねらせる。

少し年かさの好戦的な顔つきをした娘が、ぶるっと身震いする。

「うふふ、堪んないわねえ。あたし悲鳴を聞くとぞくぞくしちゃうつ」

伶俐さの中に蠱惑的な色香を湛えた美女が、二人の妹を宥めた。

「妹妹達、はしたない真似しちゃ駄目よ？」

「はあーい」



「殺つちまう時は、興奮に任せて一思いにぐっさりじゃなくてええ」

「苛め抜いて苛め抜いて、死なしてくれって嘆願してもまーだまーだ殺しちゃ駄目なの！」

絶世の美女は、はんなりと脳髓まで蕩けそ<sup>とろ</sup>うな微笑を浮かべる。

「はい、よくできました」

夜行遊女達は次々と降り立つ。その数、見積もって二十ばかり。邑を壊滅させるには、充分過ぎて物足りなくらいである。

先陣を切って、あどけない容貌をした娘が哄笑しながら突っ込んでいく。

「あはははははははははっ やっちゃえー！」

この世のものではない異形の美しき娘達は、その花の顔<sup>かお</sup>を輝かせ、惨たらしい殺戮<sup>さつりく</sup>にまるで童女が遊びに熱中するがごとく身を投じ始める。彼女達は恍惚と弛緩<sup>たんでき</sup>しきった表情で、その非情な遊戯に耽溺<sup>たんでき</sup>していった。

\*\*\*

「どうなってるの!?!」

たちまち騒がしくなった表に、思嵐は半泣きになって家人を捕まえ、尋ねた。

いつもは淑女ぜんとしている侍女頭の女は、半狂乱になって思嵐のがりがりの手を振り払った。

「うるさいねっ ごちゃごちゃ言うんじゃないよ！ はやく逃げないと、ここにもあいつらが来ちまうっ」

裙子をたくし上げ、女は一刻も早く立ち去ろうとする。しかし思嵐は女の袖を再度掴んで放さなかった。

「何するんだいこの子はっ」

思嵐は必死の形相で女に取り縋る。家人は皆奔走して、誰も思嵐など気に掛けてはくれない。屈強な男達に突き飛ばされ、同じ下婢の娘達ですら、血の気を引いて思嵐の問いには答えてくれなかった。

今、この袖を放したら、何が起きているのか分からないっ

常には考えられない行動力であった。思嵐は必至の形相で食い下がる。

「あいつらって何なの！？」

「お放しよ！ ええい、あいつらってのは、姑獲鳥だよ あの残忍極まりない鳥の化け物がこの邑に大量にやってきたのさ！！！」  
もう何もかもお仕舞だよ  
「！！！」

最後はもう悲鳴であった。

女の口走った妖魔の名に、思嵐は身の毛もよだつ戦慄を走らせる。

「よ……よりによつてあの……!!」

言葉が続かない。夜行遊女の通った後には、屍骸しか転がらぬという、あの恐るべき妖魔である。血肉を好み、その性向は残虐にして無慈悲。

狂乱を愛し、断末魔を何より悦ぶという ……

「さあもう放しとくれっ」

女が乱暴に腕を振り払ったのにも、思嵐は暫く気づかなかった。

女は堂房を出るや階を駆け下り、院子を突っ切って大門の方へ行くとする。

残された思嵐はぼんやりと呟いた。

「……は、はは……ど……し、よ……う……」

目まぐるしい事態の展開に頭が追いつかず、いつそ乾いた笑いさえ込み上げて来る。ねえ、どうすれば、いいの。

外は騒がしい。皆屋敷を出て行くこうとしているのだ。

自分も逃げなれば。こんな目立つ大きなお屋敷の中には、さあ殺して下さいと言っているようなものだ。

そう思うのに、足が竦んで動かない。

膝頭<sup>ひざがしら</sup>が笑っている。

いい加減、現実逃避から頭も覚めてきて、今度はじわじわと焦燥感が込み上げて来た。

「……ッう、動いてよ」

己の足にいい聞かせてみる。心臓が狂ったように鼓動を打ち、全身が小刻みに震え始めた。足が、足が動かない。

「逃げないと、逃げないと、逃げないと！」

あいつらが来ちゃうよっ 悪い夢。吐き気が込み上げて、口許を抑えた。怖い怖い怖い怖い。目の縁から涙が盛り上がってくる。

「あ、あ、あ」

私、死ぬの？ ここで死ぬの？ こんな所で、まだ、まだ何もしてないのにつ何にも楽しい事、知らないのにつ

誰か。

ばたばたと足音が近づいてくる。

瞠目して顔を上げた。

同僚の少女だ。

「桃<sup>たお</sup>っ」

思嵐は安堵感にへなへなと座り込んだ。一番仲の良い少女である。

桃が蒼冷めた顔でこちらを振り返った。

ああ、ちゃんと聞こえたのね。

「お願い！ 助けて、足が動かないのっ」

反対側から叫ぶと、桃は立ち止まって目を見張った。よかった、気がついてくれた！ 彼女は強張った形相でこちらに駆け寄ってきた。

「あ、ありがとう　っ」

感謝に、晴が潤んで来る。

だが。

桃は汚いものでも見るように顔を背けて、思嵐のへたり込んだ回廊をそのまま突っ切った。外へ。外へ。外へ。もう彼女は振り返らない。

「え？」

思嵐の笑みが強張る。どうして？ 助けてくれるのではないの？

嘘でしょう？

「桃？　ねえ、桃ッ　桃、桃、桃おオオオおおっっ」

後ろ姿が小さくなり、その足音は遠ざかって行く。

思嵐は愕然<sup>がくぜん</sup>と廊下に手をついた。全身が痺れきっている。

どくん。

どくん。

ど、くん。

み…見捨て、られた　？

顔面からざあつと血の気が引いた。

私は、見捨てられた。

見捨て、られた。

その違いようもない事実、顔面蒼白となる。

……ッ　い……　やああああああッ

膨れ上がった緊張が爆発した。油汗をしとどに垂流しながら、思嵐は立ち上がるうとして、ずりりと無様に転がった。

手足が、がくがくと震えて、這いつくばったまま四つんばいで立ち上げることが出来なかった。焦れば焦るほどにつるつると磨き抜かれた廊下を汗ばんだ手が滑る。顔面蒼白のまま血が滲むほど下唇を噛んで、ようやく自分の腰が抜けたことを知った。動けなければ、

取り残され、死ぬ。ぼたりと大粒の汗が額から顔を滑り、木肌に黒い染みを作った。死ぬ。殺される。簡単な等式だった。

血を吐くような絶叫が、もう誰もいない廊下に木霊する。

「お願いイイツ！ 置いていかないでええええエエええつ」

灯りの落ちた、暗い廊下に深遠として吸い込まれるよう絶叫は響いた。返ってきたのは、しんしんとして、針の落ちる音さえ聞こえそうな静寂だった。絶望が溢れ出さんばかりに、涙と汗と鼻水混じりの懇願をしても、応える者など皆無だ。

もう、人気は完全に絶えている。

私しか、いないの！？

ぷつん、と危うい理性の糸が切れた。

「……ツいや、いやあああッ　ねえ、誰か！？　だれあかああア  
アアああああッッ」

どんな無様な姿でもいい、這ってでも追いかけようとするが、今度  
は全身から力が抜けて、またもんどりうった。他人の体を借りた  
みたい、手も足も思うように動かなくて、汗ばかり噴き出た。視界  
が涙でぶれ、何もかも霞んで見える。もうどこへも行けない。

……ッひ

死にたく、ないっ

その時、再び誰かがぱたと走ってくる音を耳が捉えた。

思嵐はもう幽かな期待すら抱けずに、腰が抜けたまま脱力しきっている。

今度も、見捨てられる。

また、同じだ。誰もが自分で手一杯。一体誰がこんな醜い自分を、身を呈して助けてくれると？

足音が近づき、再び遠ざかるのを覚悟した。しかし、それはぴたりと俯いた思嵐の前で止まったのだ。

荒い呼吸を繰り返しながら、絹の沓くつの主は、裳が汚れるのも構わず、膝について思嵐の肩に手を置く。

「思嵐っ 良かった！ 探したのよ！！」

「え？」

慌てて仰いだ先に、高蘭の紅潮した顔があった。

「ど う、して？」

呆然と呟く思嵐に、高蘭が表情を改める。

「さあっこんな所で油を売っている場合じゃないわ！逃げるのよ！」

思嵐はくしゃり、と顔を歪めた。醜い顔がますます醜くなっただろっ、と頭の隅っこだと思う。



「足が」

「何!？」

こんな事を言えば、見捨てられる。そうもう一人の自分は叫んでいたが、遅かれ早かれ忘れてしまうのだ。

「足が、動きません」

ぱたりと涙が頬を伝う。

ぐつと高蘭が飲み込んで、真摯な目で思嵐を貫いた。

「そう」

ああ、もう終わりだ。

思嵐は絶望に身を任せた。

「なら、私がおぶって行くわ」

何を言われたのか、分からなかった。

呆然とする思嵐を、高蘭が強い語調で叱咤した。

「何をぼんやりしてるのっ死にたいの!」

反射的に首を横に振る。

「し、死にたくない」

それだけははっきりと言える。

「なら、私の背に掴まりなさい。それくらいなら出来るでしょう！？」

「けれど」

「早くっ」

急かされ、思嵐は下唇を噛んだ。お嬢さま育ちの彼女ですら、こうして恐怖に立ち向かい、その上他人まで助けようとしている。自分は何だ？

未だ震えながらも、顔を上げ呂律の回らぬ舌で嘆願した。

「お、お嬢さま、おぶってくださいなくていいです」

苛立たしそくに高蘭が肩を揺さぶる。

「何を言ってるの、ほらっ」

息を整え、どうにか意思を伝える。

「いいえ。肩を貸して下さい。自分で歩けます」

思嵐の言葉に、高蘭は晴を見開き、それから口許を弛めた。

「分かったわ。さあ、肩に掴まって」

二人は立ち上がる。

「大門は危ないわ。裏手の側階から抜けましょう」

「はい」

頷く思嵐に励ますよう笑いかけ、高蘭は歩調を速めた。

## 妖魔襲来（前書き）

すみません、作者は以前心情について、”（台詞）”くくりにしていたのですが、現在心情は ” 台詞” という風に使いなおしています。

これまでの話数は直していったのですが、修正する労力がめんどうなので、とりあえず、全話あげておき、時々直して生きてい……と思います。違和感があると思いますが、ご寛恕いただける幸いです。

## 妖魔襲来

誰が火を放ったものか、屋敷の外も内も、炎に蹂躪じゅうりゃんされつつあった。

思嵐と高蘭が脱出した後、ある臥室しんしつに一人の夫人が、臥榻がとう（寝台）の側で虚脱していた。

上等の衣裳、頭には金笄を挿している、柳のような妙齡の夫人。

思嵐が見れば、『奥さま』とでも呼んだだろう。

高蘭の母、呂氏である。

「あ

彼女は虚ろな目で唇を僅かに開いている。

「……………らん……………」

高蘭。

あの子。あの子。あの子。あの子。

「わたくしを、置き去りにしたのね……………」

ぎりり、と付け爪が、家事をした事のない柔肌に喰い込んだ。

「……………わたくしを、突き飛ばしたわ……………」

可愛がつてあげたのに　　っ

夫以上に尽くして、昼となく、夜となく、舐めるように溺愛して。

それなのに、あの子は嗤笑ししょうしたのだ。

逆光に、顔を塗り潰されていたが、確かに。

扉を開いた高蘭に、呂氏は当然の物と思って命令した。

「ああ、高蘭っ待っていたのよ。さあ、わたくしを助けて頂戴」

手を、蔓つるのように伸ばした彼女に、高蘭は歩みより、いつそ優しいとも言える美しい笑みを寄越した。

「ああ、母上。ここにいらっしやったのですか」

「そうよ、いいから早く、恩知らずどもは皆方々に散ってしまったの。お前だけが頼りよ」

それは、息子に対する言葉と言うより、愛人に対する依存の姿勢だった。

高蘭は蕩けるような微笑を唇に刻み、

「母上、お別れです」

別離の言葉を彼女に宣告した。

呂氏は笑顔のまま時を止めた。

「は？」

高蘭はにつこりと笑んだままだ。笑んだまま、彼女の咽元に言葉の刃を突きつけた。

「道を外れた淫婦が。私はあなたのぶよぶよした白い肉が大っ嫌いでしたよ。ここで死んで下さい。清々しますから」

「は？」

呂氏は再度繰り返した。

高蘭がくるりと背を向ける。

行つて、しまふ。

娘の姿をした、私の息子が。

呂氏は意味が頭に染みとおった途端、愛情や肉欲を勝り、腸の煮え繰り返る殺意を覚えた。

悪鬼の如く眦まなじりを吊り上げ、手を伸ばした彼女を、高蘭が振り返り、躊躇ちゅうちゆなく呂氏の？を突き飛ばした。

臥榻にぶつかって、呂氏は睛を回す。

（わたくしを、突き飛ばしたの？）

痛みより、何より、その事実が呂氏を完膚なきまでに打ちのめす。  
高蘭は従順で、自分に絶対服従している筈だったのに。

頭が混乱していた。

（何故、何故、何故、何故！？）

彼女は永遠に解けぬ命題に、迫る死の瞬間まで囚われ続けた。

それは、とても速やかに訪れたのである。

美しくも淫蕩<sup>いんとう</sup>な死の乙女達によって。

裏の通りに出た途端、思嵐は絶句した。

「嘘……」

邑落が、燃えている。

そして、空を何か人にあらざる鳥のようなものが飛翔している。

それが、急降下する度、悲鳴が。悲鳴が、尾を引いて。

自失する思嵐に、高蘭が厳しい顔で促した。

「こんな所でぐだぐだしている場合じゃない。急いで離れるんだ」

一瞬、高蘭の口調に違和感を覚えたものの、思嵐はそれを上回る



衝撃に人形よろしく頷いた。

どうにか駆け足に屋敷から離れる。

と、空中から異形の女達が連なって、燃え上がる屋敷に数名降り立つのが見えた。

（間一髪だった）

思嵐は高蘭に助け出された幸運を重く受け止めた。

今まで、あまりの境遇の違いに勝手に高蘭を憎悪していた。その事が今、耐えようもなく羞恥を伴って、思嵐を苛む。

（何て、恥ずかしい……私は、本当に心根が醜かった）

誰より美醜びしゅうに拘こたわっていたのは、自分だったのだ。

口を引き結び、煤だらけになった高蘭の横顔をそつと盗み見た。

蔵くらかで、神々しかった。汚れてもなお、高蘭の高潔さは内から光を放つ。

（生きて、生き延びて、今度こそちゃんとお仕えしたい）

思嵐は密かに願った。自分を変えたい。もう一度、機会が欲しい。

はつと高蘭が足を止めた。

「え？」

きょんとした思嵐は、次の瞬間にはどんっと高蘭に突き飛ばされ、家屋の方に倒れ込んでいた。

「な、に」

高蘭がふり返り、引きつった形相で叫ぶ。

「早く隠れなさいっ」

立ち竦む思嵐をじれったそうに高蘭が戸の中に押し込む。自分も素早く中に入って、急ぎ戸を閉めた。

「きゃーははははははっ」

「逃げなさいよう」

甲高い哄笑。

板の隙間から外を窺うと、人が向こうから駆けて来る。着衣がボロボロに引き裂かれ、乱れている。

「桃っ」

思わず口を押さえた。

「助けてっ助けて                   っ」

桃は絶叫しながら走っていた。丁度思嵐達の隠れている家の前で転んだ。

「ひいつひiiiiiiii」

立ち上がろうとして、ぺたん、と座り込む。

「いやーん、もうお仕舞なのぉ」

「もっと愉ませてよー」

「あ、ひ」

やっだーと一際甲高い嘲笑が響く。

「見てーん、このコ失禁してるっ」

「きったないー」

「ひiiiiiiiiiiii」

猛禽の翼の娘は、腰に手を当てて、

「汚いからあ」

舌足らずな声で高らかに宣言する。

「しけ　　いー!」

(桃っ)

先ほど見捨てられた。最初は泣き惑う彼女の姿に少々いい気味だ、

と思わないでもなかったが、次第に思嵐は見ていられなくなっていた。

（どうなるのっ）

不安だけが増大していく。助けたい。でも、ここから出て行く事は出来ない。今、自分が仮初かりそめにも安全だから、こうして同情心など湧いてくるのだ。その事を、思嵐は痛いほど理解していた。

誰しもそうなのだ。桃もそうだった。他の家人もそうだった。自分も。高蘭も。自分を守るので手一杯だ。

悲鳴を、押し殺せたのは、いかなる御業であつたか。

思嵐は、うつと強烈な嘔吐感おうとかんに襲われた。それほど、目の前で繰り広げられたのは凄惨極まる光景だった。

鋭い鍵爪が、桃の頭をまるで熟した果物を握りつぶすようにして抉った。

桃の恐怖に引きつった面が、石榴ざくろのように弾ける。ぼたぼたと滴り落ちる血に、彼女は不思議そうな顔をした。したと思った。

一拍おいて彼女は、

「きゃああああああ　　つつつ」

絶叫した。

れん　ひい、ひい　　と空気が咽から漏れる音。じたばたと手足が痙けい

攣したように動く。

(いや　っ)

背後から高蘭が思嵐を抱きしめた。

人の温かみを感じていなければ、思嵐は長い悲鳴を放っていただろう。

「あはははははっおもしろーい」

ぞわ、と湧き上がる目も眩むような怒りが、思嵐の目頭を熱くさせる。

何が、一体何がおもしろいと言っただ!

(私達は、あんた達の玩具おもちゃじゃないっ!!)

一抹の怒りと、それを上回る絶対恐怖。

のた打ち回る桃を、人外の娘達は踏みつけにする。

拍子抜けしたかのように、

「あ、事切れちゃった」

「えー、つまんなーい」

でもおお、と妙に間延びした声で、片方の娘が淫靡いんぴな笑みを作った。ちろ、と紅い舌先が唇を舐める。

「その家からあ、人間の匂いするしいいいいいい」

「あはっあたしもそう思ってたんだあ」

(……うそ!?)

思嵐は凍りつき、全身から血の気が引いていく音を聞いた。

娘達に対する義憤はあつという間に萎しぼんだ。その程度のものでしかなかったのだ。絶大なる恐怖の前には。

「ひっ」

齒の根が合わず、勝手に力チ力チと鳴る。

その思嵐を、高蘭がぎゅっと強く掴んだ。恐怖で?が一杯に満たされる。

(突き飛ばされるのだろうか)

そんな考えが頭を過った。

まさか、その為に助けたのだろうか。襲われた時に、身代わりとする為に?

そして、やっぱり、思嵐は突き飛ばされたのだ。

「っあ」

しかし、表ではなく、家の奥へと。「逃げる」と強く囁かれて。

（高蘭！？）

同時に、鮮血を全身に浴びた娘達が、家の中に踏み込んできた。

「みーつけたっ」

それは嬉しそうに無邪気な笑みを浮かべて。

思嵐は、仕切りの方に尻餅をついていたので、彼女達からは死角になっていた。

高蘭が、胸を張って堂々と切り出す。

「遊ぼう」

娘達はきょとん、と目を丸くする。

高蘭は不敵に笑い、もう一度繰り返した。

「私は逃げる。追いかけておいで」

いいつと娘が身を擦よじって叫ぶ。

「このコいい　　っうん逃げて逃げてええっ」

「あははっ逃げて　　っ」

「殺しちゃうからさあああああああ」

ざつと地を蹴る音。ひらり、と身を翻して。衣裳は薫香を残し、風に流れた。

「行くよ　　っ」

「いっこ　　う」

（あ、あ、高蘭

！！！！）

暫くの間、思嵐は動けなかった。頭が混乱していた。

（ど、して？どうしてどうしてどうして！？）

ずきずきとこめかみが痛む。思嵐には理解不能な、高蘭の一連の行動。

突き飛ばされた。

でも、それは思嵐が考えたような事の為ではなく　高蘭は罔となつて、一人表へと駆け出した。

（どうしてなの　　高蘭！？）

ここにいれば、いずれまた嗅ぎつけられて殺されるのは分かっていた。でも、この家を出ることで、安全な場所から渦中へ放り出されるような恐ろしさがあった。

黒煙に思嵐はけほつと咳き込む。もう、火の手が近い。



（高蘭、高蘭、高蘭っ）

怖いよ怖いよ。

そして、取り返しのつかない事をしてしまったという罪悪感があった。

自分は、疑った。最後に疑った。高蘭を。高蘭が、自分を盾にして逃げる気だと。

（私は）

自分の中にあるものでしか、人を測る事ができなかった。

（私は）

ひくり、と咽のどが焼け付くような熱を持つ。

私は、高蘭が身を呈して守ってくれる価値など、なかった。

涙なみだが止めどもなく両頬を濡らしていた。

（行こう）

行かなければ。

私の命は、彼女がくれたものだから。

ここに、いては駄目だ。

無駄になる。生き延びないと、無駄になる。

震える足で立ち上がり、思嵐はそつと表に出た。

表は、文字通り地獄だった。

暫し立ち尽くし、ふと思嵐は母や妹を思い出した。

今まで忘れていたのが不思議なくらいだった。

（か…… かあ、さん）

最悪の予想が脳裏に浮び、それだけは絶対嫌だと思嵐は拳を握った。

そろり、と一歩下がり、後は弾かれたように全力疾走した。

## 母との別離

「母さんっ」

まだ思嵐の家の辺りは火の勢いも届いてない。

駆け込んで、思嵐は母を必至に呼んだ。

「ああ、母さん」

褥ふとんから起き上がって、幼い妹を抱いた母の姿に、思嵐は一時の安堵を得る。無事を確かめて脱力しそうだった。

「思嵐！」

母は思嵐の顔を見るなり、口を押さえた。

「良かった　　無事だったのね！？」

「うん、うん」

不覚にも泪なみだが零れそうになる。だが、それを堪えて思嵐は訴えた。

「母さん、逃げないって逃げないとあいづらがっ」

あいづらが、と口走る娘を嗜たしなめるよう、母は落ち着いた声音で問うた。

「一体、邑では何が起きているの？」

「ああ、母さんはずっとここにいたから分らなかったのね！？母さん、落ち着いて聴いてね。夜行遊女が大群で邑に押し寄せたの。今は中心部にいるけど、もう直ぐこっちにもやって来るわ。早く逃げましょっつ」

「や…こっ、ゆうじょ…！？」

顔色を真っ白にして絶句する母に、思嵐はこの反応も仕方ない、と思った。

自分とて、ほんの少し前には歩く事すらままならなかった。こうして母に逃げよう、と口に出来るのは、全て高蘭のお陰なのだ。彼女の勇気が、僅かにも自分に乗り移って、奮い立たせてくれている。

高蘭の事を思うと、胸が張り裂けそうになる。彼女は、どうなった。二匹の姑獲鳥を相手取ったのだ。結末は、簡単に思い浮かぶ。それでも、その最期を直接睥にしたわけではない。だから。一縷の望みに掛けたかった。

（もう一度、生きて会っんだ）

生きて。

「早く、母さんっ」

母は立ち上がりかけて、急に前のめりになった。

「母さんっ！？」

激しく咳き込む母に、思嵐は慌ててその背を擦る。じくじくと焦燥感が胸を侵食する。

「大丈夫？ 母さん、母さん」

母は、体調を崩している。その事実が急に現実のものとして重く思嵐に押し掛かっていた。

（逃げ切れるの？）

病の母を抱えて。

一人なら、逃げられるかもしれない。

（何を考えているの私は！？）

自問自答しかけ、いいえ、皆で逃げるのだ、と強く念じる。

しかし、母はぜえぜえと不規則に苦しげな呼吸をしながら、

「思嵐、私は無理よ。お前だけでもお逃げ」

「止めてよっ母さん、一緒に逃げるのよっ」

いいから、と母はついぞなかった覇気を込めて娘を諭す。

「こんな村の外れだ、見つからないかもしれない。でも、万一を考えて、家族が分散していた方が、危険は少なくなるのよ。」

お願いだから、小翠連れて、山の方に逃げて頂戴」

「いやっ」

思嵐は頑迷に首を振った。

母を置いて逃げる事は、思嵐にとって自己崩壊に等しかった。父を亡くし、病の母と幼い妹を全て思嵐が背負った。

しかし、母の存在がなければ、思嵐は一人では生きていけないのだ。支えているつもりで、支えられていた。母を亡くしたら、本当に一切合切の拠り所をなくしてしまう。

病気でもいい。そこにいてくれるだけでいい。一人は堪らない。

一人は、嫌だ。独りは嫌だ！！！！

「母さんがいないと私、どうしたらいいかわかんないよっ皆一緒にやないと嫌だよおお」

幼子にかえったかのように、思嵐は尻餅をついて駄々を捏ねた。

「思嵐っ」

恫喝どっかつされ、思嵐はびくりと肩を揺らした。

母の目は、覚悟を決めた意思の光を宿して思嵐を射抜く。

「お願いだから、駄々を捏こねないで。皆が生き延びる、一番良い方法なんだよ。

ほとぼりが冷めたら、またこの家に戻っておいで」

「　　ッッ」

そんな、の。そんなの分からないよ。

「……分かるだろう?」

思嵐は歯を食いしばり

頷いた。

「母さん、きつとだよ、きつとだからね!」

母は淡く微笑んで、娘の決意を喜ぶ。

妹を紐で背に括りつけて、思嵐は戸外に出る。何度も何度も母を  
ふり返って。

(母さん、きつと戻って来るからね　　)

もし、この時思嵐が母の手元を見ていたら、どうなっただろう。

気丈に見えた母の手は、筋が浮ぶほどきつく握り締められ、小刻  
みに震えていた。

彼女もまた、例外なく、怯えていたのである。

## 絶望

亜山は思嵐達の住む邑里の背後に控える。思嵐は灌木かんぼくを掻き分け、山に分け入って行く。

ニヤニヤン  
(娘娘(女神) 廟がある筈……そこまで辿り着けば)

辿り着いてどうにかなるものとも思われない。だが、廟の存在が一筋の光明に思えた。

(祈ろう、必死で祈ろう。きっと娘娘のお耳に届く筈)

皆を助けて。高蘭を、母を、助けて。

あの気高い高蘭が、汚らわしい姑獲鳥なぞに引き裂かれて良い筈がない。危険を冒してまで我が子を送り出した母が、死んでいいわけがない。

天帝は全て、お見通しの筈。罪なき者を、助けて下さる筈。

ふと、背中の小翠がしゃくりあげるようむずがった。

「ひいっ」

「どうしたの?」

言葉が通じるとも思われなかったが、思嵐は尋ね、それから背後



を振り返って

ひくつと咽が引きつった。

「あはっ みーっけ」

ばさり、と二枚の猛禽もつきんの翼がはためく。

紅を引いたように濡れ濡れと輝く唇を、尖った舌先がぺろりと舐める。

思嵐は、愕然としながら、どこか挟ねじれた頭の隅で不思議に思っ  
て見蕩れた。

どうして、こんなに美しいのだろう。

残酷で、残虐で、慈悲の欠片すらない。人間を引き裂き、生温かい鮮血を浴びて、ますます人外の美貌に磨きをかける異形の娘達。

吐き気がするほど美しい。

思嵐の唇はかさかさに乾いて、細かく罅割ひびわれていた。足が、がくがくと震えて、舌先は凍りついたまま悲鳴すら出てこない。

「こーんな山奥にまで逃げてたんだあーん」

「あーんな邑外れのあばら家にもババアが一匹いたしい。念の為に思っ  
てこっちにも来てみたけどーん」

恐怖に思考の麻痺した思嵐に、鉄槌を下したのは、

（あばら家にも、ババアが一匹

？）

この言葉だった。

母さん。

母さんの事なの？

「あのババア弱くてつまんなかったよねえええ」

「壁に叩き付けたら、ぐちゅって潰れちゃったあああん」

「きやはっ 潰れ饅頭まんじゅうっ」

（潰れ た？）

潰れた？

潰れた？

誰が？

母さんが、潰れた？

「あああああああああああ つっ」

悲鳴が、迸ったのにも気づかなかった。おあああつと背中が妹が泣き始めたのにも。

「まさか人がこっちまで来るとは思わなかったけどーん」



死ぬ！

死ぬ！

今度こそ死んでしまう！

もう、もう逃げられない！

私死ぬわ！！！！

死んでしまう！

「いやあああああああああ

ッッ！！」

虚空に絶叫を放つ。

追跡するは悦楽に晴を潤ませた異形の娘達。

「もっと逃げてえええええええ」

「あたし達を愉しませてエえええええええ」

足がもつれ、つんのめりそうになりながら、それでも走った。

（助けて、助けて、助けて、助けて！！！！）

背の赤子が石のように重い。

（早く、走れないっ）

涙を滲<sup>にじ</sup>ませながら、咆哮<sup>ほうけう</sup>した。

小翠は重かった。赤子の癖にやたら重かった。

どんどん重みを増しているようにすら思われる。

どこをどう走ったものか、獣道に突っ込んだ思嵐は、奇跡的にも妖女達を振り切った。

「ひいッ ひいッ ひいッ」

限界の悲鳴を上げる心臓と呼吸器官に、思嵐はひしゃげた息を繰り返す。

（か、隠れなきゃッ 隠れなきゃッ）

ぎらついた晴で辺りをきよろきよろと見回した。

直ぐ追いつかれる。

茂みに、隠れてじっと息を潜めなければ。

その時、妹が真赤になってむせ返りながら泣いているのに気づいた。

（止めてッ 泣かないでええッ）

気づかれる。気づかれてしまっ

「おおあああああああああああああつ」

震えて言う事の聞かない手で妹を縛りつけた紐を解いていく。何度も何度も手が滑った。

焦りの為に結び目が解けない。

（お願い！　お願い！　お願いッ）

しゃがみ込んで作業する思嵐は滝の如く流れ落ちる汗でびしょびしょに濡れていた。

手を上げるのですらままならず、指先なぞ痺れきっている。

（ひいいっ）

何故こんなに泣くのだ。泣けば助かるの？　助からない。余計に危険が増すだけだ！

（どうしてそれが分からないのっ）

思嵐はあまりに泣きすぎて死んでしまうのではないかとすら思われる妹に、今初めて殺意を覚えていた。

（ほど解けたっ）

ずるりと妹を降ろして、急ぎ胸に抱えた。小翠は咽過ぎむせて顔が真赤になって膨れ上がっていた。

それと同時に。



（た、助かった　　）

ずるっと脱力する。

尻を濡れた土に滑れらせるのと同時に、どっと涙が溢れた。

（助かった　　！！）

もう、動けない。

（たすか）

った。

ふと、頭上に影が落ちた。

雲が通過しているのか？

「え　？」

思嵐はぐびり、と変な音を聞いた。自分の笑みが凍りついて、咽が鳴ったのだと、後で気づいた。

「見iiiiiiiiつけたあああああああ」

娘達が異様に発達した犬歯を剥き出しにして、思嵐を覗き込んでいた。口腔は血塗れで、粘り気のある糸を引きながら、異様なまでに真っ赤ない、ろ……を……



「……あ……あ、あ」

声が、出なかった。馬鹿みたいに「あ」を繰り返す。

「あんた結構優秀ねえ、追いかけてこ堪能たんのうしたわよお」

誉められても、嬉しくない。ちっとも嬉しくない。

「でも、もうおしまい！ってあら？」

異形の娘が興味深そうに思嵐の手元を、赤子を見た。

「いいもの持つてるじゃなああい」

思嵐は硬直したまま娘達を仰ぐ。

彼女達はくすくすと示し合わせたが如く笑い始めた。

「ちよつと見てみなよっ」

「笑えるうつ」

意味が、分らない。夜行遊女は子供の柔らかい肉を好むと言うが、まさか、妹を食べる気なのか。

妹を差し出せば、私は助かるだろうか。

ぼんやり麻痺した頭でそう思う。

片方の化け物が目尻に涙を滲ませながら、

「ねえ、あんたさあ。自分の手元見てご覧よ」

思嵐は言われるまま、やはりぼんやりと抱きかかえた妹を、見た。

見て、瞠目した。

「あははッ あんた一体どこを押さえてるのさああっ」

小翠はぐりと白目を剥いていた。思嵐の手は、妹の口を押さえたままだった。ずっとずっと押さえたままだった。口も、鼻も。

あんなに妹は痙攣していただではないか。妙な呻き声を間断なく漏らしていたではないか。無視したのは自分だ。追い詰められて、無視したのは。

わたしだ。

「あ、ひ」

恐る恐る口許から手を外した思嵐は、妹が息を吹き返すまいかと期待し、がくんと仰け反った彼女に、

「うああああああああああああっ！！！！」

恐慌に妹を取り落とした。とさり、と彼女の顔は地面に埋まる。

しかし、乱暴な扱いを受けても、彼女はびくりとも反応しなかった。

たちまち人外の娘達が手を叩き、身を振って場違いな笑いを炸裂させた。

「いやーん、妹殺しよおお」

「助けるつもりで殺しちゃったのおおおっ」

「それともそのコ、あんたの娘なのおおおお？」

「どっちにせよ、こーろした、こーろしたっ」

「窒息死さあさえちゃったあああああ」

ぴょんぴょん跳ね回って悦び叫ぶ。

「よーっし、その非人間的な振る舞いのご褒美になーんと、百秒も時間を上げちゃうっ」

「もう一回逃げなさ　いいっ」

「そーれっ　いいーち、にいいいいい、さあああーん、しいいいい」

どうして、また立ち上がる気になったのだろう。

浅ましくても、どんな時にも、人間は生きていこうとする事を止められない。生への執着は、消えない。

地べたに座り込んだまま呆然とした面を晒し、ふと自分の膝を見た。本能的に、膝頭が痙攣するように跳ね上がるうとした。同時に、地面についた掌と、二の腕に力を入れた。一度泥に足を取られて、上手く動けずに、ぺしゃんと尻餅を着く。着物が土塗れになって、ますます汚らしくなる。それでも地面に手をふんばり、生まればかりの小鹿同様、ぶるぶると震えて言う事を聞かない脚で立ち上がった。

動ける。まだ、動ける。動かなければ、死ぬ。見開いた目で、それだけを考える。

再び走り始めた。

虚無をも抱えて。

走った。

足の皮が破れて血が吹き出す。転げて、顔を泥だらけにする。

それでも何度も立ち上がる。

「じゅうつうつくうつうつ、にいいいじゅうつうつ」

あの声が。

生きる。生きる。生き抜け。

逃げる事しか出来ない。反撃すら許されない。文字通り犬死にだ。

何故、これほどまでに力の差が歴然としているのだろう。何故、こんな事が許されるのだろう。

私は何か悪い事をしただろうか。それは、全く罪を犯さなかった  
 と言えば嘘になるだろう。しかし、こんな目に合わねばならないほ  
 ど、その罪は重かっただろうか。

妹など、罪を犯すほどその生は長くなかった。

誰が罰を下すと言うのだ？  
神仏か？

では、神とは何？

罰を下される私達とは何？

家畜か。我々は、人ならぬ存在に蹂躪じゅうりふされるだけの、家畜か？

(私は、家畜じゃない)

生きたい。死にたくない。

どんなに罪深くても。惨めでも。例え這いつくばってでも。

（……死にたく、ないッ　死にたくないっ……助けてっ　助けてええええええエエエエ！……！）

ぶわっと空気が、密度を濃くして震撼した。

木も草も、花も、土も、ぐにやぐにやと溶け合う。

地面は上下盛んに蠢き、空は蒼から赤へ、赤から黒へ。黒から、再び蒼へ、色を、失う。

自然界の法則が、出鱈目にのた打ち回る。崩壊する。

思嵐が走る先に、蜃気楼と思しき歪みが生じた。

泪で視界の殆んどを失った思嵐は、起こった怪異にも気づかず、ただ走り続ける。

果てに、先ほどまで存在しなかった道観（道教の寺院）が揺らめきながら姿を現し始めた。

強い想念に引きずられて、暴き立てられた位相の異なる存在である。

思嵐はやがて自分の走る先に佇む道観に気づいた。

扁額が掲げられているが、文字の読めない思嵐には何と書かれているのか分からない。また例え読めたとしても、それを読み取る余裕は彼女にはなかっただろう。

思嵐は石段を駆け上がり、どんどんと門前を叩いた。

「開けてええええっ開けて下さいっ助けて下さいっ」

お願い！開けてええええ！！！！

拳を打ちつける。幾度も幾度も。血が滲んで、閉ざされた門に血痕がべったりと付着する。その上を更に叩く。泪に濡れながら、あ

らん限りの声を張り上げて。

願いが通じたのか。

ぎ  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い

門は、開かれた。

思嵐をこれまでと全く異なる世界へ導く事になる、運命の門が。

## 道観

これは、夢だろうか。

薄紅の花びらが視界中に乱舞する。

はらはらと。ひらひらと。

それは、夢幻の、幽玄の光景だ。

あまりに平和過ぎる光景に、思嵐はただただ目を見張り、呆然と立ち尽くす。

佇むのは、一本の古木。今を盛りと桃の花が開花し、その芳香を四方へと放っている。

風が花を散らし、散った花は空中に舞う。

まるで紅い風花。晴れた日に降るといふ、あの雪。

(ど、して      ?)

どうして、今の季節に桃の花が、

あまりにも場違いで、暫し呆然自失となる。

「これはまた珍しい」

はっと仰いだ先に、階を降りてくる人の姿があった。



漆黒の道服を着込んだ、まだ若い道士である。

だが、妙な違和感　　あまりに落ち着き払った、老成した晴とその声音が、若者にしては不相応に思えた。

しかし俗世を離れ、修行に専念する者であるならば、それもまた何ら不思議な事ではないのかもしれない。

道士は思嵐に向かって訥々と語りかける。

「ここは、そなたのような娘子が来る所ではありません。家にお帰りなされ」

大きな声ではないのに、はっきりと聞き取れる。

だが、思嵐は。皮肉に、顔が嘲笑の形に歪みそうになった。

(い、え　　?)

家ですって?

家など、もうない。

もう、ないのだ。

目蓋まぶたと咽がひくひくと痙攣けいれんするのを堪えて、思嵐は驚く道士の前で地に手をつき叩頭した。更に頭を地面へとめり込むように擦りつける。口の中に血と土の味が広がった。

「お、お願いですッ お願いですから、私をここへ置いて下さい！  
追い出さないでっ 追い出さないで下さい！ 追い出されたら、  
殺されてしまうッ 死んでしまっうっうっ」

泪と汗と鼻汁とでぐちゃぐちゃになった顔で、思嵐はいつそう地面に顔をめり込ませながら、必至に嘆願した。砂が口に入ってくる  
ことなど、全然念頭になかった。

「お願いしますッ 私を追い出さないで！」

追い出される事は、死に等しい。

道士が瞠目して思嵐を見下ろす気配がする。逼迫して、娘らしい  
恥じらいも、人としての体裁さえも取り繕えない醜態ぶりに、いつ  
そう惨めさが増した。

みにくい。わたしは、醜い。泥水を啜っても、鼻汁と泪と汗に塗  
れても、砂を口に含んでも、髪を振り乱し、衣を乱し、こんな惨め  
極まらない姿でも。

どんな醜態を晒しても。

生きていたい。生き延びたい。こんなにも、こんなにも、人は、  
人は、命ある限り、生きていたい。

私は、どうして、こんなにも業深いのか。

何故、高蘭のように、母のように、潔くなれぬのか。高潔ではい  
られないのか。

それでも、生きたいと他者の慈悲に縋りつくのか。

この狂気にも酷似した熱は、どこから競り上がって来るというのか！

やがて彼は静かに口を開いた。

「何やら、私があずかり知らぬところで、ただならぬ事態が起こっている様子。とりあえず中に入りなさい。まだ若い娘さんだというのに、体中傷だらけではありませぬか」

手当てをしなくては。話はそれからしましょう。

つるりと若い顔立ちなのに、まるで幾年も降り経たような老熟した雰囲気ですう言い置いて、道士は裾を払い、踵を返した。

（追い出されない

）

そう思った途端、無惨に緊張の糸が切れた。地べたにへたり込んで、力が抜け落ちる。膝下にある土や石の感触はどこか遠く麻痺して、傷だらけの手足の疼痛もほとんど感じなかった。全身が鉛になったように重く、脱力感にもはや一歩たりとも動けなくなる。

「あ

ああ。

「あああああ

両眼から、泪が溢れ出し、止まらない。思嵐は、けだものじみた嗚咽とも咆哮ともつかないうめきを漏らした。それは人語ではなか

った。勝手に躰の奥底から溢れ出る『いきもの』の悲鳴であつた。

とめどもなく、両眼から泪が溢れ出し、砂地に吸い込まれてはなお滑り落ちた。

熱い。この泪は熱い。

火箸を当てたよりも、ずっとずっと熱い。痛い。溶解するほどに。

熱いという事は、生きているという事。

私だけが、生きているという事。わたしだけ、いきのこつた。皆、ごめんね。ごめんね。ごめんなさい。ゆるしてください。こおらんしゃおすい。たお。かあさん。みんなみんなみんな。ゆる、ゆるして。ゆるして、ゆるしてください。

「ああああああああああああああああああああ」

天を仰向いて突き上げるまま慟哭する。狂おしい熱が体内で行き場を失つて、上へ上へと競りあがって来る。口から、涙腺から、出口を求めて零れ落ちて行く。焼け付くような痛みが思嵐を襲つ。咽につかえた熱い塊を吐き出す事さえ容易にならず、ただ獣のように哭いた。

道士が撫で肩越しに視線を寄越し、地べたに座り込んで動かない思嵐を見て、眉を潜めた。

それは、放心する思嵐に対する苛立ちではなかった。痛ましい者に対する、無力な憐憫を読み取らせるものであつた。

「……余程、辛い目に合ったと見える」

それは思嵐の耳には聞こえなかったけれど。

「さ、私の肩に掴まりなさい」

思嵐はしばらく応えることが出来なかった。現実拒否を体も頭も望み、外界の感触は全て乖離して、あまりの苦痛に全身が反応してくれなかった。優しく肩に手を置かれ、その温かさにまた瞠目した。

私は、生きている。そして、安全な場所に辿り付いて、我が身可愛さに一人安堵している。

それでも、それでも。

ようやく、一つ頷いた。それから、馬鹿みたいに、何度も何度も頷いた。首が壊れてしまうのではないかと思うほど、頷き続けた。

頷き、躊躇いがちに道士の肩へと手を伸ばした。道士はしっかりと思嵐の伸ばした不健康な指先を握り返してくれた。

## 自虐

道観の内に案内され、席を勧められた。

「さあ、お茶でも飲んで臍を温めなさい」

ゆるく翠の顔料を落とし、そのまま溶かしつけたような青磁の碗。日の光に透かされ、茶の水色がまろやかな調和に美しく映える。

差し出された茶杯をおずおずと受け取って、ふと静かに波紋を描く水色に視線を落とし、覗き込んだ。たちまち、後悔に襲われる。自分の酷い顔が映って、ぎくりと顔面が強張った。裂傷だらけの上、憔悴しきった幽鬼じみた面に、顔の半分を覆う醜い痣があますところなく鮮やかに映し出されている。

何を、今更。

自嘲する。思嵐は何故か強張った笑みが口許に浮ぶのを感じながら、目を逸らし、杯に口をつけた。

「……………温かい……………」

その、温かさに驚いた。冷え切った身体中、指先まで熱が染み渡るように。

また勝手に涙が零れそうになって、思嵐は懸命に俯く。

泣いてばかりではないか。

卓の上には、使い込んで艶<sup>つや</sup>の出た茶器一式が置いてある。それがとても高価なものだろうという事は、お屋敷勤めをしていた思嵐には容易に分かった。

しかし、こんなうらびれた道観に何故？

「……あなたは、麓の村落の者でしょう？ 何があつたのですか？」

穏やかに語りかけられて、極彩色の悪夢を脳裏に呼び覚ました瞬間、顔面から血の気が引いた。

「……う、……あ」

何とか応えようとして、無様にうめく事しか出来ず、返事に失敗する。

口許に持っていていきかけた茶器が、手の震えに合わせて小刻みに揺れ、熱い茶は不安な細波を打った。それっきり紙のように真っ白な顔色で歯の根が合わず、目を見開いたまま水色を凝視するしか出来ない他のものを視界に入れたとたん、あの化け物達の影が横切りそうな気がしてたまらなかった。

「やれ、随分辛い目に合つたようすな。まだこんなに若い娘さんなのに、惨いことです。もう安心しなされ。ここは安全ですよ」

優しい言葉に、どつと晴に泪が溢れる。

「……ど、し、さま。道士、さま。らが、む、邑が」

最初は舌が回らず、言葉にならなかった。だがやがて堰を切ったように思嵐は今日一日に起きた出来事を　それはもう惨劇と呼んで差し支えないだろう体験を話した。話が終われば、またあの妖魔たちが現れるといわんばかりに、途切れることなく話し続けた。

道士は同情するでもなく、慰めるでもなく、責めるでもなく、はす向かいに座ったまま、ただ黙って聞いてくれた。

山中で夜行遊女に追われたくだりになると、

「……道士さま、私は、私は、我が身惜しさに妹を！　殺めま、した！　い、いも、妹は、まだアツ　まだ！　赤ん坊だ、に、私がッ　あ……の子のッ　は、鼻とお、口を押さ、て、ち、窒息、死させた、んです　……！」

咽も裂けよと告白する。

「わ、わた、私は妹、殺しで、す！　あの化け物、どもにもおッ殺した、殺した……て、は、囃子立てら……まし、たッ

妹を殺して、母を、置き、去り……して、こ、高蘭に、お、お、おと、囀にな……て助け、たすけ、もらった……！！　私、生きている、価値、な、て、れ、誰よりもなかったのに、それな、に！　わ、わた、私だけ、生き、残って……！！」

妹殺しが、生き残って

道士は黙って思嵐を見据えていた。それは何よりの慈悲であった。その指先が、そっと思嵐の額に触れ、張り付いた髪を払ってみせる。



「どうか、娘さん。自分を責めるな、とは言えませんが。今は己への怒りも生きる糧。ただ、どうか。今は、ゆっくり休んでください。この道観は、妖怪を一切寄せ付けぬ、一種の隠れ里にして桃源郷です」

ふと道士は視線を丸く窓によって切り取られた空に転じる。

「このように、外界が妖怪に襲われようとも、何も変わることはない、業深い別天地。壺中の天とも申します。

それゆえ、この道観は戒めに「亜山福地壺天道観」と称します」

“壺中天地”。別世界、別天地、桃源郷の意である。漢代、費長房という市役所の役人がいた。ある日露天商老翁が夕方になつて店をしまつのを見てみると、その老翁は城壁に懸けてあつた壺の中に消えていった。あの老翁は仙人であつたかと驚き、翌日自分も同行させてくれるよう頼み込んだ。老翁は了承し、一緒に壺の中に連れていってもらつと、そこは水晶の扉に囲まれて、金殿玉楼が見えた。壺の中の別天地で、二人はともに俗世を忘れて酒を楽しんだ。また、この壺公はその性も名も知られていない。昔は天界の役人だったが、役目怠慢のお咎めを受けて、人間界に流されたものだと言われる。昔話である。

亜山福地壺天道観は、このような一種荒唐無稽な伝説にあやかつて、名のつけられた道観であるようだ。

「変化を知らぬ地にて、ゆるり休養されるがよろしい。辿り着ける者は、一握りです。

普段は隠され、見えないはずのここに辿り着いたのは、恐らく貴女の強い生への執着ゆえ。それは、貴女の業ではなく、この地の業。恥じ入ることなく、生きてゆかれませ」

さて、一つ。礼を失しましたなあ、と道士は春の陽射しを受けて微笑む。

「まだ名乗っておりませなんだ。私めのことは冥想めいそうとお呼び下され。娘さん、差し支えなければ、貴女の名は？」

「思嵐すらん、思嵐、と申します」

「それは、よい名を親御さまに賜りましたなあ」

嵐を思つ。

「思嵐、嵐の後には、全ての浄化と変化が来るものです。さて、寝室にあない致しましょう」

臥榻ねどこ代わりの榻牀ながいすに横になり、暗闇の中、じつと漆喰の天井を見

つめていると。

闇の中に同化して、己が消え去り、何者からも害されず、心安らかにいられる心地がした。

夜具を胸元に引き寄せ、目尻から額にかかって泪の筋が逆流した。静かだった。物音一つせず、虫の音さえも聞こえず、静かであった。己の乱れた心も、ひやりとした夜具の冷たさに、空気の清浄さに触れて、静まって行く。

昂ぶりは突き抜けると、一転して急速に収束して冷えた石ころのような塊となった。

どうして。

ぽつんと零れた。

「どうして、こんな事になった……のかなあ」

あたし、何か悪いことしたかなあ。

夜具を巻き込んで、思嵐は目頭を熱くしながら横になった。ぎゅっと膝を抱き寄せ、丸く胎児の形になる。

何にも、悪いことしてない。

いや。

違っただろお、お前はあ、妹をお、殺したんだろお。

「……ッひ、」

ぐう、と変な音がして。咽が鳴って、思嵐は鳴咽を噛み殺した。  
熱い涙が流れ、息苦しくなる。炎と煙幕に包まれ、呼吸すらまま  
ならない、焼け付く空気を思い出す。

おかあさん。おかあさん！

耳鳴りがする。夜行遊女に追いかけられたあの絶大なる死の恐怖  
を思い出すとともに、脳裏に蘇る鮮やかな声音。

『ぐちゅって潰れちゃった』

『きやは、潰れ饅頭！』

ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああ！

耳を、塞ぐ。膝をきつく胸に寄せて。

呪わしい。全てが、全てが呪わしい。

天よ、何故惨い運命をお与えになったのですか？

呪われるがいい。

呪われよ。全て、呪われよ。

「……ひッ ふ……う、ぐう……ッ」

体の震えが収まる事も、鳴咽が途切れることもない。くぐもった  
声を漏らしながら、一夜を明かした。



## 平天大聖の黄泉返り

再び、邑。

「大姐<sup>ねえさま</sup>ア、全部ぶっ殺して来たよおおおお」

「きやはっ 任務しゅうりよおおおおお」

羽音とともに、身をくねらせながら、形ばかり優美な乙女たち  
その本性は殺戮の女怪 が、邑の広場に降り立つ。辺りは濃厚  
な血の香りと、ぶちまけたような赤、赤、一面の深紅に、今やただ  
の物言わぬ肉怪となった邑人達の姿。

仰向き、苦悶の形相で絶命した者、顔半分が抉り取られている者、  
我が子を庇って背を切り裂かれ、子供を腕に抱いたまま一緒に串刺  
しにされた母子、胴と脚が擦じ切られた者……坊主が説法に使用す  
るあの地獄絵図に他ならない。夜の闇の帳で覆い隠しても、なお腐  
臭に満ちたそこに、場違いに美しい少女達がけらけらと笑いながら  
一匹、また一匹と集まって来る。

「ご苦労様。一人残らず、ね？」

とりわけあでやかな立ち姿の美女が、仲間達を労う。今回の襲撃  
は、夜行遊女の一の姉である月下公主の指揮の元行われた。

「あはん、月下大姐、どうして皆殺しなのおお？ あたし、男を一  
匹くらい生かしておきたかったのにいい」

「いやアン、このコ、いーんらーん！ 人間の男漁りばかりやってんだからあ」

「何よお、あんたたちだって、しょっちゅう気に入ったのだけ連れて返って種馬に生かしておくじゃなあい」

「しばらくねえ」

「そうそう、厭きたら食べちゃうしい」

きやはっ と夜行遊女たちは羽で互いをどつき合いながら、無邪気に笑う。

「何で最近は、適当な男を生け捕りするのもダメなのおお？ 皆殺しばかりじゃあつまんあいよお」

「やあらしいいつ」

「あんたもね！」

「きやははっ」

騒ぐ妹分達に、月下公主は蠱惑的な下唇にほっそりとした指先を当て、

「そうねえ、説明してなかったわねえ。どうしようかしら？ おまえ達、『牛魔王』様をご存知よねえ？」

「牛馬ちゃん？ 誰それ？」

「牛魔ちゃんでしょう？」

「知らない」

月下公主は「やっぱり」と眉根を揉む。

「だから説明しなかったのよ。やれやれ、若い娘達はもうかの牛魔王様をご存知ないのねえ。世代の溝を感じちゃうわあ」

「年増なのねえん」

「……」

目にも止まらない速さで、月下公主は暴言を吐いた妹分の首を鷲掴みにした。腕から先が妖鳥のそれに変化し、ぎりぎりと締め付ける。

「何ですって？」

張り付いたそれは、綺麗にはいた笑顔である。

「……ごめ、ごめん、なさいっ ゆゑ、しッ」

地面に重い物が落下する音がして、

「二度とそんな台詞を吐くものではないわよ？」

睥睨する冷やかな笑顔に、こくこくと激しく頷く。



「こえええ」

こそこそと妹分達は大姐に歳のことを言つのは禁句だわね、と囁きあつた。

月下公主は何もなかったことにして、妹達に向かつて語り始めた。

五百年ほど前、東勝神洲は傲来国、花果山福地水廉洞洞天、ここに一匹の石猿があつた。その神通広大なことは周辺に轟き渡り、水廉洞は馳せ参じ軍門に下る有象無象の妖怪で溢れた。

やがて石猿はとりわけ妖力甚大なる六の魔王と義兄弟の契りを交わした。石猿を加えてこれを七兄弟とする。兄弟の長兄は『牛魔王』、これを『平天大聖』とも称す

「これがそもその始まりよ」

「分かんないよお。その魔王七人義兄弟のいつちばん兄貴が牛魔王ちゃんなのでしょおお？ それがどうかしたのお？」

「お馬鹿な子ねえ。ところがこの七人義兄弟の内、行方不明がほとんどなのよ。我らが夜行遊女族の父、鵬魔王様とていずこにいらっしやるのか、所在知れず。ようやく行方がつかめたのが、牛魔王様というわけだね」

「牛魔王ちゃんどこなの？」

「だから。それを探し申し上げているところなのよ。全く、どこでもかしこでも好きに襲っているわけじゃないのだから。きちんと羅盤の示す所、法則に従って村々を襲撃しているのよ」

「何でええええ？」

「法則ってなにいい？」

「うふふん、どうも牛魔王様は仮初のお姿で　つまり、」

月下公主はそこで言葉を切った。

風の匂いに、濃厚な血臭　そして、もはや夜行遊女を除いて犬一匹人つ子一人動くものもないこの地に、

「誰か、いるわね」

途端に姦しく騒いでいた面々はふと無表情になり、血を吸っていやなお赤みを増す唇をにいつと吊り上げた。

「まだまだ、生きている人間がいたのかなあ？」

「しぶといわねえ」

白く細い指先に、肉を抉り、骨を断つ鋭い妖爪がびきびきと弾ける音とともに盛り上がって来る。

「やっちゃんおつかあ」

心弾むよう笑う妹に、

「お待ち！」

鋭い制止を月下公主は放った。

「この、けはいは……」

まさか。

期待に、彼女は血も滴らんばかりに妖艶な笑みを浮かべた。

「大当たりだわ」

無造作に積み重ねられ、こそげた肉とこびりついた血で無残な姿を晒している村人達の亡骸。

「ひ！」

妹達の間悲鳴にも似た音が走る。

死屍累々と横たわる人体の下から、白い手がおいでおいでをするように天に向かってさし伸ばされていた。

夕日の赤を鮮血でも浴びるようにして、それはゆらりゆらりと頼りなく、しかしどこか不安を掻き立てる不気味さをもって揺れる。

「生きて、たの？　ぶっ殺した筈なのに」

不満というより、不審そうな声を上げる妹達に、月下公主は「いいえ」と満面の笑みで首を振る。

「死んだのよ。そして、生き返ったの。蘇りを果たされたのよ。」

牛魔王様は人間の姿に身をやつして、顕現される。

それは、その人間としての生を受けた地に、血縁者並び近親者並び縁故ある者全ての血を吸わせた後、妖怪の王として黄泉返りを果たされるだろう。まさに、その通りになったわけね」

お出迎えしなければ、と指示を飛ばす。慌てて駆け寄って行く者を尻目に、呑気な妹分が不満そうに尋ねた。

「ねえ、ねえ、どうして一回死ななきゃダメなのお？」

「転換をなさるために」

「何それ？」

「万物は陰陽の気で出来ているわ。天の気は陽気、地の気は陰気、そして、「人の気」はこの天と地の気が混ざり合うもの。」

男は陽気に偏り、女は陰気に偏りこそすれ、完全にどちらかの気に染まることはありえない。

でも、稀にそうではない者がいる。完全に近い、純然たる陽気を養う者、陰気を養う者。これが一片の不純物もないまでに昇華されると神仙や妖怪となる。

そして、生者が陽気に偏るなら、死者は陰気に偏るの。つまり、『死』は気を逆転させるもののよ。もし全くの陽気しかもっていない者が死んでしまったら、全てが完全なまでに陰気になる。つまり、妖怪になるということね」

「何か分からないけれど、なんとなく分かったかもお」

「……」

「つまり、死んでしまうと、それをきっかけに引つ繰り返るんですよ？ ぜええんぶ。良い人は悪い人に、悪い人は良い人に！」

「違っけれど、まあそれでよしとするわ」

待ちかねた狂乱の宴、恐怖の夜の始まりよ      夜行遊女は嗤った。

## 妖樹の卵

朝方の道観である。

眠れば、腹がすくものだ。

思嵐は空腹を感じて目を覚ました。日はすでに高い。

上半身を起こして呆然と朝の冷気を肌で感じた。

おかしい。こんな時でも、体は食べるものを欲求するのだ。これが私の浅ましさだろうか。自嘲の笑みに片頬を歪め、借りた夜具をきちんと綺麗にたたんでから寢床を抜け出した。

清風の吹きぬける石造りの道観内を歩き、朝餉を持って来た冥想と廊下でばったり鉢合わせる。昨日からろくに身づくろいもしていない事に気がつき、慌てて顔を俯かせた。前髪で自分の顔が全部隠れてしまえばいいと願いながら。親切にしてもらった冥想には、いつそう醜い痣を見られたくはなかった。それは酷く恥ずかしく、耐えられない苦痛だった。

「あ……あの、おはようございます。申し訳ありません、遅くまで寝てしまつて……」

咄嗟に謝ると、冥想は面食らつたように目を瞬かせた。

「いえ、事が事ですから、どうかお気になさらず……それより」

冥想は思案げにうつ伏せた思嵐の面をまじまじと見る。

「あの、何か？」

「いや、まずは腹ごしらえをしてからに致しましょう。そうですね、食べながらもお話致しましょうか」

「……あ……は、はい」

訳が分からないまま、とりあえず頷いた。

「どうも不思議なのですが、昨日お会いした時は、女性は男性より陰気に盛んとはいえ、過度に陰気を帯びていらつした。

むしろ、陽気が全くないというのが正しい。全てが陰気であるとは、普通ありえない。」

しかし、一夜明けてみれば、発散する気は全て陽気になっている。昨日は、大変恐ろしい目に会われて、心と体の均衡が崩れ、たまたま陰気が盛んになったとしても、今日のこの変わりようはなんなのか。皆目検討つかぬのです」

「あ、あの。それは何か問題があるのでしょうか？」

「普通人は天地の子ですから、陽気も陰気も帯びているものです。」

男性は外側を陽気で覆い、内側に陰気を包み込む。女性は逆に陰気で外側を覆い、内側に陽気を包み込みます。このように、互いに陽気か陰気のどちらかが盛んではありますが、完全に一つの気に転ぶことはない。

これが全くどちらかに染まるとなると、それは神仙や妖怪ということになる。

無論、人の中にも稀にほとんど陽気、ほとんど陰気、という者もいます。しかし、それもほどの話です。全てあますところなく完全な陽気、陰気というのは人外の領域ですから……」

思嵐は必死に話に追いつこうとして、どうにか口を開いた。

「一夜にして、陰気と陽気が完全に逆転した、というのも問題なのですよね？」

「はあ、問題というか、不明ではありますなあ。何、ぴんしゃんしておられるなら、特に不安に思われることもないでしょう。なるようにになります」

「……そ、そうなのですか」

「そうなのですよ」

冥想はカラカラと笑った。つられて、思嵐の頬にも僅かに笑みが出る。のぼる。

「さて、小難しい話ははさておき、朝餉をゆっくり召し上がられよ」



「ありがとうございます」

思嵐は胃に優しい朝粥を頂いた。白い米など本当に久しぶりに口にしたので、あやうくまた涙が零れるところであった。

「さあさあ、こちらの桃もぜひ召し上がって下され」

しきりと勧められて、瑞々しい桃の果実を口に含む。

口腔に清らかな甘味が広がり、思嵐は驚いて目を瞬かせた。

「このように美味な桃は初めて頂きます」

「はは、何これは水蜜桃と申しまして、かつては西王母の蟠桃園（ぱんとつえん）蟠桃は仙境になる桃）になっていた桃を、孫悟空なる大妖が貪り食い散らかし、その種を下界に投げ捨てたところ、根を張ったものといういかにもそれらしい伝説を持ったものでして。まあ、そう思って召し上がれば、なおいっそう風味も品格も増して美味しく頂けるというものですなあ」

「まあ」

思嵐は冥想の冗談に口許を綻ばせた。顔の痣を見せることにはどうしても抵抗があり、真っ直ぐ冥想の顔を仰ぐことは出来なかったが、昨日の今日で笑うことの出来る自分が不思議であった。

人は、痛みを忘れるものなのだ。

ともすれば、すぐ足元に広がる黒々とした闇に足をすくわれそう

になる。だからこそ、思嵐は笑うことで己の闇から目を逸らしていたかった。何も、考えたくはなかった。

「ところで、思嵐。今後の身のふり方はもう考えられましたかな？」

「……あ……そ、それは」

ぎくりと笑みが強張った。ここを出て行けと言われても、思嵐は外に一步でも出ることが恐ろしくてたまらなかった。何より、邑が壊滅しただろうに、一体どこへ行けばいいのか。冥想の慈悲にいつまでも縋ることは出来ない。かといって、自分は生きていくための技量を何一つもっていない。この顔と体では、春をひさいで生きていくことさえ不可能だろう。

冥想は目尻を緩め、穏やかに微笑んだ。

「もし行く当てがありませんでしたら、この道観に止まられてはいかがですか？ 無論、ここを仮の宿とする以上は、道観の運営にたずさわり、日々の修養を積んで頂くことにはなりますが」

「ぜひ！ ぜひお願い致します！」

思嵐は勢い良く頭を下げた。願ってもない言葉だった。膝に置いた手は、白く筋が浮き上がるほど強く前かけを握り締める。

「お世話に、なります……！」

「やや、そのようにかしこまらず、どうか頭を上げて下され」

「いいえ、親類縁者一同を亡くし、その上自ら妹の命を殺め、畜生

道に陥った今、残りの人生は道門に捧げ、罪を悔いとうございます……！」

「……お気持ちは察して余りあります。とはいえ、ここは道観の形態は取ってはありますが、仏門の修行も合わせ執り行っている異端の流派です。それでもよろしいか？」

「道教でも仏教でも、妹を、母を、邑の人々をねんごろに弔うことが出来ましたら、本望でございます」

「相分かり申した。では明日からさっそく修行に取り掛かりましょう。今日はとにかくゆっくり体を休め、心を平らかになさって下さい」

「はい、ありがとうございます」

こうして、亜山壺天道観において、思嵐の修行が始まったのである。

四季の巡りとともに、山々は紅葉し、二度目の秋を迎えた頃。

壺天道観の前庭に一本植わった桃の樹。思嵐はこの桃の樹が好きだった。

どうしたわけか、水蜜桃を食べる度、思嵐の顔の半分を覆う醜い痣は薄くなっていき、今やほとんど目立たぬようになっていた。師

父は笑って冗談にされるが、これは本当に仙桃であるに違いないと、思嵐は確信した。きつと思嵐が負担に思わないように、そのように言って下さったに違いない。

「日々、感謝致します」

思嵐は唱えて、桃の樹に手を合わせた。

冥想は、恐らく地仙であった。

仙人には、三種類の様態がある。すなわち、天仙、地仙、尸解仙<sup>しかいせん</sup>である。

人間の姿のままで単に登ったものを天仙といい、天に登らず、地上で意のままに居るものを地仙という。また、人間の姿のままではなく、一度死んだ後、その精霊が身体から抜け出して、精霊だけが仙人になったものを尸解仙と称す。

これはそのまま仙人の位でもある。

思嵐は地仙である冥想に師事して、人体の中枢である、頭部・心臓・臍下<sup>さいか</sup>の三か所に住む、老衰や疾病、霊障などをもたらす虫これを三尸虫<sup>さんじちゅう</sup>というを駆除するため、米、麦、粟<sup>あわ</sup>、黍<sup>きび</sup>、豆の五穀を断っていた。五穀は形ある身体を維持するものではあるが、同時にその身体を鈍重にし、心気を濁らせる。しかし五穀を断てば、この三匹の死に至らしめる虫を弱らせることが出来る。こうして五穀を断つことを辟穀<sup>へきこく</sup>という。

清浄な暮らしをしているためだろうか、思嵐は己の身体の内側から清々しく心気が漲るのを感じていた。何より、痣が薄くなってい

くことが、本当に嬉しくてならなかった。真っ直ぐに顔を上げて、人の顔を見ることが出来る。その何と幸福なことだろうか。

一方、穀物を断てば、気は精妙になるが、当然身体は栄養失調になる。そのため、五穀を摂取せずとも生きていけるように身体を作り変える必要がある。五穀に代わって摂取するものを服餌ふくじという。思嵐の仕事は、この服餌になるキノコや松の実などの薬石やくせきを集めることだった。これは仙薬になる。

思嵐は、一つ一つ得られる知識を大切にした。

立ち上がって裳裾すそを払い、道観の結界地にある薬石を取りに行く。

裏庭の洞門を出て、軽妙な足取りで細い山道を登れば、目当ての薬石はたちどころに見つかり、花や若葉を摘み入れる花筐はながたみはすぐに必要分でいっぱいになった。

「このぐらいでいいかしら」

五臓六腑を養い、人体を損なうことのない上級な君薬に加工するのは、冥想の仕事である。思嵐はまだまだ修行の戸羽口に立っているだけで、大した手伝いも出来ない。

はやく、もっとお役に立てるようにならなければ。母や、妹や、高蘭や、邑人達を供養するためにも。

そのように思い願いながら、そつと嘆息する。

と、思嵐は突如として、項から背中に向かって総毛立った。

忘れもしない、この邪悪なけはい。たちまちどつと汗が噴き出る。

「な、に？」

慌てて周囲を振り仰ぐ。空は高く、空気は清々しい。それなのに、違和感はますます膨れ上がる。

見慣れた景色に、違えようもない異物が混じっている。

どこ？ どこなのだ？ どこからこのおぞましいけはいは……

あった。

雨水を吸って黒々とした土と濡れた草の間に、埋もれるようにしてそれはあった。

「……た、まご？」

赤黒い色彩は、思嵐にあの地獄の一夜をまざまざと思い起こさせた。

「これは……」

指先を伸ばしかけ、喰らいつかれそうな邪悪なけはいに思い留まる。

師父をお呼びしなければ。

きつと口許を真一文に結び、思嵐は踵を返した。

師父に事と次第を説明して、例の卵を見つけた場所に案内すると、

「これは……」

師父は珍しく気難しい顔をして黙り込んだ。不安になった思嵐は思わず、

「何か不吉な兆しでございますか？」

「はあ、兆しというより不吉そのものですなあ。これは妖樹の卵です。一度孵化して根を張ってしまつと、もはや撤去することは不可能です。これをどこか遠くへ捨てて来なければ」

「遠くへ？」

「ええ、それこそ海のだ真ん中に捨てて来なければなりません。下手にうつちゃつては、その土地に根を張ってしまいますからね。何、往復、十日ばかり道観を留守にすればよろしいでしょう」

「十日も！」

「いえいえ、たったの十日です。思嵐、私の留守中この道観の境界守をお願い致します」

「……はい」

思嵐は泣き出しそうになるのを必死で堪えた。

私は、結界地の外に出るのが怖い。

だから、師父が代わりに卵を捨てて来て下さるのだ。せめて留守を預かるくらいはお勤め果たさなければ。

「では、今すぐ出ましょう。これはもうすぐ孵化してしまう」

「は、はい」

師父はほとんど旅支度らしいものもせず、五色雲に乗って道観を出た。思嵐は空を見上げて、師父の乗る五色雲を見送った。

師父、どうかご無事でご帰還下さいますよう……

近年矮小な妖怪ですら我が物顔で人里に降りて行き、女子供のみならず男達もその猛威に怯え震えているという。結界地を出て旅をするようなことがあれば、その出現によって命を落とすような事態に陥らないとも限らない。

師父ならばきっと大丈夫だろう。きっと。

思嵐は手を合わせて祈った。

それから数日もしない内に、事態は最悪の事態を辿る。

思嵐が出迎えたのは、元気に笑う師父の姿ではなく、鉤裂きにな



った道服から肉の赤を晒して息も絶え絶えに結界地へと転がり込んだ冥想の姿だった。

「師父、これは一体！ お体は……」

駆け寄る思嵐に、

「やれ、情けないことになりました。妖樹の卵を捨ててくることは出来ませんでした。あれはすぐに孵化してしまったのです。結界地ももうすぐ破られることになるでしょう。孵化すると同時に、示し合わせたよう妖怪の大群に襲われました。もはや一刻の猶予もありません。奴等はすぐにここまで攻め入って来るでしょう」

「！」

思嵐は愕然とした。ここも安全な地ではなかった。ここも、あの邑落のように蹂躪され、私は母のように殺されるのだ。

「……う、あ。あ、師父、師父！ 一体どうすれば……」

がちがちと歯の根が合わない思嵐を見て、冥想は柔らかに微笑んだ。

「大丈夫です、今から言うことをよくお聞きなさい。そもそもここに何故道観を中心とした結界地が敷かれていたのか。それは、この地に天界へ続く道が隠されていたからです。そのため道観を築いて塞いでおったのです。妖怪たちは今天界に向かって侵攻を企んでいます。天界に続くこのような桃源郷はいくらでもあるのですが、番人がいてその侵入を防いでいたのです。お前は今からその道を通って、天界へ行きなさい。そして、援軍を頼んで来るのです。それ

までは私が妖怪を食い止めます。よろしいか」

思嵐は意味が分からず、呆けて何度も頭を縦に振った。

天界へ続く道？ 天界とは本当に存在したのか？ だが、師父は確かに仙術に通じておられる。では。では。それは真実？

「裏手に符を張った隧道があつたでしょう。あの符を剥がして、進みなさい。段々道は険しくなり、最後にはほとんど垂直の道を這い登らねばなりません」

はっと師父は天を仰いだ。

思嵐もつられて、

「ひ！」

いた。また、紺碧の中に黒い蟲のようなものが浮かび、段々とその黒点は大きさを増して行く。

「急ぎなさい！ 走れ！！！！！」

師父の怒声に、思嵐は飛び跳ねるよう立ち上がって、走り出した。

## 隧道

思嵐は汗で滑りながら、どうにか幾重にも張られた符を筆るよるに剥ぎ取って、洞穴に飛び込んだ。

「ごお、と内側から唸るような風が吹きつけた。それは侵入者を威嚇する獣の咆哮に似ていた。

どこまでも続く闇の道は、いったん呑み込まれたら二度と日の光のもとに帰れるとは思われなかった。

おおおおおおおお おおおおおおん！

再び恐ろしい豪風が吹きつけた。思嵐の頤を大粒の汗が滑り落ちた。限界まで目を見開き、思嵐は岩肌を手をかけ、竦む足で中を覗き込んだ。

「師父……！」

呟いて、中に飛び込んだ。転げそうになりながら、必死に走った。

いつの間にか脊は脱げ、裸足で洞穴を走る。血が噴出し、泪で両頬は濡れた。

はやく。はやく！ はやく！！

一刻も早く、辿り着かねば！

師父をお助けしなければ。

また、私は逃げるのか。一人だけ、逃れるのか！

今度こそ、助けなければ。

死んだ。たくさんの人が死んだ。殺された。どうか、今度こそ救  
わせ給え。

天よ、どうか師父を殺さないでくれ！

洞穴はどんどん道幅が狭くなり、急勾配になって行く。師父のお  
っしゃった通り、井戸の底から出口を目指すように垂直の道を這い  
登る。

まるで、断崖絶壁だわ。

ぼたぼたと汗が滑り落ちた。どうにか岩の突き出た部分を掴み、  
足の指で尖った壁面を挟み、支えた体を上へと押し上げる。爪が一  
枚、また一枚と剥がれ、指先がじんじんと熱を発して激痛が走る。  
汗で髪が頬に額に張り付き、目が酷く痛んだ。

かえりたい。ひきかえし、たい。

逃げるのか。師父のお言葉を口実に私はまた一人安全な場所に逃  
げるのか。

どうなのだ。

自問自答しながら、両手両足を使って、必死に岩肌を登った。痛みを凌駕する何かと思嵐を追い立てた。

時間がどれほど経ったのか、感覚が麻痺して分からなかった。

ただしんどくて、水が一口でもいいから欲しくてたまらなかった。水分は失われていく一方で、尿意すらもはや起こらなかった。

苦しい。辛い。もう厭だ。まだ光は見えない。暗い。真つ暗だ。どこまでも続く永劫の闇。自分も闇に取り込まれる。腕がだるい。全身が鉛のように重い。もう、腕が上がらない。足の指がぬるぬるとして、滑り落ちそうになる。

死ぬのか。今、この機械的に動く手を止めて、力を抜けば、急転直下して底まで転げ落ち、首の骨を折って楽に死ぬことが出来るだろう。

安楽な方へと思考が流れる。必死に唇を噛んで、鉄錆にも似た血の味で正気づく。

……はっ……はっ……はっ

音が聞こえる。自分の乱れた息の音だとうややく気がついた。果

たしてまともに呼吸をしているのかも分からない。腕が麻痺して毛細血管が破裂したのが分かった。きつと広範囲な痣だらけだろう。二目と見られない酷いありさまだろう。鋭い岩が思嵐の肌を切り裂き、爪は一枚も残っていないかった。足の指で切っ先鋭い岩肌を掴んで、右手を上げ、左手で押し上げ、よじ登る。

足の裏を何度も切った。もうどれだけ血が流れたのか分からない。血塗れだろう。土と血で固まって、また同じ箇所を切る。ずぐずぐと突き抜ける痛みに頭が正気づき、激痛を感じていた筈なのに、いつの間にかそれすらも感じなくなっていた。完全に神経が麻痺していた。

泪と土埃と汗が混ざって、目が霞む。体液がどんどん失われて行く。吐き気と眩暈で気が狂う。

もう腕が上がりません。脚ががくがくと震えて、言う事を聞かないのです。

まだ闇の中。どこまで行ってもどこまで行っても、暗闇が深閑として広がるだけ。出口など、あるの？ 本当にここから出られるの？ 今更、降りることなど不可能ではないか。進むしかない。だが、手足が、もう言う事を聞かない。

いつまで行けばいいのだろう。感覚がない。お願い。助けて。苦しいよ。母さん。高蘭。どうして。私ばかり、こんな目に合わなければならぬの？ どうして静かに暮らせないの？ もう厭だ。も

う厭。助けて。助けて！

師父・・・・・・・・師父！

はっと目を見張った。泪はもう枯れていた。

師父……！

助けなければ。師父のおっしゃるよう、援軍を呼ばなければ。

静止していた身体が、再び動き出す。思嵐は妄執と成り果てて、ただひたすら手足を動かし続けた。

暗闇に慣れ、思嵐の視力は失われていた。

永遠にも近い時間を過ごし、やがてぽつんと針穴のような光の点が見えて来た時にも、思嵐は咄嗟にそれに気がつくことは出来なかった。

光。

それは天人の光臨のように溢れ出し、草草の青い匂いが立ち込め、涼やかな清風が一陣洞穴にその芳香を運んだ。

思嵐の鼻先をその風が掠めた。

ひかりだ。

洪水のように光が溢れる。

眩しくて眩しくて、目を開けてはいられなかった。

思嵐の左手が、宙をあおいだ。掴むものがなかった。

慌てて右手は周囲を彷徨い、濡れた何かを掴んだ。

黒土と草。

出口だった。

終着点、だった。

思嵐の目に、枯れた筈の泪が溢れた。

草原か、それとも花畑か。

萎えた力を振り絞って、思嵐は穴から外へ這い出した。

これは。



一面の花畑、草の瑞々しい青。

本当に、天界だろうか。

ついに自分は辿り着いたのだ。

「まだ……」

まだ、駄目だ。

唾すら出てこなくなった口腔は、ひゅーという掠れた音を漏らし、声にはならなかった。

血塗れの手足で、思嵐は再び立った。木立の向こうに、水晶で囲まれた塀が見えた。

いかなければ。

あそこまで、辿り着かなければ。援軍を、呼ばなければ。

思嵐は狂人めいたぎらぎらと暗く光る眼で、足を引きずって歩き出した。その後には、点々と血の痕が残された。

## 蟠桃勝会

今にも崩れ落ちて、倒れ伏してしまいそうだ。一度地面に膝をついたら、二度と起き上がれないだろうと思嵐は本能的に心得ていた。それゆえ、決して歩みを止めるつもりはなかった。倒れ伏した時は、自分が短い生涯を閉じる時だと。

その時、思嵐という、あまり幸福ではない人生を送った少女。その体の奥に燃え盛る命の青い炎は本来すでに燃え尽きていたのかもしれない。暗闇の中を延々と、それこそ永劫に思われる時間を経て断崖絶壁を登りつめた。爪は剥がれち、足の裏はずたずたに切り裂かれた。人間の限界を超えた運動量は、思嵐から全ての生命力を奪い、その姿を狂人めいた異形のものに貶めていた。筋肉は断裂して、毛細血管の破裂のため、全身薄青く腫れあがるまでになり、血のこびり付いた乱れ髪はもはや白髪と化した。

思嵐を動かしていたのは狂気から滴り落ちる妄執だった。今まで無理不尽な人生に対するやり場のない憤怒と、自分を救ってくれた師を、今度はお助けしなければならぬという確かな使命感が思嵐の木偶の坊じみた瘦身をひたすら前へと突き動かして止まなかった。

血痕を残しながら、思嵐はほとんど視力が失われ、明暗しか感知出来ない眼を見開き、いつ事切れてもおかしくなくずたばろの体で歩き続けた。かすかな芳香が風に乗って思嵐の鼻腔をくすぐった。きっとここは貴いお方の果樹園なのだろうと思い、不法侵入している自分を酷く惨めに取り返しよのない愚物のように感じた。それでもいい。何でもいいからと見えない視界を手探りで歩き続ける。初めて日の光を目にした土竜同然に、深い穴蔵から出て来た時、思

嵐の視力はすっかり奪われ、むしろ失われていた。しかし最後、網膜にしかと焼きついた、あの水晶宮に辿り着かなければならない。あそこに辿り着けば、きっと何とかなる。それだけの思いでもう一歩も歩けないと思う足を、前へ前へと押しやる。自分の命を削るようにして、あの水晶宮を目指す。

そのような幽鬼じみた思嵐の姿を目にした者が、妖怪と見誤って悲鳴を上げたのは当然の成り行きであつたかもしれない。

「ひ」とかすかな女の悲鳴に、思嵐の鼓膜はぶるりと震動し、驚きのあまり足がその場に縫い付けられた。

「あれは一体」

「妖怪か！」

戦く声は複数。思嵐の方が恐慌状態に陥り、よってたかつて暴行を受けるのではないかという恐怖に身が竦んだ。

ものが、よくみえない。

何をされても、抵抗など出来る筈もない。乳色に白濁した視界の上、体力の限界を感じていた。腕一本上がらないだろう。どうしたらいいいのか分からなかった。恐ろしさのあまり、進むことも退くことも出来ずに、思嵐はただ呆然と立ち尽くして相手の出方を伺った。

「いいえ、違います」

清風に乗る凜とした声音に、声の聞こえて来た方向に首を巡らした。木々の間にぼんやりとした人影が見えた。赤い着物を着ている

ように見えた。赤の塊にしか見えなかった。

その人は裳裾をさっと払い、しなやかな中にも堂々とした足取りで近づいて来る。

「その娘は妖怪ではないでしょう。尋常ではない身なりですが、下界の人間のようなですね。そなたは、一体どこから参ったのです？」

とても逆らうことの出来そうにない詰問口調に思嵐は瞠目したまま返事することが出来なかった。どんなに頑張っても声が出ないのだった。声帯が剥がれ落ちてしまったのではないかと自分でも疑った。もう自分は声すら出ないのか。どうしてそれで助けを求められようか。口惜しさ、不甲斐無さに焦燥感ばかりが募る。

相手は思嵐が黙秘したと思ったのか、じろじろと値踏みするけはいがあった。

「何ゆえ天界に？ そなたは仙の修行をしていませんね。どのようなしてここまで登って」

女は言葉を止めた。思嵐が必死に声を絞り出そうとして、ひゅうひゅうと空気の漏れる音しか出ないことに気がついたのだ。その上、命の炎はもはや風前の灯火であった。何故この娘がまだ生きて動いているのか、その方が不思議だと高位の女仙は眉を潜める。

「仕方ありません。西王母様のお達しで緒神・諸仏を招く『蟠桃勝会』のために積んでいたのですが、これを一つそなたに授けて上げましょう」

せいおうぼ。

信仰の対象でありながら、現実の存在としてはほど遠いその確かな名前に、思嵐は目を見開いた。

同時に瑞々しい芳香が立ち上り、思嵐の罅割れた唇に冷たくて甘い何かが押し付けられた。

「お食べなさい」

言われるまでもなかった。思嵐は与えられたものを貪り食った。すぐに効能は現れた。体の芯に火が灯り、血汐は熱く脈打ち、盲目の世界から色の奔流が押し寄せた。

「……………あ……………」

「無理に声を出すことはありません。事情はおいおい聞きましょう」

女仙は遮ったが、思嵐には血を吐いてもいいから、今伝えなければならなかった。

「……………どう、か、せいおうぼ、さま、に、おつたえ、ください。こてん、どうかん、が、ようかい、に、おそわれ、まし、た」

どうか、お助け下さい。援軍を

それだけ伝えきつたか分からない内に、思嵐の意識は容易く暗黒に呑まれた。

## 高蘭

体を蝕む悪夢。じくじくと痛む指先を見ると、爪が全部剥がれ落ちて赤い血がこびりついている。ふと泣き声が聞こえて背後を振り返れば、闇色の中に白い布に包まれた何かが埋もれていた。

おぎゃあ、おぎゃああ、おぎゃああああ。

耳鳴りのする薄気味悪いそれは、神経を逆撫でして止まず、いつそ黒々と胸を塞いで吐き気のする色に塗り潰す。

ああ、わたしは、これを知っている。

裸足のまま歩き出す。声は大きくなる。鼓膜を揺さぶり、悪夢を呼び覚ます。

足がずぶりと地面にのめり込んだ。

「ひっ」

足首を誰かが掴んでいる。血塗れた腕がたくさん地面から突き出して、怨みがましく揺れる。お前だけ、助かった。お前だけ、助かった。一人だけ。

ごめんなさい、許して下さい。

赤子の声がいつそう大きくなり、むせたように時折引つ繰り返りながら狂ったみたいに泣き叫ぶ。もう、許して。しゃおすい、あん

たを故意に死なせたわけじゃないのよ　　！

絶叫して耳を塞ぎ、つんざく悲鳴を遮断するよう膝をついて縮こまる。

はたり、と羽ばたきがして、長い影が落ちた。

『きゃは。壁に叩きつけたら』

『ぐちゅって潰れちゃった！』

『今度は、あんたの番ね！』

『逃げろ』

『にiiiiiiiiiiiiげええええろおおおおおおおおおお』

「うあああああああああああああああああああああああああああああ  
あ！」

悲鳴とともに、がばつと上半身を起こした。

「……はあ、はあ」



忙しい息を吐きながら、自分が強く掛け布団を握り締めていることに気がついた。

ここは……？

そこは見たこともない白い美しい室<sup>へや</sup>だった。丸窓から日の光が差し込む。臥榻に寝かされ、思嵐はぼんやりとした面持ちで、いつの間にか目の摘んだ薄絹に着替えさせられていることに気づき、驚いて襟元を引っ張った。

「お気づきになれましたか？」

涼やかな声音に、指先が固まる。慌てて振り仰ぐと、そこには貴人に仕える侍女のような格好をした女性がいて、弦首の水差しを持ったまま優しく微笑んでいた。

「あ、あの」

「咽が渴いていらっしやるでしょう？　お水はいりませんか？」

言われて、酷く咽が乾いていることに気づき、次の瞬間には色と音の奔流が怒涛のうねりとなって決壊した。

「ま、待つてください　ここは、ここは天界ですか　！？」

侍女の女性は瞞を瞬かせ、思嵐は余程自分が気狂いじみた台詞を口走ったと後悔に襲われた。

天界　。馬鹿げているにも程がある。

しかし、侍女は小首を傾げて、

「確かにここは天界です。西王母さまの管理なさる崑崙の一角ですが」

全ての空白が今ぴたりと埋め合わされた。思嵐は髪を振り乱して、侍女に取り縋った。

「お、お願いです！ 地上の壺天道観が妖怪の大群に襲われたのです！ どうか、援軍を、援軍を送って下さい！ 師父が 師父が 殺されてしまう！」

「きゃ、ま、待ちなさい。私にそのようなことを言われても困ります！」

「ではどなたに申し上げたらよいのですかっ」

必死の形相で取り縋り、思嵐は、はたと思い出した。

「そうだ、西王母さま 西王母さまに会わせて下さいっ お願いします、お願いします！」

「何を……西王母さまは早々下界の者がお会い出来るお方では」

侍女が言いかけたのを、「お待ちなさい」と聞き覚えのある声が遮った。

「あ、九天玄女さま」

赤い表衣に、凜とした声音 思嵐はこの九天玄女と呼ばれた女

仙が、妖怪と間違われた自分を助けてくれた方だと気づいた。

「その者の目が覚めたらすぐに報告せよと申し付けたでしょう」

「申し訳ありません」

「よろしい、下界から来た少女よ、そなたの願いを聞き届けましょう。西王母さまがお会いになるそうです。ついて来なさい」

「あ……はい、ありがとうございますっ」

思嵐が慌てて寝台を降りると、せめて身なりをきちんと整えなさいといわれ、侍女が着替えを手伝ってくれた。急く心を押さえて、思嵐は一時死にかけたのが嘘のように足取りもしっかりと九天玄女と呼ばれた女仙の後についていった。

宮殿楼閣に張り巡らされた回廊や復道（二階建ての回廊）を通り抜け、ようやく辿りついた先が謁見の間であった。

額の真ん中から左右に分けた髪に、真珠を幾重にも垂らした髪飾り、黄金の腕輪、耳飾り。首から長く赤い布を垂らし、竜や瑞兆の絵柄を丹念に縫い取った豪華な表衣を着込んだ女性が羽毛扇を持ち、

ゆつたりと玉座に腰掛けていた。

柔らかに微笑むその類稀なる母性の象徴、神聖の零れ落ちる姿は、誰に聞かずとも天界の西を治める西王母と知れた。呆然と見上げていた思嵐は、

「聞きましょう、そなたの身に何があつたのか」

鈴を転がしたような美声に思わず雷打たれたかの如くその場にひれ伏していた。

がちがちと体が震えて止まず、天上の御方とはこれほどまでに下界の人間とは異なるのかとひたすら額を床になすりつけた。

「これ、そのようにしては何も物が言えぬでしょう」

「お待ちなさい、そのように責めたてたものではありません。娘よ、どうか顔を上げてちょうだい。そなたは下界に援軍を求めたそうです。何があつたのか、教えてはくれませんか？」

慈愛そのものを感じさせる声音に、思嵐は恐れ戦きながらようやく面を上げた。震える声で奏上を始め、何故援軍を求めたのか、その訳を切々と訴えた。

全てを聞き終えた西王母と九天玄女は互いに顔を見合わせ、かすかに痛ましげな、それでいて諦観を漂わせる嘆息をした。

「全て分かりました。しかし、そなたの願いを聞き届けることは敵いません」

「な、何故ですか……!？」

一瞬不敬も忘れて思嵐は悲鳴じみた抗議の声を上げた。これには九天玄女が答えた。

「下界と天界では時の流れが違います。そなたには酷なようですが、そなたが道観を出たのがおよそ数日前と感じているのなら、それは大きな勘違いです。おそらく、隧道を登り始めてから、およそ十年以上の歳月が過ぎているでしょう。もはや援軍を出しても無駄です」

「そんな、馬鹿な……」

思嵐も隧道を登りながら、永遠に近い時間を感じてはいたが、それは暗闇のなせる業で、せいぜい数日のものと思い込んでいた。でなければ、飲まず食わずの強行軍で、思嵐はとっくに死んでいたはずである。

「そなたが登ったのは、ただの隧道ではありません。そなたは、知らずして崑崙山の内部を登って来たのです」

「崑崙山……!？」

「そうです。崑崙山は、三層、あるいは九層からなる霊山です。これを登れば神秘的な力を授かり、頂上にまで登れば仙人として天仙界に迎え入れられる資格を得ることが出来るのです」

九天玄女は思嵐の驚愕した顔を見て、もう少し詳しく説明しましょう、と言った。

「崑崙山は、下部は大きな丘で、涼風の山と称し、この太丘に登っ

ただけでも不死を得ることが出来ます。太丘の中心には、天に通ずる九層の城楼が聳え立ち、その高さ一万一千余丈で、天柱とも称します。この太丘より倍の高さの位置を県圃と称し、さらにその倍の高さの所が天庭で、天神の住まっている所です。天帝の下都があり、仙女を統べる西王母さまが住まわれ、天神地神が祀り事を行う場所なのです」

「あ、あの、それでは、私は……」

「更に言うのはそなたにとって酷な話ですが、真実を告げましょう。そなたはもう死んでいるのです」

何を、と思嵐の咽は奇妙な具合に貼りついて声を出すことが出来なかった。

「多少空間を歪めた上で短縮されていたとはいえ、崑崙山内部を登るのは、修行を積んだ道士でも非常に困難を極めます。そなたは崑崙山に登る内に、限界まで酷使した肉体を脱ぎ捨て、魂魄だけの姿となって頂上まで達したのです。一度死んだ後で、人間の姿ではなく、魂魄が抜け出して、魂魄だけが仙人になったものを尸解仙しかいせんというのですが、そなたの場合これに当てはまるようですね」

淡々と事実を告げられ、思嵐は恐慌の内に激しく頭を回転させた。

「死んだ　？　私が　？」

そんな、馬鹿な。だって、私は生きているのに。こんなにも、こんなにも、苦しくて辛くて痛くていつそ死んでしまいたいと涙も枯れ果てて、それでもなお生き延びたいと浅ましく爪を立ててここまですて来てたのに。

それでも、もう、死んでいるというのか、この女仙は。

「では、では……下界の壺天道観はどうなったとおっしゃるのですか……もう、十年以上も経っていたなんて、それでは……それでは、師父はどうなったというのですか……」

尋ねながら、次第に思嵐は体の震えが止まらなくなって来た。

違う、私はこんなこと聞きたいわけじゃない。十年以上も月日が過ぎて、あの切迫した状況でその後どうなったかなど、誰にでも分かることではないか。

「残念ですが……そなたが気を失った後、調べさせましたが、壺天道観とやらは現在荒廃して誰も棲んではおらぬようです……そもそも、あのような隧道は、一人しか通れぬようにしてありましたし、そなたが入った後自動的に再び封鎖されました。そなたの師が妖怪の大群に襲われたというのなら、おそらく……」

「……隧道は、一人、しか、通れない……？」

は、と九天玄女は口を噤んだが、もはや遅かった。

「お待ち下さい。それでは、師父は、私を逃がさなければ、師父は……お一人で、天界に逃れる事が出来たのですか……」

限界まで目を見開き、真っ白になった唇を戦慄かせた。

「私は、また……」

また、人に助けられた。人の命を踏み台にして、また助かった。

ぱたぱたと冷たい床に滴が滑り落ち、耐え切れなくなって膝をがくんとついた。

一体自分は何を泣いているのだろう。泣けば許されるともいうのだろうか。人の同情を買う気か。それとも、泣く事で自分に贖罪を強いて許された気持ちになりたいだけか。

また、助かるべき人が、助からなかった……

あんなにも必死で隧道を登りつめたが、全部無駄だった。私は、生かされたただだった。

今度こそ、助けたかった。

私が。

私が。

私が。

私が、人を、恩人を、師父を助けたかったのだ。

それなのに、再び助けられたのは、私だった。

号泣することなど、許せなかった。もういい加減にしたかった。

「娘よ、そなたはこれからどうしますか？」



西王母が柔らかに問い掛ける。

「天界に留まり、そなたの師父とやらの代わりに、天界で地上の人々を守る仕事をしてはみませぬか？ それだけの力を、そなたは崑崙山を這い登ることで得たのですよ。それは、誇りに思つてよいのですよ」

天界で、人々を守護する役目に就く　その言葉に、思嵐は強く頷いていた。

助けられなかった人々の代わりに、今度こそ誰かを救いたかった。いいえ、違う……救われるのは、自分自身だ。

「娘よ、そなたの名前は　？」

聞かれて、思嵐は咄嗟に押し黙り、次の瞬間には面を上げてこう答えていた。

「　高蘭」

高蘭、です

何故そのように答えたのか分からなかった。しかし、すぐに気がついた。高蘭の名前には勇気が宿っているのだ。自分のような者が貴女の名前を詐称するなど、とてもおこがましくて、笑ってしまうけれど……お願いです。

力を貸して、高蘭。

名前に縋って、これから生き方を変えたい。だから、ごめんなさい。この行為を許して下さい。

その時より、思嵐は高蘭となった。

## ナタク三太子

崑崙山より百万里は離れた地、その上空に豆粒を並べたかのように黒い大軍があつた。天界の編成した天軍統帥府より、今回の戦いには二十八宿の内、北方の玄武七宿の星君が派遣された他、かつて孫悟空なる大妖が天界を荒らした折、玉帝に「降魔大元帥」に命じられた托塔李天王の三男、ナタク三太子とそうそうたる顔ぶれである。相對するのは空中の戦闘を得意とする妖怪の軍団。

両軍は数刻前から互いの得物を交えてぶつかり、いまや敵味方入り乱れて戦況は麻の如く混迷していた。

その中に、思嵐の姿はあつた。思嵐は高蘭と名乗つてより、玉綴りの鎧を着込み、好んで戦場に出た。

今も腰に下げた刀を右手に抜き放ち、妖怪の二の腕を容赦無く一刀の元に斬り下げた。妖怪のくせに赤いしづきが宙に大輪の花を咲かせ、斬り捨てられた腕は鮮やかな放物線を描いて、瞬く間に交戦する両軍の間に見えなくなる。片腕を失つたまま、断末魔の悲鳴を上げて下界に落ちて行く妖怪の姿に、思嵐は冷やかな一瞥を投げ、すぐに別の獲物を見つけては急降下した。

あれは。

視線を上げ、空中に留まって目を眇めた。艶やかな女人の背中に生やされた翼は、かつて生家のあつた邑を黒い炎舞の一夜に天を覆い尽くした異形のもの。夜行遊女である。思嵐の胸中に戦慄にも似た、冷たく昂揚する何かがざわざわと蟲のように這い登る。激怒

のあまり、血肉が沸騰するのが分かった。

まさか、このような戦場で見えるとは……かつての無力に逃げ回った自分ではない。

思嵐はぎらぎらと憎悪に濡れた瞳で壮絶な笑みに口角を歪めた。

串刺しにして焼き鳥にしてやる。

同じように、ぐちゃぐちゃにしてやる。

暗い悦びに、知らず思嵐は笑っていた。

比礼を清風たなびかせ、隙だらけとも見える思嵐に、別の妖怪が三匹連携し好機とばかり襲いかかる。

思嵐は振り返りもせず、抜き身の引つさげた血刀を、手首を返して斜め後ろに突き刺した。確かな手応えとともに、反り返って刀ごと落ちて行くのを惜しむこともなく、まずは一匹と数え上げる。今度は間合いを取って、一端長得物で妖怪どもを薙ぎ払う。陣形が崩れたところで前方の妖怪めがけて錫杖の九環を鳴らして脳天を打ち据え、頭蓋骨を脳漿が紺碧にぶちまけるよう粉々に砕く。

これで二匹。

笑いが止まらない。全身返り血を浴びるのにも頓着せず、更にはそのまま背後に錫杖の先端部を突き出し、三匹目の胴を貫いて串刺しにする。

ずるりと肉を巻き込んで抜き出すと、絶叫が尾を引くのも無視し

て、思嵐は味方の陣を離れ、夜行遊女を目指した。

「待て！」

肩口を引いたものがあり、思嵐は肘を突き出して跳ね上げ、躊躇いもせず顎を砕いた。

「ぐああっ」

「馬鹿者、味方相手に何をする！」

落下しかけた天兵を別の者が慌てて拾い上げ、抗議の声を上げた。

「邪魔をするからだ」

憎々しげに吐き捨てて、夜行遊女を追おうとする思嵐を、今度は一兵卒とは違う、將軍格の者が前に飛び出して、仙力甚大なる降妖杵をさつと水平に渡した。

「勝手は許さん！ 陣に戻れ！」

托塔李天王が第三子、ナタク太子である。少年の姿でありながら、瘦身に不似合いな六種の武器をまとい、五百年前には天界を乱した孫悟空なる大妖相手に父の托塔李天王とともに三壇海会大神として討伐に赴いた戦闘神であった。

思嵐は少年の姿をした戦闘神を射殺しかねない勢いで睨み据えた。

「何ゆえ邪魔立てをなさるか」

「天軍の規律を乱すことはまかりならん！ 深追いはせず、所属部隊に戻れ！」

「それは……」

思嵐は音もなく九環の錫杖を空気に切って下げ、戦意喪失の構えを見せて、

「きけませんなあっ」

爆発的な力で錫杖を払って突き入れ、ナタク太子の脇を否妻のような素早さで抜けた。

「ちっ 待て！ この馬鹿女あああああああっ」

背後で呼び継ぐ声があったが、完全に無視した。目指すは前方の夜行遊女のみ。

蹴り殺してやる。

目も眩む怒りと興奮で、思嵐の息は荒くなった。敵討ちだ。どんな妖怪を血祭りにあげるより、夜行遊女の方がずっといい。羽根を赤で染め上げるほど胸のすくものはない。あの女怪どもを皆殺しにしなければ、私は救われない。

「待てっ」

ナタク太子は両足に装備した火輪を飛ばして思嵐に追い継ぎ、斬妖剣を突きつけた。

「待たぬか、この馬鹿者めがっ」

「邪魔立てするかああああああああっ」

振り向きざまに見境なく錫杖を振るった思嵐の脇腹を、ナタク太子は降妖杵で打ち据えた。手加減したとはいえ、戦闘神である少年の一撃をまともにくらって、思嵐は息をつめた。

「少しは冷静にならんか！ お前の身勝手な行動が、仲間を危険に晒すのだ！ そのようなことも分からんのか、下界上がりの道理も弁えぬ女が！」

怒声を浴びせられ、思嵐は咽元に込み上げた熱い塊を無理矢理飲み下した。

うぬれらに、何が分かる。

視界が真っ白に焼け付くほどの怒りを、お前は知っているのか。無力の絶望を知っているのか。狩人に追われる野兎なら、まだ逃げる足も持っているだろう。しかし、私達、下界の人間が、妖怪相手に何を抵抗出来るというのか。地べたに這いつくばって、命乞いして、それでも簡単に殺されて、爆笑交じりに頭を踏みつけられて、壁に叩きつけられ、潰され、食われ、逃げてても逃げてても、遊びにもならないと追われて鬨り殺される。

その絶大なる恐怖を知っているのか。

大事な人も見殺しにして、それでもなお自分の命だけは助かりたいと思う浅ましい心を知っているのか。どれほど、どれほど、下界の人間が、命をただつなぐために自尊心も倫理も投げ出し、踏み躪

つてでも生き延びたいと願い、その羞恥に嘆くのか。

勇ましく戦って命散ることすら、かつての私には許されなかった。私は、戦う手段を何一つ持っていなかったのだ。石を投げることしか出来ない。それでなければ、ただ逃げるだけ。

それが、どんなに惨めで悔しくて、恐ろしいのか。

恐くて。恐くて。本当に恐ろしくて。

どれほど、惨めだったか。

今でも、思い出すだけで、涙が勝手に滲んで、目の奥が熱くなる。

お前達、天界の者は生まれながら特別な力に恵まれて、その恩恵を恩恵とも思わず、ただ安然に過ごして。

手ぬるい。

「手ぬるいのですよ、ナタク太子」

「何を」

思嵐は得物を下げ、皮肉めいた薄ら笑いを浮かべた。

「妖怪など、天界の大軍を出して、さっさと根絶してしまえばよいのです。道理やら倫理やら振りかざして、天上の御方のやり方ときたら手ぬる過ぎて反吐が出る。一匹でも妖怪を殺さねば、何も抵抗する術を持たぬ下界の者がその数十倍死ぬのですよ……何の痛みも知らないで、ああだこうだとまともな理屈ばかりの貴方がたには正



直失望致しました」

「だから、お前が暴走して奴等を殺すというのか」

「ええ、ご覧の通りです」

「お前は規律を乱し、必要以上に血を被り過ぎる」

「は！ 必要以上とおっしゃいますか」

思わず咽が引き攣れて、冷たい大気に哄笑が爆発する。

何という、溝なのだ。

下界の者と、天界の者では、ここまで認識の差異があるのか。

これでは、我々が救われるわけなどないではないか。

「何を笑う」

「日々妖怪に殺戮される下界の者からすれば、必要以上も以下もありましょうか。だから貴方がたは手ぬるいと申し上げたのです。天が地を管理するというのなら、がたがた抜かさず、一匹でも妖怪を殺したらいかがです……」

戦闘神のくせに矛盾する理屈をこねるナタク太子がおかしくて、皮肉げに咽を鳴らすと、彼は短く嘆息して指を鳴らした。

「虚星君、壁星君、直ちにこの女仙を拘禁し、天界に送還せよ」

「承りました」

「お任せを」

北斗七星君の内、虚星君と壁星君が進み出て、嘲笑を浮かべたまの思嵐を束縛した。そのまま崑崙山へと連行する。

それを見送って、少年神は武將の面持ちを崩し、疲労気味に頭をがりがりとかいた。

「全く、最近軍を乱す女仙の噂を聞いてはいたが　あれか……そう言えば、名前を聞いていなかったな……」

うーん、何とか、らん、という名前だったような……まあ、どうでもいいか。

ナタク太子は呟いて、背後から忍び寄った妖怪を切妖剣で紙人形でも破り裂くように斬り捨て、その動きを止めずに考え込みながら別の妖怪の頭部をざん、と薙ぎ払った。赤い切り口を晒した首級は子供が放り投げたお手玉のように高く空中に舞い上がり、どこぞの下界へと落ちて行く。

「全く、あの無法者ぶりは、五百年前の石猿めを思い出すぞ……」

あれは、石から生まれた妖怪のくせに、斎天大聖を名乗った匹夫であつたが、と零して、瞬く間にナタク太子は両手にいっぱい妖怪を屠っていった。

そう、あれは孫悟空といった

今は、釈迦の計らいで画界山に封じられているというが……

## 觀世音菩薩

もう少しで独房に入れられるところを、九天玄女の取り成しで、仮処分までに少しは反省をせよ、と自宅軟禁扱いを受けた思嵐は、籐の椅子に腰かけ、ぼんやりと水墨画のように滲む外の風景に見蕩れていた。

崑崙山の頂上に当たる、玉帝のしろしめす天庭、西の一角である。

崑崙山は、思嵐が必死に内部を這い登って来たように、大地から雲天までの位相を天柱でつないでいる。あくまで下界と天界は延長上にあってつながっているのに、どうしてこれほどまでに何もかもが全くといっていくくらい違うのだろうか。城楼も樹木も水も全て澄んで渡り、金銀宝石類で出来ているが、地上のものと同ら形が変わるわけではない。どこぞの地上かもしれないと思いながら、決定的に違うのは、その空気の色だ。こんなにも天界は平和で、思嵐の嗅ぎなれた恐怖と血臭は全くしない。ここは、下界ではありえない

あの下界の泥臭い絶望の色も音もどこにもなくて、生きている気がしない。

憎しみが薄れて行くのを、思嵐は何より畏れて、戦場に出た。相変わらず異形のものたちへ恐怖を覚えながら、同時に妖怪を血祭りに上げれば、天界で浄化された指先が再び血の色で汚されれば、むしろ自分の罪は洗い落とされて行くような気がした。新たな業を背負うことを知りながら、戦場の戦慄は何より思嵐の乱れた心を慰撫して止まなかった。

ああ、また桃の香り……

桃の芳香に思嵐は目を眇めた。今、桃の香りは今宮殿中に満ち満ちている……

今年も、例年通り『蟠桃勝会』が催される。

天界では毎年諸神・諸仏を招いて『蟠桃勝会』という宴が催される慣わしであるが、これに使用される蟠桃は王母管理下の蟠桃園にある。

あれは、昨年だったか。

思嵐が天庭に辿りつき、蟠桃園をさ迷い歩いて九天玄女に保護されたのは……

ぱたぱたと軽い沓音がして、思嵐の室の前で止まった。

「高蘭！」

戸口から額の眩しい少女の顔がのぞいて、物思いに沈んでいた思嵐は面を上げた。

高蘭。

私の名前ではない。

その名前は、当初の目的を違え、勇氣よりも、贖罪を思い起こさせた。

偽りの名前で償わなければならない。忘れないために。生かされ  
たために。

「太真王夫人」

夫人、というより、やはり娘子おにょうにんと呼んだ方が良さそうな可愛らしい少女である。西王母が目に入れても痛くないほど可愛がり、天界の仙女たち誰もが慈しんだ王母の末娘であつた。まだ髪を結い上げることもせず、梳ったまま背に流しており、永遠の少女性に、無垢の象徴を感じさせる。それは、かつて高蘭、と呼んだあの少女を思い起こさせた。

「また戦に出たのですってね」

「ええ。無茶をしましたので、自宅軟禁です。自宅といつても、王母さまに宮殿の一角をお貸し頂いているだけです」

うつすら笑うと、太真はにこりと無邪気に微笑んだ。

「まあ、高蘭はもうわたくしたちの身内も同然なのよ。遠慮は無用です。ねえ、高蘭はどうしてあのような恐ろしい妖怪相手に戦うの？ わたくしは、高蘭が恐ろしい目にあうのも、痛い目にあうのも嫌です。次はもう出ていかないで」

「それは無理です。私は、天界を守護する役目に就いておりますから……」

何より、思嵐は天界の清浄さを嫌忌していた。血塗れた自分には、居心地が悪い。いいえ、吐き気すらする。この、太真のように

「やっぱり、お願いしても駄目なのね……」

下を向いて唇を噛み締めてしまった太真に、思嵐は作り笑いを浮かべた。

「とんでもありません。太真王夫人にご心配頂いて、高蘭は大変うれしゅうございますよ」

「本当？」

ぱつと笑顔になって、頬を紅潮させる太真に、思嵐は不当圧迫のように吐き気が込み上げるのを堪えた。

「ええ、太真王夫人に気にかけていただくなんて、大変なことですよ。どうか、高蘭めのことはご心配なさらず。私の武運は太真王夫人に授かっているのですから」

よく言つ、この舌が……

太真のお願いなら、どんな厳しい女仙でも聞き入れてしまふ。無邪気なまま数百年という月日を過ごして行くだろう少女。

苛々する。何も知らず、追い掛け回されて嬲り殺されるかもしれない恐怖も、涙が枯れ果てるほどの絶望も、燻りつづける憎悪の在り処も知らないまま、安寧に包まれて生きて行くのだ。

天界の中でも、一等安全で美しい場所にいる人。

泥水を啜ってでも生き延びたいという強烈な衝動を知らないで、何をせずとも与えられた永遠の時間を生きて行くひと。

誰か、死ぬほど傷つけてやればいいのに。

「あ、誰か来るわ……」

「ええ」

回廊を渡るその足音は、柔らかな絹沓ではなく、聞きなれた軍靴の音だった。

「失礼する」

は、と思嵐は目を見張った。

「ナタク三太子」

「まあ、ナタクさま」

思嵐と太真は同時に少年神の名を口にしていた。

わざわざ、ナタク三太子が一兵卒のもとに足を運ぶとは何事か、と思嵐は眉間に皺を寄せた。

ナタク太子はじろり、と幼い面立ちに似合わない苦味走った一瞥をくれ、多少決まり悪そうに手にした書状を広げた。

「お前の正式な処分が決まった。本来なら独房にぶち込むところだが、ある貴い方のお取り成しによって、それは取り止めになった。これからお前は受戒し、仏門に帰依して心根を改めよ。今から勿体無くも観世音菩薩さまの預かりとなる」



「は、何を」

観世音菩薩といえば、普陀落伽山に住む神通広大な処女神で、菩薩というのは自らの悟りを遅らせて衆生を救わんとする慈悲の者である。

「口答えは許さん。すでに決定である」

「お待ちください、ナタクさま。高蘭は、どこかへ連れて行かれるのですか？」

泣き出しそうな太真の言葉に、ナタクはこの柔らかな少女が苦手なのか、う、と息をつめた。

「な、あー、うん。ええー、と、あれだ」

何のことかさっぱり要領を得ない。思嵐は内心、このナタク太子とやらは、五百年以上生きても、その少年の姿に意識を左右されるのだな、と呆れた。実際、老人の姿をしたものは老成しており、歳若い姿をしたものは、それ相応に未熟であることが多い。仙人や神と言えども、己の姿形に囚われ、惑わされるものらしい。

「うつつ、つまり、王母さまの催される例の宴　蟠桃勝会に、観世音菩薩さまもご招待されているのだ。その間、菩薩さまの後をつけてその薫陶を受け、少しは道理を身につけよ、ということである」

「まあ」

太真は安堵に笑み綻んだ。

「よかった、高蘭は諸仏・諸菩薩の住まわれるはるか西方浄土に連れて行かれるわけではないですね。本当によかった」

「あーうん、まあその通りである」

「高蘭、良かったわね。観世音菩薩さまと言えば、大変お優しい、お美しい方で、ナタクさまの兄君であらせられる木叉さまが師事していらっしゃるそうです」

「う、うむ」

「ナタクさまの父上であらせられる托塔李天王さまは、ご子息二人を仏門に帰依なさっているのですわ。」

「ご長男の金タクさまは釈迦如来の前部護法としてお仕えになり、次男の木叉さまは菩薩さまの高弟として恵岸行者というあだ名を頂いたそうです」

「あー、まあ、兄上二人は、そういうことである」

「じゃあ、お前はどうかんだ。」

思嵐はナタクを無遠慮に眺めた。兄二人は仏の高弟で、お前は戦場に行く戦闘神か。ずいぶんな違いではないか。父・托塔李天王の名前の元となった、その手に頂く五行の塔は、父に対するナタク太子の復讐心をおさめたものと言うが……どこまでが真実なのやら。

「とにかく、高蘭とやら、お前は私について参れ。兄上の所まで案内、致す」

「観世音菩薩さまにお仕えになる恵岸行者でいらっしやいますか」

「そうである」

ナタク太子は一刻も早く太真の側から離れたいのか、挨拶もそこそこに踵を返した。

「では、失礼致します」

思嵐は残して行く太真を尊んで頭を下げ、ナタク太子の後を追った。

額に月を頂いた知恵と機知に溢れる沙門姿の男こそ、ナタク三太子の次兄、木叉　　またのあだ名を観世音菩薩より頂いた、恵岸行者と言う。

「ようこそ、おいで下さった」

恵岸行者は涼やかに笑って、弟ナタク三太子と思嵐を出迎えた。

「私は、ナタクの兄、木叉と申します。法名は恵岸行者を頂いております。あなたが高蘭殿ですね？」

「はい」

言葉少なに応えて、思嵐は辺りを見回す。丹水の流れる一角を与えられ、美しく整えられた部屋は奥に御簾が垂れ下がり、今は人のけはいはしない。

「観世音菩薩さまは？」

恵岸行者はふと笑み崩れた。

「もういらしています」

「!？」

気づけば、無人のはずの御簾に、人影が映っていた。いいや、人影というのは間違いだろう。光臨が御簾に映っていた、というのが正しい。

すると御簾が巻き上げられ、処女神観世音菩薩が姿を現した。慈悲を垂れる菩薩の名の通り、柔和に微笑んでいるが、西王母のような暖かな母性ではなく、あくまでほっそりとした流線美を描き、柳腰に蓮の花を携え、どこまでも透明性を称えている。西王母が大地なら、観世音菩薩は水そのものを感じさせた。

観世音、菩薩……

瞠目し、思嵐はその尊い姿を呆然と見つめた。

白い薄絹の衣をまとい、条帛を垂らし、首や手足に金環をいくつも身につけたその姿は、衆生に崇められるに相応しい神々しさを内から放つ。

この觀世音菩薩について、龜茲<sup>きじ</sup>国は鳩摩羅什<sup>くまろじ</sup>の訳した『法華經』に、觀音經の趣意をとって、このようにある。

『善男子、もし無量百千万億の衆生あつて、もろもろの苦惱を受けんに、この觀世音菩薩の名を聞いて一心に名を称せば、觀世音菩薩、即座にその音声を観じ、皆解脱することを得せしめん』

「善男子<sup>ぜんなんし</sup>」、とは釈迦如来がこのように觀音に呼びかけたのであるが、その姿は、三十三变化身に説かれるように性別变化自在とされる。

更にこの觀世音、とは「世の音を觀る」という意味で、衆生の声をよく觀じ聞き、救済の手を差し伸べる、大慈悲を表わしている。

思嵐はそつと心の内に唱えた。

一切諸法を觀察するに無礙自在で、一切衆生界を觀察してよくその苦を救うことが自在である……

一切の衆生の苦難を見抜かれ、その救済は自在なる菩薩である。

「お呼びだてしてしまいましたね……高蘭、あなたを待っていました」

伏せていた睫毛が震え、切れ長の眼がずっと見開いた。悟りを得るものの目。静かに透明なそれは青睛の浄眼である。

これが、菩薩　　！

全て莊嚴。思嵐の内を水が流れる。菩薩の目とは、このようなも

のなのか！

仙人とは全く異なる、別存在だと思嵐は慌てて膝をつき、頭を垂れた。

「顔をおあげなさい」

威圧するところはなく、思嵐は戦きながら面を上げる。しなやかな指先が思嵐の前髪を分けて額に触れ、つと何かを探り当てた。

「ここに、『点』がありますね……」

思嵐はどうしたらよいのか分からず、その場に固まっていた。

「『点』は『穴』に転じ、『穴』は世界観『空』を生ず。『穴』から抜け出なさい。赤い花びらのような印があります……そして、依り糸……」

正直、思嵐には何を言われているものやら、さっぱり分からなかった。菩薩は更に何かを探り、清らかな溜息を吐いた。

「間違いありません、この者でしょう」

「では、観世音菩薩さま」

恵岸行者が心得たように頷いた。

「高蘭殿、少し話が込み入ります。どうか、楽にお座り下さい」

「い、いえ、私は……」

「よろしいのです。      ナタク、お前はもう帰りなさい」

振り返って弟に促し、「い、嫌です、兄上、私も      」とナタクが顔色を変えたので、観世音菩薩は静かに優美な手を上げた。

「よろしいでしょう、ナタクにも自ずから関わりのあること……全  
ては釈迦如来の導き……」

釈迦如来……？

思嵐は全ての仏の頂点にあるその名前を聞き、何ゆえか心ざわめいた。敷物の上に武人らしく胡座を掻いて座り、それぞれが楽な姿勢を取る。

惠岸行者は頷き、三千世界に渡る、時空を超える物語を始めた

遠く未来、人々の慕情と熱情をかき立てるその物語。正史には『  
大唐西域記』あるいは逸話となった『西遊記』。

一人の僧が經典の解釈に疑問を抱き、その原典を求めんと法に自分を忘れ、出国禁止の掟を破り、遠く天竺を目指した。西安（長安）からローマまで、約一万三千キロメートルを超えるシルクロード（絹の道）はあまりに危険なため、皇帝は中国人の出国を許可しなかったのである。しかし、僧は密かに国境の玉門関を出て、足を踏み入れれば再びは生きて出られないとされるタクラマカン砂漠へとたち、僅かな供を引き連れて取經の旅に出る。

流砂を越え、弱水を渡り、異国の風に吹かれて朝に白い尾根を歩き、夜に氷の壁を宿とし、荒涼たる旅路の果てに、僧は取経の旅を果たす。

これ、法名玄奘、その雅号を『西遊記』においては三蔵なり。

「我聞く。西域に玄奘三蔵あり」



## 一天四海

惠岸行者は袈裟の懷より取り出した巻物を宙に投げて紐解いた。

誰に支えられることもなく、解けた巻物は空中に固定されたまま、黄ばんだ絹布の白を晒している。一体、と息を呑んで見守る思嵐に、惠岸行者は心得た笑顔でするりと口ずさんだ。

「世界の中心に聖山・須弥山しゆみせんがあり、これは仏の住まう高山である」言葉尻に合わせて、白布の中央に、墨絵の山脈が滲むように浮かび上がった。須弥山、と流麗に書きつけてある。誰が筆を走らせたわけでもなく、それは絹布から炙り出されたが如く浮かび上がったのだ。

一体、と思嵐は愕然とした面持ちで、突然現れ出た須弥山の絵に目を奪われる。続いてその須弥山の周りに惠岸行者の話す速度に合わせて次々と影が浮かび上がって行く。

「この須弥山を塩海が取り囲む」

須弥山の周囲の絹布が大海を模して波打った。これは塩海。

「塩海の四方に地があり、これは一天四海。人間の住む東勝神州とうしょうしんしゅう、西牛賀州さいこうしゅう、南瞻部州なんせんぶしゅう、北鉅蘆州ほっきるしゅうの四大部州に別れる」

とうとうと流れる東西南北の名を冠する州の名前、口ずさむことに東西南北大陸の影が現れ、達筆な字が浮かび上がる。

東勝神州。

西牛賀州。

南瞻部州。

北鉅蘆州。

須弥山を中心に、塩海を隔てて、東西南北に四の大陸、すなわち四大部州が浮かんでいる。

思嵐は聞いたこともない大陸の名前だ。では、私はあのどこか一

つに住んでいたのだろうか……

「西牛賀州は諸仏が依つて留まる地であり、衆生も仏法に楽しみ、決して不殺、貪らず、戒を守ること純潔である。

また東勝神州は人々の心根も清らかに温和なこと美しく、天地一切を崇め、恬淡として争いを好まない」

何と夢のような国々ではないか。しかし、恵岸行者の説明は安穩に留まらなかった。

「一方南瞻部州は中華の民の住まうところ、人々は淫を貪り、殺生を好んで耽り、世の戦事・争いが絶えず、衆は災いに楽しみ、地は乱れるに任せる。

北鉅蘆州もまた仏の道を知らず、淫と殺生を楽しむ」

ぎよつとしたが、それはまさに自分の生きていた場所そのものことだった。表情が固くなるのを感じたが、巻物の変化にはつとした。

巻物に墨で描かれた須弥山を取り囲む四の大陸。その墨が溶け落ちて、中央に集まり始める。そしてぐるぐると渦を描きながら、やがて陰陽を形取つては崩れ、また再び円を作った。そして壊れる。

「これは観念の世界。世界はさに非ず。実在の土地ではない。しかし、よつて『在る』。人々の争いは絶えず、災いに楽しみ、戒の乱れる南瞻部州、北鉅蘆州はいずこにもある。いかような形であれ、世の乱れを正し、福縁薄い衆生をなんとかしても救い上げたい」

厳しさを帯びて語調が変わり、恵岸行者は輪王座して片手を上げた。

「如来は靈山大雷音寺に諸仏をお集めになり、御心のままに申されました」

『わたくしのところに三蔵の真経（三の蔵にいつぱいという意味）があるが、法力のあるものを選んで、東土に一人の善男を求めさせ、なんとかしてそのものに艱難辛苦かんなんしんくをつぶさに舐めさせて、わがもとにきたらせ、三蔵の真経を取らせて、ながく南瞻部州は東土・大唐

帝国にこの三蔵を伝え、多くの人々を教化したいものじゃが、たれか参るものはいないか』

「この御心に叶うよう、我が師觀世音菩薩が東土に赴いて、取經の者を探して参るお役目をお引き受けになったのです」

蓮華座を組んでいた觀世音菩薩がつ、と空中に、蓮華を携えていた指を滑らせた。水のさざめきにも似て、天衣がゆるゆると流れ落ちる。地図は再び一天四海を取り戻し、金色の筋が右から左に横切る。惠岸行者が再び説明のため口を開く。

「これが指し示すのは、求法の道です」

東西を結ぶ、一筋の細い細い金の道。何万里の。何十万里の。果てのない道。

「南瞻部州、東土・唐帝国より、如来のまします西牛賀州、天竺国は靈山、大雷音寺まで、選ばれた一人の法僧が天の道を通らず、一歩一歩下界の地を踏みしめ、八十一の艱難辛苦を乗り越えて、三蔵の真經を求め至る」

金の光は確かに乱の世から如来の元までを結んで細く雅やかに煌いていた。

「西天にある三蔵みくらの經にちなんで、取經の者を『三蔵』と呼びましょう。この『三蔵』がこれまでに八人、砂漠に倒れ、弱水に溺れ、極寒の氷の壁に凍死し、あるいは妖魔の類に貪り喰われ、災禍のため天命をまっとうせぬままに無念の横死を遂げました」

惠岸行者が言葉を切る。そして、觀世音菩薩が弓月型の眉根と目を思嵐に向けた。

「そなたには、下界落ちして、九人目の三蔵法師となってもらいたいです」

## 三千大世界

な、何を莫迦なことを

「何を莫迦なことをおっしゃる！！！！」

声を荒げたのは、腰を浮かせかけた思嵐ではなかった。顔を真っ赤にした少年神・ナタク三太子である。敵を前に抜刀せんばかりの勢いで、激しく彼は中座した。

「そのような大役、この無法者には任せられませぬ！

そもそも、取經の者とは、下界において功德・法力・人品に優れ、求法の熱意に見合う知性と風格、体力、何よりその時代においてもっとも傑出した法僧でなければなりませぬ！！」

唾を飛ばしての弁は、觀世音菩薩の御前であることも、怒髪天を衝く怒りの前に、忘却の彼方へと押しやられているために現れたものらしい。思嵐の方がいつそあつけに取られて、少年神の罵声をただ見上げて耳通していた。

「これなるは仏法に帰依して、性根を改めんと推薦された粗忽者でございます！ しかも、出自は下界上がりの屍解仙しかいせんどころか、鼯鼠倒しのただの道姑（女仙の修行者）！！ 根本、穢れた女の身で三蔵の真經を求める資格はない！」

目を見張った思嵐は、知らず唇が震えた。抗弁の言葉は出て来なかった。汗が噴出すような、それとも引つ込むような悪寒に俯いて、じっと我が手に見入った。

「問題は性別だけではない。現在中華にあることとくの經典を熱心に研究し尽くしてその奥義に通じた者が、解釈において陰に陽に異なった点を正し、原典を求めたいと法に我を忘れ、遠く天竺を焦がれる、それが第一の資格ではありまぬか！？ この者のどこにその資格があると仰せか！？ その上、三蔵とは、」

勢い任せて言いかけたナタクは、砂利を食んだように、はっと口

を嚙んだ。みるみる血の気を引いて、その場に片膝をつく。さらさらと、室を取り巻く丹水の音が音楽的に響いている。

「も、申し訳ありません。出すぎた真似を致しました……！」

恐縮を通り越して青ざめる弟に、恵岸行者は微苦笑を湛えて、

「気持ち、分からないでもない。ナタの言うように、三蔵の役目は重要だからね。指摘されたように、如来は東土に一人の善男をお求めになっっている。高蘭殿は、どこをどう見ても善女であって、善男にはなれはしまい」

「ならば」

「うん、これは一つの呪法でね。いや、二重三重の呪、大呪法なのだよ」

高蘭殿、と恵岸行者は底の読めない笑みを向けた。

「三蔵の真経を求めることは、人の身にとつて千辛万苦の辛い道行です。地理的には熱砂の砂漠や氷壁の高山、人為の裏切りや妨害、飢餓や高熱・下痢・嘔吐をもたらす疾病・病魔、妖魔夜行といったあらゆる災いが降りかかり、血の汗を流して、なお尽きかけた精気を振りし絞って、地を這いながら征かねばならない。どこまでもどこまでも……この、求法の道をなぞる金の筋を見て下さい。縮図の上では、とても卑近に見えます。その通り、我らなら、十日もかからず、天の道を雲行してゆけばよいのです。しかし、それでは何の意味もないのです」

思嵐は見えない糸に惹かれて垂れていた頭を上げた。

「人が、人の仔が、この長い長い道程を、一步一步足跡を残し、多くの災いを潜り抜いて、入竺求法の苦行を成し遂げなければならぬ。求めたことに意味がある。通って来た道に意味がある。そういう呪なのです」

「……分かりません……」

思嵐は拳を膝上に握り込んだ。思い切り顔面を歪め、泣きたくなつた。分からない。分からない。ありがたい経典に何の意味がある。経典が人を救うのか。読経が人を救うのか。化物どもを一掃してく

れるのか。お前たち、天上の偉い仙人や諸仏ですら救ってくれないのに、三蔵の真経なら我らを救ってくれるとでもいうのか。ありがた過ぎて、涙が出てくる。ああ、小難い呪文が我らの力になるとでもいうのか。必要ない。本当なら、お前たちが助けてくれればいいでも、お前たちはそうしないではないか。何故力在る者が、非力な人に更に苦行を強いるのだ。ただ一人の多少優れているらしい僧に、無名の万人の未来を託すのだ。そうせよ、とお前たちはいとも簡単に言うのだ。

私たちは、一人一人、必死に生きている。明日をも知らず、その日を必死に生き抜いている者たちに、お前らはこう言うのか。

顔も知らないどこかの僧侶に、その必死の自分たちを託さなければならぬと。

自分で自分を救うことすらお前たちの筋書きでは許されないのか。私は私を自分で救う可能性すらないのか。我々は、我々を救うこともお前たちの中では許されないのか。たった一人の双肩に中華の民の生死がかかる。その者も人でしかない。三蔵に意図的な艱難辛苦を舐めさせるという。多くの人々の未来を託された者に、たださえ困難な道のりを更に苦しみ抜いて西へ征けと言う。

どうして託せよう。どうしてそんなことを簡単に言うのだろう。分かってください。私たちは、本当に弱いのです。弱いのです。簡単に死んでしまうのです。西域は、天竺は、三蔵は、とても遠くて気が遠くなるのです。

思嵐はただ拳を膝上に握り込むしか出来ず、じつと俯いていた。我々は、一人一人では、本当に非力で、何の力もなく、簡単に死んでしまう弱い生き物なのに……

「ただ一人、三蔵全てに重荷を背負ってもらおうとは思いません。だから、貴女にお願いしたいのです」

恵岸行者の声はどこか遠くから聞こえて来た。

「ご存知ですか、三千大世界の仏教的宇宙観を……大仏の座する蓮華台座を取り囲む千枚の蓮華、その蓮華弁の一枚一枚ずつが一世界

（須弥山世界）を成す。一弁の中には、百億の須弥山世界、百億の月日があり、百億の釈迦が菩提樹の下に座している……延々の繰り返し、気の遠くなるような無限の宇宙の連なりです。どの世界にも世を憂いて、遠く西域は天竺国まで旅する三蔵たちが存在しているのです。

今もどこかの須弥山世界では、三蔵の号を得ることなく、無名の三蔵が砂漠を越え、大河を渡り、道半ばにして無念の横死を遂げている。彼らの灯した火はまた別の三蔵が引き継ぎ、多くの、無名の、三蔵たちがまた求法の道を征くのです」

恵岸行者は姿勢を崩さないまま、穏やかに尋ねる。

「これは無駄なことでしょうか？ 何故三蔵は生命を賭して無謀な旅路に向かうのでしょうか。ただ経典を人ならざる我らが携えて彼らに与えればそれでよいのでしょうか？ その真髄は果たしてそれで人々に伝わり、その道行きを照らすのでしょうか。三蔵の真経が伝えるのはただの文字ではない。多くの者たちの、熱望と願いと、それらが渾然となって、大呪法が完成するのです」

「……分かりません、私には、分かりません……」

「九人目の三蔵には意味がある。仏の道において、九という数字は聖なる意味を持ちます。九×九＝八十一の艱難辛苦を乗り越えることで、呪は完成する。貴女は何を思って此処にいるのですか？ 復讐ですか？ それとも衆生を救うことに意味を見出しますか？ ならば、九人目となる、表の玄奘三蔵を助けなさい」

「……表の、玄奘三蔵……？」

頭が混乱した。ついてけない。表といえば、裏があるのか？ 恵

岸行者の弁舌は流水のそれであって、一箇所に留まらない。

「世界には陰があつて陽がある。それは両面です」

元気、というものがある。天地が分かれる以前の一元の気のことである。混沌とした元気は、万物生成の根源の気であり、これを「太極」とも呼ぶ。

「太極」は原初の混沌の気、万物生成の源となる「一元の気」、

つまり先述した「元氣」である。

一の元氣から、生滅する運動（道・タオ）を通じて、二の「両儀」、すなわち天地、陰陽が生成される。更に両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ずるという。

混沌とした一の元氣は二の両儀を生じ、両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ずるということである。太極より陰陽二氣、天地、男女が生まれ、互いに混じり合いながら、万物が化生する。これらを図式化したものが、「太極図」である。

「呪です。陰陽二氣は孤立しません。互いにつかず離れず、混じり合って、影響を及ぼし合っている。

三千大世界においては、結末は一つと限らない。全ての三蔵が天竺に辿り着くわけではない。未来は未定、白紙です。

この一つの須弥山世界にも、表があつて裏がある。表と裏は互いに影響し合い、つながっている。

表の三蔵は、諱はキ、字は玄奘、俗姓は陳といいます。

表を補完するには、裏の三蔵が必要です。貴女が彼を助けなさい。苦難の道のりは、一人ではない。裏の貴女と表の彼が二人で一人、互いに交わらずとも表裏一体、一緒に道程を征きなさい」



## 九人目

思嵐は俯いていた。かつて、自分の顔には醜い痣があつた。前髪を簾の<sup>すだれ</sup>ように長くして、他人に不快感を与えないよう、いや、人々の顔に嘲笑がのぼることが怖くて、いつもいつも俯いていた。

わたしは。

また、俯いている。昔から。ずっと。今も。何も変わらない。何一つ、変わらないではないか。

目まぐるしく、自分が命の踏み台にした人々の顔がまぶたの裏を過ぎつては消えた。

唇を噛み締め、勝手に目頭が熱くなるのを必死に堪えていた。恵岸行者は座したまま何も言わない。御簾を巻き上げた上座の観世音菩薩に至つては、けはいすら感じさせない。まるで丹水<sup>にすい</sup>の流れる音に同化して、どこにもいない。

下座に控えたナタク三太子だけは、苛立ちも露に怒気をあからさまにしていた。率直過ぎて、逆に分かりやすい。分からないのは、恵岸行者たちたちの思惑だ。

何故。分からない。どうして私なのか。私など……

釣り香炉に焚かれた白檀<sup>びやくだん</sup>の清新な香りが、しつとりと身に染み込んで行く。かすかなはずのそれが息苦しい。

脇腹がじつとり汗をかいていた。苦痛だった。

元来、私は頭がよくないのに。難しいことばかり言われる。難しい決断ばかり迫られる。

三千大世界とは、自分の住む、このような世界がいくつもいくつも複数に、無限に、存在しているということなのか。

そんなことが可能なの？

世界はたった一つだ。仏教観における須弥山<sup>しゆみせん</sup>世界。聖山・須弥山を中心に、塩海があつて、四大部州がある。そうした教義的架空の世界観があるのは、まだ分かる。

だが、その須弥山世界が、たった一つではないなんて。大仏を支える蓮華台、その一枚一枚の蓮弁の中に百億を数えて、なお無限に存在し続けるなんて。

それではまるで、無限の三千大世界は仏に呑みつくされているかのようではないか。

どの世界にも、悟りを得る菩提樹の下に釈迦しやかが座すのと同じく、三千大世界の一つ一つにまた取經の者も存在するという。そして、無名の彼らは旅の途中に倒れ、また別の三蔵が、求法の意志を継いで天竺へ向かう。その情熱は、誰かの心に火を灯し、連なり続けるのだという。

しかし、彼らのうち、誰かが必ず取經に成功するとは限らない。三千大世界においては、世界の数だけ、未来も複数。どの世界の未来も定まっておらず、未来は白紙だと恵岸行者はいった。

そして、一つの須弥山世界には、物事には陰と陽の両儀があるように、両面があるのだと。表があつて、裏がある。表と裏は連動している。

これは呪法だと。

裏の思嵐が東土・大唐帝国より天竺国まで旅を完遂させれば、それは強固な陰陽のつながりによって、表の三蔵もまた取經の旅をやり遂げる呪になるのだ。

貴女には、その裏の三蔵となる資格があるのだと、恵岸行者行者は穏やかな語調を崩さずに言った。どんな資格なのか、思嵐にはさっぱり分からないけれど、それがあるのだと。

九人目の三蔵には意味がある。九人目こそ必ず成功させなければならぬ。それもまた呪なのである。

複雑にして単純な式にのっとった、こじつけのようなそれらは、絡み合つて相互作用し、いくつもいくつもの呪が連動して仏教伝播の大呪法となる。

最終的には、人々を教化することで、乱れた世界の気を整え、凝った陰気の化生である妖怪の類をいっそうし、悲嘆にくれる者たち

も救われる。

それには、絶対の何かが、必要なのだ。

ああ、つまり。

思嵐は唐突に理解した。

頭に立ち込めていたもやが清風に払われ、事の全容が見えた時、思嵐はたちまち全身の毛穴が開いた。ぎゅ、と拳を膝の上に握り締め、背中を汗が流れる。

そうか。

これは、身代わりか。

こういうことは裕福な家ではままある。百害の疾病や事故から子供を守り、災いを払うために、定期的に災厄を一身に受ける身代わり人形を川に流したり、家に守りとして置いたりする。あるいは同じ日に生まれた者を、本来守りたい子供に「見立てて」、全ての害を引き受けてもらう身代わり人形にしてしまうこともある。

同じことだ。

私は、仏の秘蔵仔である九人目の三蔵・玄奘法師の旅を、間違いのないものにするために、彼に降りかかる災厄を引き受ける身代わりひとがたの人形となるのだ。

一心同体とは、そういうことか。違いあるまい。

二人で一人、そして九×九の八十一難を分かち合う。おそらく、最大にして最悪の災厄……玄奘法師そのものの死は、思嵐が引き受けることになるのだろう。

無論、それは表の三蔵・玄奘法師が死亡した場合だろうが。

綺麗な言葉で濁しても、そういうことだろう。

身代わりだ。

だが。白く筋の浮かんだ拳を凝視した。無骨な手だと思う。骨ばって、血豆や剣ダコがこんなにもたくさん。笑ってしまう。何のために。そうだ。

構わない、と思った。

九人目の取經の者。玄奘法師、彼が本当の三蔵。

彼の、露払いになろう。

彼に降りかかる災いは、全て私が引き受けよう。

なぜなら、私に降りかかった災禍は、全て別の者が命と引き換えに取り払ってくれた。何度も、何度も、価値のない私は高潔な他人に救われた。

どうして生き延びたのか、分からなかった。私などより、彼らこそ命をつなぐべき人々だったのに。何度後悔したか知れず、同時に生き延びた自分の命を後生大事に抱え込んで、死の遠ざかる足音に泣きたいほど安堵していた。

死は恐怖だった。死にたくなかった。どんなにおためごかししても、思嵐は死ぬことが怖かった。死に伴う苦痛、恐怖、それらを克服することなど不可能だった。惨めに這いつくばって、泥水を啜ってでも生き延びたいと思う自分がいた。誰かを突き飛ばし、自分だけでも助かりたい、一人だけでも安全な場所に逃げ込みたいと思う己を殺すことは決して出来なかった。

綺麗ごとだけでは、生きていけない。ずっと思嵐は、がちがちと震えながら蹲って、死の恐怖にただ怯えているだけだった。自分の運命を呪い、他人や神仏を罵って、動かないでじっとしていた。その間に、本当に強い誰かが自分を助けしてくれるのだった。それを、無意識に知っていたのではないか。

卑怯で臆病で勇気のない自分。ああ、そのどこが悪いのだ。人ならば、人ならば、仕方ないではないか。自分の命を惜しんで、一体何が悪いのか。

皆そうしているではないか。普通なら、そうではないか。私だけではない。私だけでは。

何度も何度も、自分に言い訳した。自分自身を正当化しなければ、明るい日差しの下を平気な顔をして生きて行けなかった。

そこが自分のどうしようもなさだった。開き直りすら出来なかった。

常に後ろめたかった。

内なる恐怖に打ち勝った人々は、そんな自分を、身を賭して庇ってくれた。迷うことなく我が身を投げ打って、助けてくれたのに。母は、高蘭は、師は。彼らの最期は、いつも不思議と静かな笑顔で彩られている。

どの顔も、どの顔も、思嵐を助けてくれた最期の時、笑っている。彼らは別れの最期、無音で笑っていた。思嵐を叱咤し、突き飛ばし、あるいは怒声を上げて、行け、といった。指差す。行け、と、彼らは指差す。

どこまでも強い意志。他人を己の命で生かそうとする鋼の意志だ。本当は、知っていた。彼らは死を覚悟して、思嵐を送り出したのだと。そうした悲壮な決意が彼らの表情を凜いのような笑顔たらしめていたのだと。

どうして笑えるの。貴方たちが助けた者は、何の価値もないのに。どうして迷いもなく、そうやって笑って送り出せるの。

私では、代価が釣り合わない。貴方たちの命に釣り合わない。

惨めで悔しくて、それはあまりに残酷な真実だった。

それでも、思嵐は、彼らの代わりに、その時、その場所で、死ぬことなんて出来なかった。あの恐怖の前に、思嵐は圧倒的に気おされ、ただ無力でしかなかった。何度時が戻っても、変わらない絶対の事実だ。震えたままじっとしているしか出来なかった。目の前を、自分でない誰かを生贄にして、死の災厄が通り過ぎるのを目も耳も塞いで、息をつめたままけいはいを殺して待つしか出来なかった。

でも、私が生き延び、生かされたことに意味があるとしたら。

それは、今をおいてない。

そのために生かされたとすれば、価値のない自分は、彼らの死に少しでも報いることが出来るのだろうか。

玄奘法師は、中華の民を救う者だという。彼の双肩に、万人の未来が託されているのだという。その彼の重荷を、私だけが一緒に背負っても許されるのだと。

ならば、意味がありますか

私が彼らの命を代償にこうして生きている。そのことを、赦されるだろうか。

思嵐は、声にならない声で、もうどこにもいない恩人たちに尋ねた。

応える声など、無論なかった。

思嵐は頭を垂れ、両手を床について跪礼した。

「謹んで、拝命お受けします」

ナタク三太子が何か言いかけるのを制し、恵岸行者が、ほっと笑み崩れ、肩の力を抜いた。

「そうですか、受けて頂けますか……」

「はい、力及ばずとも、取経の者である玄奘三蔵の影として、陰に陽にその助けになりたいと思います」

蛾灯でいい。

暗がりに浮かぶ灯火に、大小の蛾は群がるだろう。引き寄せたそれらを、自分は炎のままに焼けばいいだけだ。

恵岸行者は拱手して感謝を示した。

「裏の三蔵が呪法を紡ぐ限り、玄奘法師は陽の世界のみに現れる。彼の存在は、陰の世界にある妖怪から一切見えなくなりましょう。存在が隠されてしまうのです。」

妖怪たちの目には、貴女が三蔵として映り、また貴女は紛れもなく三蔵としてあることになります。陰の世界に妖怪を一手に引き受け、陽の玄奘三蔵を護法する辛い役目になります。それでも、よろしいか？ お覚悟はありますか」

「もとより玄奘三蔵の露払いになるつもりで承知しております」

「……そうですか。これは失礼しました」

「あ、兄上……！！」

我慢も限界に来たのか、ナタク三太子が声を上げるが、恵岸行者は流石に海千山千の貫禄でつかみどころのない論法で弟神を煙に巻いている。

天数が傾く。

思嵐はひしひしと肌に痛いほど感じた。

喧々諤々と兄弟たちが騒ぐ中、御簾はいつの間にか降りていて、沈黙を金としていた観世音菩薩が杏仁型の切れ長な眦をずっと見開き、不思議な微笑を口元に湛えた。

## 玄奘三蔵

- 前置き -

玄奘三蔵、という我々はどいつた人物を想像するだろうか。まず思い浮かぶのは、『西遊記』における猿、豚、河童の妖怪を仏弟子として西方の大雷恩寺に取經の旅に赴いた文字通り『徳の高い』僧の姿かもしれない。

またこの物語りの中で、三蔵は、妖怪にとってはその肉がまたとない美味、力を授けるものであるとされた。

結果、行く手行く手に珍味を欲する怪物乱神から、悪漢どもがこれでもかと控え、罨を張り、道中並み居る妖怪どもに狙われる羽目に陥る。

妖怪に攫われては暴れ猿を筆頭とした弟子に救われ、またお人よしがたたつて攫われる、の繰り返しの三蔵であるが、そこから想起される姿は決して猛々しい男性像ではない。彼は『守る』側より、常に『守られる』側に位置しており、弱々しさを称えたむしろ女性的印象を与えるのではないだろうか。

しかし弱々しいとはいっても、現実在即していようがいまいが不傷つけず、不殺生じつじやうを唱え続ける頑固者の一面も持っている。

あくまで仏の教えを守ろうとする彼と、弟子の現実的だがいささか乱暴な殺生推奨の主張とは平行線をたどる。

その不仲の隙を突き、師匠の誘拐騒ぎに毎度発展する恒例のパターンは、滑稽ユーモラスである。

しかしながら。

弱弱しい頑固者、妖怪を弟子に取經の旅を敢行した玄奘三蔵は、大衆小説の登場人物、あくまで架空の存在である。

語るべきは、

歴史上の实在人物、玄奘三蔵、



なのである。

果たして、想像していただきたい。

科学的装備もなく、中国からインドまでの往路の旅路とはいかなるものか。まして、当時の中国では、皇帝の命により、出国は禁じられている。

唐代の知識層であつた玄奘が、何故わざわざ出国の禁を犯してまで、インドを目指したのか。リスクばかり高く、見返りどころか、文字通り『往死』もありえたのである。

そこまでして、玄奘を西域に駆り立てたものはいったいなんだつたのか。

理想か。名誉欲か。

理想だけではたどり着けなかつただろう。

欲だけでは、過酷な往路、決して耐えられなかつただろう。

ならばいいたい。

ともあれ、歴史を鑑みるに、彼は帰国後まで含め、皇帝の勅許を得て大規模な經典の翻訳作業を行うなど大成功をおさめた。

玄奘の西域行きの真相は果たして美辞麗句に糊塗された彼の伝記からは想像するよりないが、ひとつだけ言えることがある。

彼は幼少から青年期にかけ、隋が天下の統一を失い、唐へと時代が変節する激動の時に生きた人物だ。

暴漢が林のごとく表れ出でて、白骨が転がり、竈の火も途絶える有様に、その多感な時期、何を思い耽つたのか。

時の権力者に自己を強烈にアピールし、またパトロンとし、言語を自在に操り、唐とインド間を往復するだけの体力気力をもったその男。

『西遊記』に見られる弱々しい『玄奘三蔵』像とは、まったくもってかけ離れた

したたかさ

を隠していた筈だ。

その時、『西遊記』の玄奘とは異なる、腹に一物もった侮れぬ人

物像が浮かび上がってくるのである。

「もうし」

呼び止められて、玄奘は背後を振り返った。

みずばらしい身なりをした二人のこじき僧がにやにやと笑い、その手にぼろ布で包んだ長い棒状のものとふるしきをひとつ携えている。

「はて、私に何か御用でしょうか？」

「ひひ、はい。我らは中華各地のあまねく高僧を訪ね歩いております。皆様一芸に秀でた方ばかりでしたが、しかしいまだ思う方に巡り合えぬのでございます」

「はて、いかような」

玄奘が応ずると、こじき僧二人かわるがわる変幻自在に喋りだした。

「ひひ、あなたさまも感じれおられるはずですよ」

「各地の高僧を訪ね、つぶさにその説を聞いても、詳しくその釈義を考えてみますと、みな自説を欲しいままにしているに過ぎませぬ」

「経典を紐解きましても、陰に陽に異なった点があり、どうもはっきりとしない」

「中華ではその研究をしつくすことはできませんぞ」

「原典をお求めなされ」

「遠く如来の御心に沿うには、天竺へ」

「もろもろの疑義を正しますには天竺へ」

二人のこじき僧の言葉に、玄奘は瞠目し、口を開いた。

「それは私も以前から考えていましたこと。かつて西方まで赴いて、もろもろの疑問を正そうとした法顕のように、私もその偉業の足跡

を辿りたいと望んでおります。しかし、求法のために上表しても、国外への旅行は許さぬとの詔が下り、人々は皆諦めてしまっているのです」

「ほほ、異なことを申される」

「あなたさまこそ」

「益州におられる時、ことごとく經典を研究しつくしたので、今度は長安へゆきたいと考えられたものの」

「条式（法律）に妨げられ、兄上には止められ、足止めされていたものを」

「ひそかに商人と誼を結んで、揚子江をくだり長安の都へおいでになったのではありませんか」

は、と玄奘は瞳を閃かせ、警戒の色を浮かべたが、二人のこじき僧はとどまることがなかった。

「經典の奥義を極めたいと」

「その情熱は何ものにも妨げられず」

「何ものよりも強い」

「あなたこそ仏門千里の駒よ」

口々に言い募ると、はらりとぼろ布が解けて、目にも彩なたくいまれなる品々が二つ光を放った。

「これは金欄の袈裟」

「これは九環の錫杖」

「受け取りなされ」

「なんと」

玄奘が慨嘆のうめきを漏らすと、ひらりとみすばらしい袈裟が落ち、二人の姿は掻き消えていた。

不意に玄奘は雑踏の中に放り出され、目をしばたいた。呼びの子売り声に、子供の泣き声、土ぼこりに馬糞の匂い。

白昼夢であつたのか。

いや。

その手にはしっかりと、九環の錫杖が握られ、いつの間にか風呂

敷包みをひとつ携えており、開かずとも中身が玄奘にはわかるのであった。

思わず呟いた言葉は何事が起こったのか、まさに一言で表すものであった。

「南無観世音菩薩」

その晩、玄奘は大海に浮かぶスメール山（世界の中心にあるとされる山）の夢を見た。

登らねばならぬ。

そう決心して、足を踏み出そうとすれば、怒濤が沸きかえって進むことを許さない。

しかし心に念仏を唱えようと、どこからともなく  
「恐れる必要はありません」

という声が聞こえ、水に入ると、たちまち石の蓮華があらわれ、足を踏むところに次々と生じた。

振り返れば、足元の蓮華は足に従って消えうせていく。

歩きながら、玄奘はふと背後、もしくはとなり誰か見えない人のけはいを感じた。決して悪いものではなく、寄り添い、何か玄奘にあれば手を貸そうとするような守護するそれであった。

やがて山のふもとに達すると、いかにもその威容は断崖絶壁で、とても登れそうにない。

すると、また不思議なけはいがして、下方よりかぐわしい突風が吹き出でて、玄奘を天に吹き上げた。

頂上についた玄奘は周囲を見回すことをせず、尋ねた。

「あなたは誰か」

けはいは沈黙した。

「どうか姿をお見せください」

再び懇願すれば、ただ一言。

「私はあなたの露払い。どうか憂いを捨て、ひたすら天竺を目指さ

れませ」

玄奘は質問しようとし、そこで目を覚ました。

今度こそ夢であつた。布団の中で目を覚まし、玄奘はひとり思案した。

「時が来たか」

その時、玄奘は26歳（異説あり）。

この吉兆を得て、いよいよ国外旅行許さぬ禁令を破り、西方を目指すことにした。

ここに、西遊記の始まりである。

## 齊天大聖

「あんれ、お坊様、馬子もつけずにお1人でどこさ行かれますだ？」  
野良着姿の農民の男が、鍬を肩にかけ、道半ばすれ違おうとした僧に声をかけた。

僧は九環の錫杖を打ち鳴らす手を止め、口元だけで静かに微笑し、すいと行く先を指した。

「あの山に用があります」

「……へえ、そいつはまた……は？ え、お坊様、まさかあの山つて、あの山だか！？」

腰を抜かさんばかりに驚嘆の声を上げ、男が指差したのは隆と天を五指の峰で突くそれである。

「両界山」

僧はひやりと刺す声音で、誰に聞かせるでもない風に呟いた。  
「ひえっ」

聞き咎めた農夫の背中をたちまちおぞけが駆け上がる。このお坊様はな―んも知らないんだべ、教えて差し上げねば。農夫は顔色を変え、身振り手振りですれほど無謀で恐ろしいことか言い聞かせた。  
「とんでもないだよ！ あの山は、五つの峰から五行山ともいって、それはおつそろしい山だべ！」

それから辺りを憚るよう急に声を潜め、縮み上がりながら説明する。

「いつも大体、昼ぐれえになると、これまたおつそろしい、雷様が鳴る音か、それとも岩が大量に転がり落ちてくるみてえな大音響がするべ。きつと化物が住みついでるだべさ。麓の村じゃもつぱらの噂で、誰も近づかないだよお」

しかし、僧はそれを聞いて笑みを深くすると、農夫の忠告と気遣いに深く礼を言って会釈し、迷うことなく道を登って行く。男は僧

をばかあんと見送って、何とも情けない顔をした。

奇妙な僧は、最後こう言ったのだ。

「その化物にこそ、会いに行くのです」

有髪僧　の姿に身をやつした思嵐は　九環の錫杖をつきながら、

足早に五行山こと両界山を登って行く。日は南中し、途中すれ違った農夫の忠告どおり、この時刻、雷鳴にも似た腹の底を震わす重音が辺り一帯に響いていた。

不気味な。

思嵐は知らず顎のあたりを手甲でぬぐい、ぐっしりと汗をかいているのに気づいた。

これは何たる妖気か。饅えたような臭いが鼻をつく。行き場のない妖気が何百年も堆積し、倦んで発酵するに任せている。

これを、一匹の妖怪が発しているのか。

そう思えば、生唾を嚙下し、はやくも両界山を覆う妖気に吞まれかかっている己に苦笑する。やれ、体は正直だ。

『逃げたがり』の自分は、すでに保身を求めて、脱兎のごとく人里へ駆け込みたがっている。嫌でも死地には敏くなる。本来の自分が深淵から顔を覗かせ、危険から逃れ、安全な場所にいたいとそのことばかりが頭を占める。

あまり変わってはおらぬようだ。

道姑となつて、得た力に胡坐をかいていたのかもしれない。今や、思嵐はただ人だった。下界落ちさせられるに従い、仙としての全ての力を奪われ、新たな『人間』の肉体に魂を入られた。普通の人間と変わらない。『痛がり』で『怖がり』で『逃げたがり』。力を剥ぎ取られては、恐怖に耐えうるなどできない。元の思嵐に逆戻りである。

力の上に寄って立つ強さであったのなら、私は何も変わっていないのだ。

少なくとも、ただ人の身でありながら、思嵐を助けてくれた高蘭や母、師父の気高さにはとても追いつけない。

とぐる巻く大妖のけはいに、がくがくと膝頭が笑うが、九環の錫杖を痛いほど握りしめ、一步一步登って行く。足を止めることはない。止めたら弱さに折れてしまう。

齒を食いしぼり、瘴気の濃厚な方へとあえて進む内、木立が途切れ、断崖絶壁に面する猫の額ほどの開けた空間に出た。

「よお、坊主」

屈託のない呼び声は、ずいぶん低い位置から聞こえた。

ぎよつとして、地面に視線をやれば、少年 いや、あどけなさを残した青年が手を振っている。

なんともない光景だ。

しかし、尋常でなかったのは、彼が腰から下を巨大な落石に押し潰されるようにして、地面に這いながら思嵐を見上げていたことによる。

常人なら圧死しかねない状態のはずなのだが、本人は実に晴れ晴れとしたにこやかな表情だ。全く苦にしていない様子がまず普通ではない。また、崖下に下半身を巻き込まれているため、目測でしかないが、かなり身長が低く、ありていに言って小柄だ。しかし、その存在感は並のものでない。着込んでいるのは幼い面立ちに不釣り合いな鎧で、白地に紫の蔓草模様が実に見事な一品である。荘麗な武人の姿でありながら、ほとんど少年のような無邪気さな笑みは悪寒を伴う違和感を増大させる。

あまりに非現実的、不釣り合いな視覚情報を一挙に叩き込まれて、思嵐の頭は一瞬虚を突かれる。

なんだこれは。

その一瞬の空白は愚かの一言に尽きた。

ここに何がいるのか、分かっている、来たというのに、見た目に惑わされ、不覚をとった。子供なのか少年なのか、青年なのか。いかにも面幼な印象のそれは、邪気のない笑みを浮かべる。



「出せ」

言葉は力を帯び、力は圧倒的支配性を持ち、支配力は見えない暴力となって思嵐に鉄槌を振り下ろす。身の丈に合わない低い声は、表情と声がちぐはぐだ。何より、塗り込められた妖気のうねりに、思嵐はがくりと膝を折った。九環の錫杖にすぎらなければ、膝をつくだけではまず、更に無様を晒しただろう。

ぼとぼと珠のような汗が滴り落ちる。圧倒的強者の前にある時、圧倒的弱者にできることとは一体何だろう。

だが、と思嵐は自分の優位を確信した。

出せ、とは、出られぬ、と同意なのだ。

「よう、クソ坊主。出してくれよ」

な、と両手を拝みあわせ、懇願する姿はどこかひょうひょうとしていて憎めない雰囲気があった。

「なあ、これ見てくれよ。背中の中岩についていうか、山そのものな」

天を指差し、少年は深々と嘆かわしいとばかり溜息を吐いた。

「ちよおつと天界で羽目外したからって、如来のおっさんが人のこと問答無用で封印してきてよ。俺、自力では抜けられねえの。法力莫大な坊主でないと封印解けないというありがたーいえげつなーい御心で、この苦行も五百年の歳月だ。なあなあ、気の毒だろ。かわいそうだろ」

息継ぎもなくまくしたてて、最後につこり笑う。

「だからな、すんげえ簡単なことだから、そ、その上の方のな、札。ばつちいやつな。こうびりつと破って捨ててくんねえ？」

「は」

思わず思嵐の喉が震えたのを聞き咎め、少年の容貌をした何かは眉根を顰める。

次の瞬間、思嵐は身体を折り曲げて爆笑していた。

「ふ、っあは……！ あはははは……っ！ 妖怪、貴様ふざけるのも大概にしておけよ」

「やあな感じだな、クソ坊主」

「貴様の犯した数々の罪状を知って、何故仏弟子である者が封印を解くと？ 五百年で脳味噌まで湧いたようだな」

そこまで告げて、思嵐は不意に表情を消した。

「 齊天大聖孫悟空」

落ちた沈黙は痛いほど肌を刺す。

齊天大聖。

猿の妖怪には過ぎた名だ。自称でもあったか。

呼ばわった思嵐に、少年もたちまち鼻白んだ面持ちで、しかしすぐにくつくつと肩を揺らした。

「何がおかしい」

「いんや、地元の連中が止めただろうに、のこのこやって来た阿呆な坊主をからかってやろうかと思ったが なかなかどうして、如来も粋な計らいをする」

「何を」

「確かに俺の脳味噌も錆ついていたかもしれん。そうか、五百年目だ。如来は約を違えなかった」

クソ坊主、よく聞け、と少年の大きく零れおちそうな杏仁型の赤い目が、 暗く喜びと期待と嘲笑を織り交ぜて輝いた。

「あんたが俺の封印を解きに来ることは、五百年も前に釈迦如来の筋書きにあっただってことさ」

なあ、玄奘三蔵。

## 緊箍咒

「だから何だ」

思嵐は吐き捨てた。もはや侮蔑を隠そうともしない。

「御仏の深謀遠慮など猿の妖怪などに分かってたまるか。私もお前のような妖怪など助けたくはないが、菩薩がお前の封印を解けとおっしゃるからそうするまで。例えそれが五百年も前から如来の内でお分かりになっていたとして、何の不思議がある？ 何の問題がある」

三千世界の話を聞かされた後となっては、蓮華の花弁のように並び立つ幾億幾千の世界と月日の中で、玄奘三蔵が何万何千回とこの猿の封印を解いたとしても、ましてそのことを如来がご存じとしても、何の疑問があるう。疑問など浮かべてはならない。そんな後ろを振り返り、疑い、迷っているのは、この過酷に過ぎる道中どうして耐えられよう。

他にすぎるものもないというのに。

そう思う自分自身が嘲笑的である。

思嵐は基本、常に何かに依存している。もはや体質だ。

こうして何かに依存することで、安寧を得て立とうとしている。

危険だと思う。常に絶対的にすぎりつけるものを求めてふらついているだけの自分を浅ましいと思うが、理想論だけでは生きてゆかない。

人には。

希望を託す対象が必要だ。

祈りを捧げる対象が必要だ。

寄りかかる大樹が必要なのだ。

美しくて何の役にも立たない『それ』が必要なのだ。

日々の糧を削ってまで、祖霊や神仏を奉るのは何故だ。

恐ろしいからだ。この広過ぎる世界の中で、狭過ぎる思考の現在

が恐ろしいからだ。

精一杯の自分は『今』に必死で、明日の『未来』も考えられぬからだ。

明日は未知で、未知のものにこそしか託せない。

託して縋りながら救いを求める。

救われようとすることで精神の安定を保つ行為は、自らを救うことに似ている。

神仏といった絶対者に逃避することで、かえって均衡を取り戻し再度現実に戻ち返っていくことと、その絶対的存在に依存しきって思考を放棄することは別である。

何かに縋らなければ生きてはいけませんが、委ねきって考えることを止めたくない。それでは、『私』は死んでしまっだろう。

その功罪を踏まえ、恵岸行者の、引いては観世音菩薩のいうことを、信じてみようと思う。盲目にはなく、信ずることができると『私』が判断して信じてみようと思う。

無論、自分などが果たして『玄奘三蔵』による大呪法のもう一つの要になりうるのかと言えば、胡乱ではある。

だが、これを自分にも何かできるのだと思える機会ととらえることができるのではないか。あるいは『始まり』ととらえて、前に歩き出せるなら、それは思嵐にとって不明瞭で恐れであった『未来』への志向性だ。

生きてゆける。

自分など、と思う苦しみの泥の海を、沈むことなく、何とか一步一步踏み出していける。

なぜ私が生き延びたのか。なぜ生かされたのか。生きていてもいいのか。

苦しい。苦しい。苦しい。

繰り返し満ちては引く潮のような疑問と痛みに、一つの回答を出して、ぎりぎり均衡を保てる。

自己満足かもしれない。贖罪に酔っているのかもしれない。それ

でも、私が私を生きていいと思えるなら、それは『救い』だ。それが思嵐の信仰の形だ。

信ずるならば、と思嵐は嘆息した。

取りつくしまもない、冷淡な反応をしていた思嵐の面変わりに、妖怪が興味深そうな表情を差し向け、様子を見守る。

再度心中に唱える。

この道を選ぶ『私』を生かしてくれた人々を信ずるならば。妖怪を封じるおさえ札を見やれば、『オン・マ・ニ・ハツ・ミ・ウン』と六字の真言が読まれた。

思嵐は如来の法力のほど、まして緻密なまでの封じの結果に感嘆し、震える手で札に手をかける。

私は常に恐れるだろう。私は常に逃げたがるだろう。今だって死ぬほど怖い。何が正しいのか分からない。選択することこそが恐ろしい。

だが、私を生かしてくれた全てを信ずるならば。

この大妖を恐ろしいとも思うし、全ての妖怪が憎くてたまらないが、まずは 思嵐は札を破り捨てた。

ここから始まるのである。

結果は、非常にあつけないものであった。

岩山と同化し、下半身を押し潰し取り込まれていた妖怪は、岩が泥に変わったかと思われるよう、蛇が這い出るのにも似たするりとした動きで抜け出した。

あまりにもけはいがないので、妖怪がすぐ傍に立っていた時には、驚異に思嵐の背中をどつと冷たい汗が流れた。

妖怪は横合いに立ち、凝<sup>じ</sup>つと下界を見下ろしていた。

まるで岩のようであった。

気づけば、辺りに立ち込めていた濃密な妖気は払われ、びゅう、と清風が冷たい空気を孕んで緑の匂いを運んだ。

不意に、妖怪は息を吸い込み、肺をめいっばい膨らますと、

「空気が、美味いぞおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおお！」

天を突けと叫んだ。

鼓膜がびりびりし、思嵐は腰を抜かすかと思った。

何だ、こいつは！

ハハハハハ！

山岳に木霊する呵呵大笑は、その小さな身体のどこから響いて来るのかと思うほどであった。

思嵐は目を見開き、気おされていたが、やがて呼吸が容易くなっていることに気づいた。妖怪を中心に淀み沈殿していた五百年分の妖気が、要となる封印を失って、一掃されたためだった。

そして、その蓄積した莫大な妖気だが、風に吹き払われたものこそ一部であって、ほとんどは再利用された。

すなわち同人に。

「ん？」

妖怪は違和感にか、火眼金睛が上目づかいに宙を睨んだ。不思議そうに己の額を触り、異物の感触に顔面を歪める。

「何だこれ」

尖った爪が、がりがり金属をひつかく。恵岸行者に聞いていたとおりだと、半ば驚嘆、半ば安堵の思いで妖怪の額を見つめた。

五百年前、天界を騒がせた罪人を、『一時的』に解放する際に備えて、安全弁が講じられた。

『最初』から、この大妖を解き放つ際は、本人の堆積するに任せた五百年分の妖気をもって、枷とするように条件づけされていたのだ。

如来は両界山を一種の巨大な回路に見立て、妖怪自身もその一部とし、同年数これらを天地巡らせ続けることで、強力な法具を作る土台とした。

「緊箍児きんぐじ」

呪具の名を口にしたことで、妖怪は一瞬の空白の後、殺気を爆発

的に膨れ上がらせる。

「おいおい、坊さんよ、人の頭に何ろくでもねえ名前のもん勝手に  
はめてくれてんだ？」

額を金の輪　緊箍児を外そうと試みて、妖怪の幼さの残る顔が  
不愉快げに歪んだ。

「なんだあ？　外れねえじゃねえか。あれか、如来のおっさんの  
仕業か、おい」

「その輪は、魔を伏す法具。戒めだ。仏法に背けば覲面に頭を締め  
付け、酷くなれば頭蓋が潰れるようになっていく……」

脳裏に警鐘が最大限鳴るのを自覚しながら、思嵐は無駄と思いつ  
つも間合いをとった。

「改心したかも分らん妖怪を、ただ無策で野放しにするとするか  
？」

「だよなあ……って、納得するわけねえだろ」

笑顔のまま岩肌へと拳をたたきつける。起点から蜘蛛の巣状の罅  
割れが走り、中心部は岩壁を深く抉った。

妖怪にはにこにこと無邪気な笑みを浮かべていたが、目の奥は笑  
つておらず、背筋の凍るような脅威を感じさせる。

「なあ、ついでにこれも外してくんねえ？　悪いことは言わないか  
らさ。でないと、あんたの胴と頭が外れることになるかもなあ」

ゆっくりと思嵐は後ずさる。

「自身で思い当たったのだろう。如来の為されたこと。私にはその  
発動の権限はあっても、外すことなどできん」

「……ち」

童顔を俯き加減に舌打ちし、一瞬の後に、「あ」と思っ間もなく、  
思嵐の肩を親しげに抱いていた。

「なっ」

首を落とされるやも、と緊箍児を発動させる緊箍呪きんこじゆを唱えかけた  
思嵐は、この距離では今更間に合わないかもしれないと瞬間死を覚  
悟した。

妖怪はすごい、と顔面を近づけ、口角を上げた。

「まあ、いいや」

「は？」

あつけにとられ、顔面を固める思嵐に、肩を抱いたまま妖怪は芝居がかって首を左右に振る。

「いいわ。どーせ、あんたも末端だろ。言われるがままの下っ端脅してもどうにもならんねえよな。悪い、悪い。無理難題言つたな」

妖怪は自己完結し、さも同情と理解に及んだとばかり、うんうんと頷いている。

「このけりは如来のおっさんにつけさせるからよ。ともあれ、まあ、動けるようになっただけでもすげえありがたいのは事実だしな」

ただし、と細まる赤い目は、思嵐の心臓を凍りつかせるには充分な酷薄さを孕んでいた。

「その、今唱えようとした呪文がなんかな、使いどころつてえのを考えた方がいいぜ」

思嵐はのけぞったまま目を見開き、妖怪の言わんところを察した。この呪の効果は絶対であるが、もろ刃の剣ともなる。

妖怪は、緊箍児を使用するならば、死を覚悟して使えと釘を刺したのだ。

妖怪の反射神経を思えば、唱えるより先に首を落とされる可能性が高く、一方距離をとっていれば、思嵐に有利。

また、妖怪が思嵐の殺傷に及べば、少なくとも無罪放免とはいかず、再び両界山に封印されることが考えられる。

妖怪自身が言うように、額の輪で行動を制限されると、山を重石に一切身動きが取れないのでは、天と地の差があろう。

多少なりとも頭が回るのであれば、緊箍児の使用者を殺すことで得られる一時の開放感と引き換えに、仮初の自由まで手放しはすまい。

すなわち、妖怪は緊箍児という強力な法具で直接にだけでなく、背後に控える再封印の危険性によって、二重の意味で縛られている。



ここから導き出される結論は、面白いことだが、緊箍児は本来使用を目的としていない。

緊箍呪を唱える者を殺害することによって、この妖怪の明確な造反をたちどころに知ることができる、それこそが最大の目的であり、また牽制なのだ。

妖怪にとり、最も恐れるべきは、思嵐を殺すことによって、天界引いては如来に対して、二心あり、と取られる。あるいは、その口実を与えることである。

つまり、警鐘である緊箍児を鳴らさないよう、馬鹿でないならば行動には注意を払わざるを得ない。

この二重の構造こそ、最大の抑止力であり、如来の叡智であった。もしくは、奸智とも言えるか。

「まあ、お互い如来に振り回される同士、仲良くしようぜ、おっししょーさん？」

ぽんぽん、と肩を叩かれ、思嵐の顎が落ちた。かに思えた。

「お師匠さん？」

「あれ、聞いてねえの？　まあ、ちょっとそこ座って聞いてくださーいよ」

妖怪は急に口調をしおらしく改め、岩の腰かけに促したが、不愉快なにやにやとした笑いは引つ込めようとしなない。

「俺はですね、五百年の長きに渡り、如来のおっさんの命で、山神や土地神に管理されておりまして。飢えた時には鉄丸てつがんを食らわされ、かわいた時には、銅汁を飲まされて、その日その日の飢餓をしのいでいたわけなんですよ」

なんとも凄まじい五百年の歲月である。

「さすがの俺も心弱くなって日がな一日誰か解放してくれねえものかと切々思っていたところに、如来の手先もとい、南海の観世音菩薩が通りすぎり、俺を見舞っていったわけですが、俺がひたすらに修行いたしますので、大慈を垂れたまえと言え、例の『そなたが心を入れ替えて仏門に帰依するならば』と一説ぶってですね。来

るべき日に取經の者を遣わし、そいつに俺を救わせるから、その者の弟子になつてはどうじゃと言われたわけです。ああ、それに何より、五百年前の去り際、如来のおっさんが俺の世話を任せた山神、土地神におっしゃることには、『こうして罪の果てる日の来るのを待てば、おのずから人あつて彼を救うであらう』と俺に予言をくれたまわつたわけで。長々とお粗末さまでした」

「……そのような」

魂を人の身体に移すにあたつて、恵岸行者に、言われたのは、次のことである。

『下界に降りてまず』

如来の五指を五つの連山と化した五行山　今は名を改め、両界山に向かい、封印せられし化け猿を解放せしめよ』

『化け猿は、五百年より昔、天宮を騒がせた大妖なれば、法具『緊箍児』を授ける故、場合によつてはこれを使うための『緊箍呪』を唱え、伏するがよい』

『化け猿をどう扱ふもそなたの自由ぞ』

すなわち思嵐の胸先三寸に任されたわけであり、仮の師弟関係を結ぶなどとは一言も聞いていない。

とはいえ、正直、これからの艱難辛苦を具に嘗めさせられよう道程において、ただ人である思嵐には、供の一人もおらずでは、先行きがあまりにも不安であつた。

思嵐がただ人である以上、守り手もただ人であつては困る。

これから相手にするのは、病魔疾病、流砂に氷壁といった悪環境だけではない。人外のものを一手に引き受けるのが役目。

毒をもつて毒を制するというわけか。

「あい分かつた。これより、お前のことは我が弟子と思う。法名は」

「あー、なんだ、法名はけっこう。俺には、孫悟空という素敵な名前があるんでね」

「悟空　悟空行者か。西方までの道行、よろしく頼みますぞ」

思嵐もまた口調を改めた。

この妖怪、化け猿の胸中を思えば、油断ならぬ、と思えばこそであつた。

「はっは、中々楽しい道程になりそうですね、おっししようさま！」  
小馬鹿にした笑いを弾けさせ、互いに腹に一物隠しながら、こうして仮初の師弟は対面を済ませ、五つの連山を頂く両界山を後にしたのである。

西を目指して。

洞府の奥深く、闇の濃淡に濡れるような黒い髪も衣も溶かして、白い指先と面ばかりが玲瓏と青い燐光に浮かび上がる。

足元には、我こそはと集い馳せ参じた妖怪が膝をつき、または額づいていたが、その大妖は疎んじるといふより無関心であり、無気力でもあつた。

恐るべきことに、かの両界山に堆積するに任せた妖気と『同等』のそれも倦んで久しく、洞穴を飽和状態にしている。

玉座に肘をついて何もかもに飽いているかのように、居並ぶ配下を睥睨するでもなく、いずれか遠くを見るようであつた大妖が、ふと、その白い面を上げた。

「いかがされました？」

近侍の高位な妖怪が、気鬱の解けぬ主の僅かな変容に、何事かと気色を窺つたが、妖怪自身主君より返事があるとは期待していなかった。

しかし、大妖は予想を裏切り、抑揚を欠いた酷く冷淡な声音の中、僅かに驚きを滲ませ、独り言のように呟いた。

「五行山が動いたか……」

五行山？ と配下は眉根を寄せ、次の瞬間驚愕に息を呑んだ。

「で、では、齊天大聖の封印が解かれた、と？」

大妖は最早興味が失せたとばかり、沈黙と静寂に再び身を沈めたが、配下は拱手して、さつと身を翻した。

「ふふ……ほほほ！ 面白いことになってきたわ！」

耐え切れず紅い唇から零れて反響する笑いに、控えていた妹々たちが軽口を叩いた。

「大姐、ごっ機嫌だねー、きやは！」

「ほほほ！ ここにいたり、天数が動くようじゃ！ まずは、誰か、両界山に急ぎ行って、様子を見てまいれ！」

「ういういさー、まっかせてえ！」

きやは、きやはは！ と甲高い笑い声を立てながら羽音とともに飛び立つ妹たちを見送って、妖怪こと月下公主はお抱えの妖術師の下へと足を急がせた。

「そう、まずは。まずは、我らが大兄の封印が解かれしは、奇瑞か、それとも 確かめることじゃ……」

## 道程

日が落ち、ぱちぱちと焚き火の音が爆ぜる中、平らかな岩に腰を下ろし、思嵐は手元の地図に視線を滑らせた。

玄奘は長安を出たか。

とすれば、まずは、

長安

唐の首都出て、と指先が西を辿る。絹の道シルクロードの東の起点はこの長安である。ここから黄河と交差する、

蘭州

これを過ぎて、黄河以西を河西地方と呼ぶ。北に砂漠、南にキ連山脈に挟まれた細長い東西地域が結び、

涼州、

甘州、

肅州、

瓜州、

沙州

これら主要なオアシス都市を右下から左上へと斜めに抜けていく。このオアシスはキ連山脈の雪解け水が湧き上がって形成したものである。更に西、

玉門関（敦煌）

これまでを、『黄河の西（河西）』をゆくというので、『河西回廊』と呼ばれるものである。なお、この河西回廊の西端にある、

酒泉、

これは酒が湧いたと伝わる泉や、後の唐代詩人「王翰おうかん」が謡い込んだ夜光杯やこうはいで有名な「涼州詞りょうしゅうし」で知られる。

葡萄美酒夜光杯 欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑 古来征战幾人回

葡萄の美酒 夜光の杯

飲まんと欲すれば 琵琶馬上に催す

酔うて沙上に臥す 君 笑うことなかれ

古来 征戦 幾人か 回かえる

葡萄の美酒を、夜光杯で飲もうとしていると、

誰かが馬上で 琵琶の音色を鳴り響かせ、

早く飲めよと催促する

たとえ酒に酔いつぶれ 砂漠の戦場に倒れ伏してしまおうとも

どうか 笑わないでくれ。

昔から 戦に行つて いたい

何人の者が 無事故郷へ 帰つて来ただろうか。

辺境の地で、明日をも知れぬ悲哀を謡ったものであり、現在の思嵐にも奇妙に合致するものであった。

さて、玄奘の出国時に戻れば、唐朝の行政は始まったばかりで、

西域まで国境支配が及んでいない。

その為、国民は外国への旅行を国法により禁じられていた。

おそらく出国の禁を犯した彼には、行く先々に捕縛の知らせがかつていいるはず。そちらは、俗世のこと、玄奘の才覚で切り抜けてもらふよりない。しかし、跋扈する化け物達は、思嵐の領分である。火を見つめたまま、またも、無様を晒すかもしれないな、と口端が歪んだ。

「悟空」

仮初めの同行者の名を呼べば、闇の静寂に「応」とこたえる声はなかった。ちよつくら腹に入れるもの探して来ますと飛び出していたきりだ。もしやそのまま逃亡したのではないか。疑念が気泡のようにふつふつと水面に浮かび上がって来るが、あの喰えない猿が、逃げた場合に被る不利益を看過するとは思えない。それとも、天秤

にかけて、逃亡する益が勝ると判断した可能性も否定はできないか。あらかじめ集めておいた枯れ枝を一本拾い、薪に投げ入れようとした思嵐は、かがんだ際に、足の爪先の延長戦上にいるものと『目が合った』。

女の生首。

地面から斜めに横顔が生えている。

半ば大地に埋まった女の目が、弓なりに弧を描いた。嗤<sup>わら</sup>っている。目が合う。

一瞬の空白の後、

足下から脳天まで、ざわつと鳥肌がはい上った。

悲鳴を飲み下したのは、身体が凍り付いた為であり、また怪異に對して、大声を上げてはならぬという『経験則』の為でもあった。動と静、現実と非日常の拮抗する境においては、投じた一石が容易く均衡を突き崩すことがある。

対峙する異存在に気づいた瞬間から、奇妙な押し合いが生まれた。張り詰めた糸はふつとりと切って落とされることを前提に存在し続ける。崩壊をこそ思えば、かえって蛇に睨まれた蛙のように足下から根が生える。

そして、人間は長時間の緊張に耐えうるようにはできていない。

確実に、場は崩れる。それだけが痛い程に理解できる。

睨み合いは思嵐の一方的な威嚇だった。怪異は思嵐のおのきなど頓着していない。生首はうつむき加減に顔面半分を土塊に埋まるようにしてありながら、次第に緩慢な動きで大地より迫り出そうとしていた。ほとんど、振り向くような動きで徐々に全貌を露わにしていく様子は、かえって思嵐の恐怖をあおる。

歪に白い顔面は、頭髮ばかりが濡れ濡れと黒く豊かで、その半分突き出た唇は血を刷いた不吉な赤色だった。割れ目が僅かに押し開き、白い歯の隙間に見える真っ黒な口腔が見える。

舌先のもぞく虚ろから、か細い声が漏れ出した。

猫の仔が鳴くような小さな呻きは、「あーあー」という意味をな

さないものだが、怖気を催させる。嘆きよりも次第に歓喜の割合が  
滲み増して行き、もの狂いめいた嬌声に変じて行く。不吉という概  
念、現象が形を取ったらこの生首になるのではないか。

気持ち悪い。強烈な不快感がこみ上げた。思考が重く痺れて行く  
に従い、疑問が浮かび上がる。

何故こんなものが、目の前に現れる。何故？

答えは一つだ。私が選んだからだ。化け物ども相手に、無力な人  
の身で囷になりますと、この口が答えたのだ。そう志高く大役を引  
き受けながら、今すでに脳裏を過ぎるのは後悔である。ただ一人き  
り、闇の中で生首と対峙して、どうして恐れず立ち向かえよう。怖  
い、逃げ出したいという衝動は、雲霞のごとく後から後から沸き上  
がる。ねじ伏せるのは容易でない。それこそ全身全霊の力を要して  
まだなお完全に抑えきれない。恐怖を理性が凌駕するには、あまり  
にもそれは生存本能に根ざしていた。

しかし思嵐は巖いわおのように動かずにいる。

思嵐の胆力が恐怖に勝ったわけではない。逃げ出せば化け物相手  
に背を向けることになり、死ぬかもしれないという直感が、目を反  
らすことを許さず足を留めさせたに過ぎない。

いつになれば、と思う。いつになれば、たちまち恥じない自分にな  
れるのだろうか。何もかも投げ出して逃げてしまいたい自分を御  
することができるのか。

そんな日は決して来ない。思嵐はどこまでも『人』なのだった。  
『人』であることを止めれば、彼ら異形と同じものに同化してしま  
えれば、この思いからも解放されるのだろうか。いつそそうなりた  
いと願ってしまう己の弱さこそ、恐ろしかった。

ああう、ああう、となまめかしくも生理的嫌悪をかきたてるむせ  
びが激しくなっていく。

最初斜めに刺さっていた女の生首はほぼ地面から迫り出し、完全  
に思嵐を振り向こうとしていた。

いや、だ。



思嵐は絶叫したかった。  
嫌だ。嫌だ。もう嫌だ。

もはや何の力もない。無理だ。怖い。お願い。  
ずっと封じて来た筈の悲鳴がこぼれ落ちる。

お願い、たすけて。

ぐしゃり。

女怪の嬌声はぷつりと途切れた。突然訪れた不自然な静寂に、思嵐は事態の把握もままならぬまま呆然と見上げる。

長得物の先で、女怪の頭は高所より腐れ落ちた熟柿のように叩き潰されていた。

知らず、思嵐の喉が鳴る。

「お師さん、こんな薄気味悪いのと熱く見つめ合って変わった趣味をお持ちですね」

「じ……くっ」

得物でぐりぐりと頭部を潰しながら、炎に照り映える悟空の顔は笑っていた。

「それより、お師さん。食い物持って来たんで、夕飯にしましょうや」

食えるか。

いつそ胃液を吐き出したい。人の身では、何もかもが現実味を帯びて生々しく、血の臭いにも湯気の立つ肉にも耐えられない。

それでも。

食わねばならぬ。

もどしてでも食わねばならぬ。

旅は生やさしくない。

まして、悟空に侮られてはならない。

味方ではないのだ。信を預けてはならない。弱さを見せてはなら

ない。獅子身中の虫も使いようと思わねばならぬ。虚勢も張り続けられいずれ真実になるう。それだけの開き直りなくして、どうしてこの大妖を従えられる。

「……ただこう」

長時間同じ姿勢でかがんでいたため、動き出すとばきばきと身体の音がする。思嵐は恐慌も懦弱も、血の巡りとともに剥離せよと背を正して、托鉢の杯を差し出した。

何を考えているものか、悟空はふうんと鼻を鳴らし、

「あれは多分『飛頭蛮』でしたよ」

と世間話でもするように告げた。ああ、そうだろうな、と相づちを打つ。夜の間、頭が胴体から離れて、自由に飛び回る妖怪である。悟空は飯をよそおいながら、

「飛頭蛮のやつ、明日の朝には頭もない間抜けな身体が一丁上がりつてわけですね」

「首は身体なくして次の夜を待てぬというが、逆もまた長くは保つまい」

「でしような。ところで」

悟空の口元が弧を描く。

「腕、大丈夫ですか？」

何を言っているのかと思った。そうして気づかされる。腕を握る手がカタカタを震えている。指摘され、頭がかつとした。

自覚してしまえば、不安定な腕は踊るように手指の間から飛び出すかに思えた。止めようとすると震えが止まらなくなる。悟空は思嵐が辱めにどう対応するのか、にやにやと見物している。お前らは、と思嵐の内に何かが頭をもたげた。

それはかつての目も眩む怒りだ。

杯を強く握り、私は、と思い出す。

私は、こいつらの、昆虫の？根を塗り、脚をもいで愉しむにも似た稚気を憎悪してきたのだ。

お前達は知らない。知ろうとすら思うこともないだろう。

何の力もないということ。圧倒的強者の蹂躪に、ただ縮こまつてやり過ごすしかできないということ。命など簡単に摘まれてしまう。惨めさ。辛さ。恐ろしさ。五百年の懲罰でさえ、この大妖にそれらを教えることはできなかったのだろう。

ならば指を指して笑えばいい。

「私は無力な人の身、お前の助けなくば容易に横死しよう」

悟空がおやと手を止め注視するけはいがあつた。

「人間の身体はとても脆弱だ。お前達のような存在の気紛れな手出し一つで簡単に絶命する。その上病魔疾病、天災飢饉、戦など数限りない災いに常に脅かされている。だが、人にとっての災いなど、お前達には何の脅威にもならないだろう。お前達の身体は頑強だ。まして神通力広大なお前には想像もつくまい。我ら人の身にはどれひとつとしてままならず、どの災いも死ぬほど恐ろしい。人はその恐ろしさと常に向き合わされる。生まれてから死ぬまで、一瞬たりとも逃れることはできん」

この恐怖は、決して分らないだろう。生老病死の恐怖を抱えて人は生きていく。不老不死の神仙妖怪には知り得ぬ恐怖だ。お前達が虫けらのように扱う人が誰しも向き合う、そのことをもお前達は知らないだろう。

「お前達なら人が向き合う恐怖に耐えられるだろうか？」

私はそう思えない。だが、無意味な仮定、戯れ言だったな、といったん締めくくる。

「最初に言っておこう。私は恐ろしさの前に、これからいずれみつともなく醜態を晒すだろうし、泣いて喚いて逃げ出すかもしれない。それでも前科は山ほどある。だが地べたを這つても西へ征く。他人の命でつないできた生き汚さだから、簡単に旅が中座するとは思わないことだな」

長台詞に一呼吸置く。

「とはいえ、旅は長く困難は目に見えている。まして私は妖怪の前に無力だ。お前がいなくては困る。必ずお前に護ってもらふ。それ

に不服はないはずだ。お前はすでに承知している。そうだろう？

お前の本当の考えなど私の知ったことではないが、お前も何らか理由があつて同行しているのだろう。利害関係に準じて互いに互いの役目を果たせ。美しい師弟関係など望むべくもない、そんなもの吐き気がする。お前なぞしよせん妖怪、信を置くつもりなどはじめからない。妖怪など皆死ねばいい。だが私の考えなど、それこそお前も知ったことではないだろう。互いに違いのことなど知らぬ、道連れの片方はお前も含め妖怪は皆死ねばいいと思っている、もう片割れのお前はお前で何か胸三寸があるだろう」

それでもともに西へ往く。

異論はあるか？

長々と吐き出して尋ねたが、答えなど求めていない。

「んー、異論はないですよ。俺はあんたを護つて西へ往きましょう。泣こうが喚こうが途中止めたいと言おうが、引きずつても連れていきます。ただ護るにもやりやすさつてものがありますからね、俺の力に信は置いていただきたいものですね」

肩を適当に鳴らし、付け加えた。

「それと、他人をからかうのは俺の性分です。まあ大目に見てもらえるとありがたい。何しろ天帝に釈迦すらおちよつたんですからね」

思嵐は首肯し、先程のことだが、と切り出した。

「一つ、礼だけはいっておく」

悟空はきょとんと目を丸くし、次の瞬間には腹を抱えて爆笑した。「い、いやー、いい具合にねじ曲がつてますね、お師さん！ ちよつとだけ好きになりそうですよ！」

好きなだけ笑え、と思嵐は酷い気分の中、最初よりは多少ましな気持ちで夕餉を口にした。妖怪は皆憎い、死んでしまえ。だが、悟

空に命を救われたことには変わりない。悟空にとって大した徒勞ではなかったかもしれない。それでもその事實は曲げられず、感謝の気持ちも本物だ。思嵐は他人に何度も救われた。救われた分だけ、命の尊さを多少なりとも知っているつもりだ。その上、彼にはこれから命を預けることになる。文字通り、命綱となろう。だが、造反するかもしれない縄一本に命運をかけるつもりはない。恵岸行者によれば、観世音菩薩が用意した従者は三。

残り二人は、悟空ほど癖がなければよいが。あまり期待せぬ方がよいだろうなと嘆息する。

同時に思嵐は揺らぐ炎を見つめ、まだ見ぬ玄奘に思いを馳せた。

この、同じ星空の下を、かの僧も歩いているのか。

空の下、つながっている。

しかし、母も、高蘭も、師父も。どれほど歩こうと、脚を棒にして彷徨つても、もうどこにもいない。生きている限りなのだ。時も隔たれてしまった。

私は、こんな遠いところまで来た。

この道程を、彼らが見ているわけではない。彼らはどこにもいない。それでも、私が生きていることが彼らの生きた証であるように思える。ならば、彼らに報いるよう、生きなければならぬ。私の中に彼らの欠片がある。だから、彼らとともに私はこの道程を往く。

どんなに恐ろしくとも。

## 流沙河

烏斯藏国は高老莊。

地理的にはチベットにあたり、高という姓の家が多い村（莊）と思っただきたい。

思嵐一行は、そこで商家高大公の婿養子　その正体は豚の妖怪とひと悶着を起こすも、それは観世音菩薩がすでに、

『猪悟能』

の法名を授け、来るべき日、取經の者の弟子となり、西天へともをするべく用意した者であつた。

この猪悟能、元は天の川を管理し、八万の軍を指揮する『天蓬元帥（水軍司令官）』であつたが、蟠桃会で酒に酔つたとき広寒宮（月の宮殿）に踏み込んで、嫦娥じやうがという月の仙女に襲いかかり、玉帝に二千つち打たれた末に天界を追放されたという呆れた経歴の持ち主である。魂を下界に投げ落とされた際、あやまって雌豚の腹に入り込んでしまい、豚の妖怪と成り果ててしまったわけだが、かの妖怪に授けられた法名はその姿にあやかっている。

『猪』

とは豚、イノシシのことであり、『猪悟能』は豚の精にちなんで姓を定められたわけだ。

菩薩もしやれた真似をする、とは悟空の言であつた。

「大兄、そりやあひでえよ。俺ア真剣に悩んだんだぜ。天河の天蓬元帥といえ、水も滴るいい男つてんでえ女も男も切らしたこたあなかつたんだからよお。それがいまや豚。あー豚。性欲より食欲が勝るってんだから」

まあいいけどよおーと耳の穴をほじりながら、身の丈にあわぬ九つの歯のついた馬鋤を担ぐのは、だらしなく着物をはだけた妖美に

中性的な容姿の男で、黒髪を結い上げると女のように頭に簪をざくざくと適当に挿している。興奮すると黒い豚の化けものの本相をあらわすのだが、今は紅でも引いたかのように濡れ濡れと赤い唇もなまめかしい。容姿が艶やであるだけに、言動のだらしなさ、粗はかえって不思議な不一致の魅力となっている。女犯をおかして下界に投げ落とされたというの頷ける話ではある。

「八戒」

思嵐は馬上から眉根を寄せて咎めた。この白馬も、ただの馬ではないが、それはまた別の話とする。

さて、この思嵐が呼んだ『八戒』とは、猪悟能の呼び名である。すでに菩薩に法名を頂戴し、更にはその教化で八つの忌みものをしていたと聞き及び、今後も精進を破ることのないよう思嵐が呼び名としたものだ。一種の釘刺しでもある。

「はいはい、師父、申し訳ありませえん」

咎められ、八戒は実に軽い返事である。

思嵐は馬上でつつぶしたくなった。この面子の中で、唯一気遣いというものを知っている白馬はこころなし、心配そうに自らの背を振り返り、歩を緩めた。なんでもないと頭を振り、手綱を握りなおす。貴様ら、少しは白馬を見習えと心中ののしつても罰はあたるまい。

「お師さま。兄弟子が『悟空』で弟弟子が『悟能』とは、これもまた菩薩も語呂合わせがよいですね。あつはっはっ」

一方兄弟子がわざとらしく皮肉っていたが、思嵐は無視した。付き合いきれない。

兄弟子はひょうひょうとした油断ならぬ皮肉屋で、弟弟子は女癖の悪い現在大食漢とは、これいかに。

ため息しか出てこない。

素性はともかく、八戒という弟子を得て、更に黄風嶺こいつづれいを過ぎ、やがて一行は波浪逆巻く大河へと辿り着いた。

「これは……」

思嵐は白馬の脚を止めさせ、荒れ狂う波に呆然と呟いた。  
難所である。

じっと目を凝らすうち、河の傍にあるひとつの建石に目を奪われた。

文字が大書して彫り付けてある。

『 流 沙 河 』

更に石碑を見れば、小さな文字で

落ちたが最後、鳥の羽のかるきすら浮かべず 弱水の流れる

などといった意味あいの、四行句が刻まれている。

これは下手に強行軍ともいえない。鳥の羽が浮かばないほど浮力の少ない水質では、白馬で無理やり渡ろうとすれば、そのまま水底に沈んで二度と浮かび上がれないだろう。このようなところで溺死するわけにはいかない。

とうとうと流れる大河の前に、立ち尽くす思嵐であったが、その思考を破る明るい声があった。

「よし。豚。いっぱい行ってこい」

ちよつとその辺までお使いにいつてきなさい、といった軽々しさでこれは悟空。

「ええーっ 俺！？ なんでだよー、兄貴がいつてくれよ」

指名された八戒はおのれを指差し、不満をあらわにした。

「馬鹿も休み休みにしなさい。この豚野郎。てめーもともと天の川の天蓬元帥（水軍司令官）だろうが。お前が行かないで誰が行く」  
ひらひらと手をふって、いや狗相手に「しっしっ」とやるような具合で悟空は容赦がない。

「酷いよ。酷いよ。俺が豚だからって豚野郎とか酷いよ」

そこなのか、八戒。などと思嵐は悄然とする弟子の思考回路に疑



問を覚えなくもなかったが、保身第一で弟子たちの会話に割り込む気は起こらなかった。

割り込んだとて、疲労するだけなのは目に見えている。

八戒はぶつぶついながら、かついだ行李を地面に下ろすと、己の袖を捲り上げた。

「ちくしょう、俺が溺死したらここに立派な石碑を建ててくださいよ。いや、やっぱり嫌だ。言いだしっぺの兄貴が行けばいいんだ」

「ほら、とつとと行け」

背後から悟空が蹴りつけた。

派手な水音を立てて、八戒が大河に落ち、あつという間波浪に呑み込まれる。

そして浮かび上がってこない。

それきり音沙汰もない。

さすがに思嵐の背中を冷たい汗が流れた。

「う……悟空……」

さすがに今のはまずくはないか。

師匠の心の声を読み取ったか、悟空はしばしの沈黙の後、不自然に明るいつもろで振り仰いだ。

「大丈夫です。八戒の尊い犠牲を忘れはしませんよ」

お前が殺したし……！！

その時だ。

大河が身を振り、その大波の間から『ぺっ』という勢いで、人影を吐き出した。

「うぐえっ げほっ げほっ がはっ」

元が水軍の長である割に、思い切り水にむせている八戒である。

ぼたぼたと水滴をしたたらせながら膝を地面について、身体を折れ曲がらせ、大地をかきむしって必死に水を吐き出している。

「お前溺れたのか」

呆れを通り越した冷たい眼差しをぐさぐさと刺す悟空に、

「おりゃあ、今や肉の体はただの豚なんだよ！ 昔みたいにいかね

って、そうじゃなくて、気をつけろ！ 水底になんかいるぞ！！」  
いまだ苦しげに八戒が鋭い警告を放つ。

「！！！！」

流沙河が生き物のようにうねった。

その瞬間。

水流を頭蓋が押し上げ、一匹の水妖が水間に姿をあらわしていた。  
「顔色悪っ」

悟空が空気を読まずに遠眼鏡のしぐさで指摘する。

思わず弟子を九環の錫杖で馬上より打ち据えようかと思った思嵐だが、水妖の顔色を見て、同意せざるを得ないところがあった。

青白いというより、青黒い。今にも喀血しそうな血の気の悪さである。

病弱であつた己の母が思い出され、つい水妖に「大丈夫か」と声をかけたくなつた自分を抑制せねばならなかつたこと自体どうかしっている思嵐である。

一方水妖は、悟空の失礼な言も無視して、血の巡りの悪い容貌でおどろおどろしく告げた。

「己の棲家おれにこのような塵ごみを捨てるとは貴様ごみら許さぬ」

地を這う低音に、塵呼ばわりされた八戒が抗議の声を上げるのを、ぐしゃりと右足の裏で悟空が地面につつぶさせて、痙攣しながらも次第に息があがり、「あ、兄貴、もつと」とねだる弟子をさらにぐりぐり踏みにじる。嫌な悦びの方面に最近目覚めつつある八戒であるが、悟空が確信犯的に弟子の嗜好を加速させている節に、思嵐は見てみぬふりをすることにした。正直かわりあいたくない。

悟空がにやにやと「ならばどうする」と合いの手をいれれば、

「己は今虫の居所が悪くてな、貴様らの命で購ってもらおうぞ」

水妖はぬめる瞳で一行を睨み据えた。

「はっ」

悟空が嘲笑とともに吐き捨てた。

「命で購うのはためえの方だ。泣いて謝っても許してやらねえぞ」

そして足元の芋虫を蹴り上げる。

「この八戒が！！」

「ええっ 俺え！！！！？」

腹を蹴られて飛び上がった八戒が涙目で叫ぶ。

この孫悟空行者、極度の面倒くさがりであった。

おちよくられていると思ったのか、殺気を垂れ流し始めた水妖に、思嵐はどうか説得を試みようとしたのだが、すでに時遅く。

水中より躍り上がった水妖は、己の得物である宝杖を振りかざした。

「うお、俺か！ やってらんね！！」

迎え撃つは八戒。

太上老君より授かった九齒きゅうしの馬鐮で襲い掛かる宝杖を食い込ませる。

「ほう、間抜けな馬鐮のくせに、やるではないか。農作業でもしていたほうが似合いと思うがな」

揶揄し、凶悪に笑う水妖の人相の酷さはたまらない。水に濡れた黒いざんばら髪が青い顔に零れ落ち、瘦身であることもあいまって、落ち武者のような壮絶さである。

「ただの馬鐮じゃねえっ あと、農作業はお手のものだぜっ」

愛用の馬鐮を馬鹿にされ、八戒は自慢にならぬことを言い返した。実際にこの九齒の馬鐮、彼が天蓬元帥に任命された時玉帝から下賜された品なのだが、下界落ちして、農作業に使われていた。

「互角と思うなよ！」

怒りに任せ、まぐわを斜めに構えた八戒が吼える。

気のせいかな、形のよい鼻が次第に醜く突き出し、色しろの肌は黒い産毛へと覆われ始めていた。気のせいではない。比喩ではなく、その面貌は豚のそれへと変化していく。いや、変化が溶けてゆくといったほうが正しいか。一見色男ではあるが、その本相は豚。興奮のあまり、術が解けて、元の姿が浮かび上がってきたのだった。

「貴様、豚の妖物ようぶつか！！」

「しゃらくせえっ 豚で悪いかこのやろっ!! 俺を豚豚ののしつ  
ていいのは兄貴と師父だけだああっ」

とんでもない台詞が混じっていたようだが、思嵐は聞かなかった  
ことにした。

さても二匹は岸边で十合以上打ち合い、両者実力が拮抗している  
のか決着がつかない。

焚きつけた悟空といえば、先ほどの八戒のように耳の穴に指を差  
し込んで完全に傍観する態である。

これでは日が暮れる。

思嵐は今度こそ本腰を入れて仲裁しようとし、はっとその目を水  
妖の胸元に釘付けにされた。

首飾りだ。

さらさらと白い……気づいて、思嵐は口元を咄嗟に覆う。

あれは。

ざわ、と全身が泡立った。

あれは、骸骨の首飾りだ。

ここのつの

じゅずづなぎの

されこうべ

目の前に赤い紗がかかる。

鈍器で後頭部を殴られたかと思うほどの衝撃に、思嵐の時間が止  
まる。

頭が激しく痛む。

何かが脳裏に閃こうとしている。

不意に、菩薩に引き合わされたあの日、額を指差され、何事か囁  
かれたことが思い出された。

九つの数珠繋ぎにされた頭蓋骨。

それを水妖は胸元に下げていた。

九つの

人骨

流沙

旅人

僧

九人の

僧

旅

取経

流沙

天剣

水妖

飢え

食  
わ  
れ  
た

私  
は

私  
は

私  
は

私  
は

私  
は

私  
は

私  
は

私  
は

私  
は

激  
し  
い  
飢  
え

九回

九度とも

食われた

## 九つの頭蓋骨

あの、九つの骸骨は　あれは、『私』ではないか！！

それは、雷打たれたがごとき天啓だった。

胸をかきむしる何かが重たげに頭ももたげゆく。

頭がい骨の中で焦燥を掻き立てる銅羅の音が、がんがんと多重奏に響き渡る。

九回だ。九回とも食われた。

私は。

彼は。

あれは。

あれらは。

僧だった。

前も、その前も、その前も前も前も！

『私』は取經の僧だった。

遠い昔。

それとも前世。

あるいは仏法の掌たなこころ、無限に連なる三千世界のどこかで。

一人の僧が天竺を目指し、旅に出た。難所を越え、足を棒にして歩き、やがてとうとうと流れる大河に出た。その大河の名を『流沙河』。幅広は遠く、水底は深きこと極まれり、鳥の羽根のかるきす



ら浮かべず、葦の花の流る。稀に見る弱水の川である。困り果てた旅の僧侶は、流沙河に一匹の水妖を見た。

あ、と息を呑んだ瞬間、僧侶の前に、蒼穹よりひと振りの天剣、稲妻のごとき速さで飛来し、水妖の腹を貫く。

驚き打たれる僧に、腹から天剣を引き抜き、水妖は口を開いた。

「驚いたか、旅の僧よ」

「はい、驚きました。貴方はいったい、そしてその剣はいったい」

「知りたいか。ならば語ろう。己は、今はこのような醜悪なりではあるが、はじめから妖魔であつたわけではない。その前身は天神であつた」

「なんと。その天神が何故いまそのような姿に」

「元は天界の捲簾大将>ケンレンタイシヨウ<（玉帝の御簾を巻き上げるお側仕え）であつたが、蟠桃会の際、玉帝の宝である玻璃はりの杯を不注意で割つてしまつた罪で、その怒りにふれ、八百回鞭で打たれた末に下界へ追放されたのだ」

そのまま骨ばつた指の鉤爪が天を指さす。

「更には、こうして七日に一度天より鋭い剣が飛来して、己の脇腹を貫く。この責め苦をもう何年も何十年も何百年も繰り返しておる」  
僧はあまりの惨たらしい罰に同情したが、いかな仏弟子とはいえ、ただ人の自分にできることもない。

「己は天神の魂まで失つたつもりはなかったが、七日ごとにふつてくる飛剣の苦しさ耐えがたく、その上飢えになやんでは、人を取り食らうようになったのだ。己は餓えておる。餓えておるのだ、旅の僧よ」

水妖は声を荒げたわけではない。静かに淡々と告げた。であるがゆえに、その魂の慟哭は、胸揺さぶる重苦しい絶望を、暗い悔恨を、骨身まで刺す凍えた悲鳴を、ありありと伝えるものであつた。

「今や天神の誇りも地まで落ち、飢えと渴きを癒すため、通りがかる旅の者をとつて食らう妖仙と成り果てた。もう何十人殺したか、それとも何百人食らうたか、数も忘れ、はては数えることさえも止

めた。殺して食ろうた骸は、この鳥の羽すら浮かばぬ流沙河に沈めたが、不思議なことに、八つのされこうべだけは沈めても沈めても浮かび上がってきた。この河は弱水ゆえ、されこうべなど浮かび上がってくるはずもあるまいに、何故かこの八つだけが沈まぬ」

水妖は後半ほとんど独り言のように呟き、暗く鈍く光る眼で『私を見た。』

「さて、旅の僧よ。身の上話もこれまで。そなたの肉は甘いか。そなたの血潮は温かいか。そなたのされこうべは流沙に沈むであろうか、それとも」

遠く、粘りつくような熱を帯びた声が大声でもないのに鼓膜を揺らした。

名も知らぬ鳥が天高く鳴く。

『私』の足は、縫いつけられたように一步も動かなかった。

まだ。

まだ西天にはいたらぬ。

ここはまだ旅の途中。

志半ばにして、膝を折り、妖魔の類に貪り喰らわれるのか。

何も私は成し遂げておらぬ。私はまだ何者でもない。

こんなところで無残に屍を晒し、流沙に沈められることをよしとしようものか。

いいや沈まぬ。

身体は喰らわれ、水底に捨てられようと、この志まで沈むものではない。

この肉体が妖魔の血肉となり、骨は流沙河に沈もうとも、我が心は、一条光となって西天を目指そう。

それがならぬなら、どうか御仏よ、聞き届けさせたまえ。

我が遺志を誰か次代につなげさせたまえ。

地を這い、人の難にあい、氷壁の寒風に吹かれ、白い熱砂に飢え乾き、狐狸野党妖魔の類に我が身晒され、疾病病魔に苦しみながら、それでも一步一步、西へ。西へゆこうぞ。

願わくば、二人同行我が魂を運びたまえ。

我が志は、この弱水にも沈まぬゆえ。

我が智の宿りしされこうべもまた。

…

……

……

……ちがう

思嵐は叫んだ。絶叫した。そうではない。『私』は、わたしは、

彼は、私は、そうじゃない。

肉体が死のうとも志は西天へ？

違っただろう。そうじゃないだろう。

次代へ託す？

違っ。違っ。違っ。

そうではない。

わたしは。

塗金が剥がれおち、ぐしゃぐしゃの本音が顔を覗かせて産声を上げる。

本当は。

本当は。

死にたくない。

怖い。

生きながらにして食われるなど、そんな死に方があるか。怖い。厭だ。恐ろしい。何故私が。他に誰でもいいではないか、死んだ方がよい愚物など世にあふれておるというのに、何故この私が妖魔の餌食にならねばならぬ！！ ひい、厭だ。怖い、厭だ、いや、止めてくれ、痛いっ ひいひいひい、止めてくれ止めてやめてやめてやめ、め、

ぎや ああ ああ つ  
たす、 ひ、 あが、 げ、 ああ ああ ああ ああ ああ  
ああああああ

だ、や、だれ、だれか、だれかだれかだれか

お願いだ、と激痛に失せる理性のかけら、喉も裂けよと血を吐くように絶叫した。

たすけて

[illegible]

「はいよ」

と安請け合いする返答があつた。とたん、激痛は霧散し、思嵐は闇の底から光の中へと引きずり出された。視界は白濁とし、身体も真綿のようにぐんにやりと弛緩して感覚を失つていたが、次第に五感が多つてくると、思嵐は己の現在の態勢にぎよつとした。

「ご、悟空！」

舌がもつれた思嵐に、覗き込む姿勢で悟空はうすら笑いを浮かべた。

「ああ、いきなり落馬したんで、こう、不肖の弟子は師父をお助けしたわけですよ。いやあ、自発的にお師さまを助けるなんて、俺もちゃんと弟子らしくしているじゃないですか。我ながら感心します」

白馬の傍ら、悟空は片膝を地面につき、師の体を横抱きにして間近にぐつと顔を寄せた。天界荒らしの罰に太上老君の八卦炉でいぶされたという燃えるように真っ紅な火眼金睛の迫力に思わず、ひいつと喉が鳴りそうになるのをなんとかこらえる。

「しかし、お師さまものんきというか阿呆というか間抜けというか。弟子が戦っているというのに、乗馬したまま寝こけるたあ、この悟空、師父の凶太さ、いや肝の太さに恐れ入りました。白昼夢で馬鹿でかい悲鳴を上げて転げ落ちてきた時には、こんな頭のおかしな人はこのまま大地と仲良くなっていただこうかと一瞬愚考した次第ですが、一応身辺警護が俺の仕事なんでとっさに受け止させていただきましたけれどもねえ」

敬っているのかけなしているのか、いや後者であるのは明白なのだが、もって回った言い方は止めろと思う。

「……ご丁寧に説明をどうも」

「いやなに、このくらい。とっさに身体を受け止めることに比べれば全然」

どこまでも引きずる。

「それで、お師さま。怖い夢でも見ましたかね？」

からかう口調の悟空に、一瞬思嵐は無言となり、

「……ああ」

「おやまあ、存外素直にお認めですね」

「もういい、離せ」

「へいへい」

九環の錫杖にすぎり、ふらつく足で立ち上がると、今更ながら滝

のような汗でぐっしより衣を濡らしていることに気づき、大きく嘆息する。そのまま思嵐は岸部で打ち合う八戒と水妖に視線を戻した。

恐ろしい夢か。

考えてみれば、いつも悪夢を見ているようなものだ。

己が生き汚さの。

そしてそれがもたらす結果を。

「妖氣にでも当てられましたかね」

仮初の弟子がどうしてもよさそうに呟く声が聞こえた。

### 三の布石

ぐつぐつと脳が煮え立つような痛みがある。

目の奥の疼痛を堪え、思嵐は悟空を押しのけると、前後にふらつく身体でなんとか立ち上がった。

背後、弟子が師のやせ我慢と意地を失笑するけはいを感じたが、捨て置く。

じゃらんっ

流沙河の岸边に、九環の錫杖を打ちつけるようにして突きたてた。

「各々、武器を、おさめい！」

腹を震わす大音声で呼びかける。

水妖、二番弟子ともに、河岸に仁王立ちする人間の姿に手を止め、注視する。

交差せんとした互いの宝杖と九齒のまぐわは、宙に浮いた形だ。

いわゆる奇襲戦法、猫騙しのようなものである。

思嵐は、今が機会とばかりたたみかけた。

「水妖よ、貴殿の住処を騒がしたことは謝ろう。我らに他意はなく、ただこの渡河不能の流沙河を前に試行錯誤の末、不幸な水難の事故にあったに過ぎない」

不幸な事故ねえ、とその創出原因である悟空が後ろでなにやら茶

々を入れるが、完全に無視する。

「我らはただここを往きて通りすぎただけだ。願わくば、妨げではなく、貴殿の助力を請いたい。が、何もただではいね。法の力を込めたこの『ふくべ』と交換条件ではどうか」

懐より赤い夕顔の実を取り出すと、水妖によく見えるようささげもってみせた。

これは出立の折、恵岸行者より、選別代わりにもらったもので、水難の折にこそ役立つであろうと意味深な言葉を付して渡されたのを今こそその『水難』なのではないかと思っただけの行動だった。どちらかというと、恵岸行者の先見の不気味なものを感じる部分もあるが、実利は容易にそれを凌ぐ。

原理など分からなくとも、得体が知れずとも、現在を朽ちずに、明日へ進むことができるのなら、構わない。

思嵐には今が精一杯だ。

一方、水妖は凝つと赤いふくべを見つめている。

「おうい」

得物を差し向けたまま、身の置き所がなくなったのか、八戒が呼びかけるが、水妖は意に介さない。

不意に、水妖は宝杖をおろした。

文字通り、武器をおさめたのである。

「一つ聞こう」

水妖は顔色も悪く、ゆっくりと思嵐の目を見つめた。

「貴方は、身なりは唐僧のようだが、ただ人ではあるまい。そのふくべ、菩薩に直接勧化を受けた者か」

ふくべを見て、何故察したものか。だが、問題はそこではない。「そうだとしたらどうする？」

「.....」

沈黙でもって応じる水妖に、思嵐は駆け引きを投げることにした。これは、馬鹿正直でまじめな手合いだと、同類に近いと本能で察したからである。こうした相手には、何より正道が近道となることを、



思嵐は己に照らし合わせて心得ていた。

「菩薩にお目通りしたことはある。だが、仏弟子として教化いただいたわけではない。一種の取引があった。それまでだ」

「取引とは」

「理由は私事ゆえ話さぬ。だが、内容については話せる。取教のため、天竺まで行く。西へ。西へ往く旅だ」

水妖の塗り潰したような虚ろな眼窩に何かが過ぎった。

光か。熱か。それとも。

「……なるほど。色々と、合点がいった」

ふと水妖は自嘲めいた不器用な笑いで口元を僅かに戦慄かせた。

「吾は、いや私は『沙悟浄』という」

その名を聞き及ぶや、思嵐もまた目を見張り、

「その法名 観世音菩薩か」

菩薩の張り巡らした糸に息をつめた。菩薩は暮の名手、盤上はすでにいくつもの布石が敷かれ、最後まで見通されているのではないか。

悟空。悟能。悟浄。

法名は、それぞれ『悟』を織り交ぜ、菩薩が用意した三の布石が揃ったのである。

「いかにも。私もまた取引を受け入れた。取經の者の保護をつかまつる。とはいえ、これまで私がこの手にかけ、腸を嚙はらわった九人の取經者のされこうべは、この首にかけておりますが」

急に口調を改めた悟浄は馬鹿正直だ。

菩薩との取引がなければ、貴方もこうなっていた、というのだから。わざわざそれを口にする意図は、

「それゆえ、このされこうべはここにあり、また法の船となる」  
そのためだった。



## 許されざる者

ふくべより、しゅるしゅると蔓が吹き上がり、たちまち九つのされこうべを縦横に結び上げる。何事かと見守る前で、虚空を望むどくろの眼窩より

ぼっ

一つ、

ぼっ

また一つと、青い炎が噴き出していく。

揺らめく紗のような炎は天へ伸び上がり、濃淡を緩やかに調節しながら、次第に某かの形をとっていく。それはあたかも白い骨が青い燐により受肉していくかに見えた。やがて点と点は線に結びつき、線は立体の辺となり、九つのどくろを基点に、一艘の小舟がどろどろと姿を現した。忍び寄る夕闇に燐光を吹き零す浮き上がる姿は幽玄でありながら、この世のものではない不気味さをも感じさせる。

波浪は嘘のように静まり返っている。固唾をのんで見守る先で、赤いふくべの灯籠をかけた小舟は、音もなく水辺へと滑り出した。漆黒の鏡のような水面に、青色の炎を弾き、まさに『幽霊舟』は無人のままじつと何者かの乗船を待っているのだった。

その虚ろでありながら容易ならぬ存在感、確かにそれは人為及ばぬ『法の舟』であつた。

「この『法の舟』ならば、流沙河の渡航も可能でありましょう」  
側に控えていた悟浄の言葉に、思嵐は小舟の威容へと吞まれていた己に気づかされた。

青く、水と空気に解けていきそうな舟は、美しく、そして哀しか

った。何をこうまで揺さぶられるのかといえば、それは死者の舟であるからだった。

そして、その死者を、踏みつけてゆかねばならぬ。

捻りも何もない。皮肉でもない。言葉の通りである。他者を犠牲に、踏み台に、己の命を買い、困難を回避し、急死に一生を得るは、思嵐のいわば得意であつた。それを嫌悪しながらも拒みきれない。助けられたことに誰よりも安堵し、脅威に立ち向かおうと思つはしから、何を振り捨てても逃げたいと願う自分がいる。他者を踏みにじつてでも、生き延びたい。いや、生きたいのではない。死にたくないのだ。死に纏わる、痛み、恐怖、絶望、恐ろしいものからひとすら身を隠し、縮こまって脅威が去つていくのを待っている。その課程で、こちらに災いが降りかからぬよう、己以外の命が摘み取られることを消極的に願つてさえいる。

あさましいと思う。だが、浅ましい自分を嫌悪するより、他者を犠牲にする罪悪感よりもなお、何よりももつと強く、『恐れ』がある。

思嵐の自己嫌悪も、罪悪感も、矮小なものだと嘲笑するように、恐怖は遙かに全てを凌駕していく。誰かを失うよりも、恐ろしい。犠牲にするよりも、恐ろしい。恐ろしくて恐ろしくて堪らない。その己の有様のなんと惨めなことよ。同時に、己を憐れむような真似をしたくないとあかく自分がいる。それこそ、惨めに過ぎる。くだらない自尊心、だが齒を食いしばつて最後の堤を守らねば、本当の底無しに陥るだろう。自己憐憫は己を容易に食い尽くす怪物だ。目を反らさず、絶えず対峙し続けなければ、捕つて食われ、二度と立ち上がれなくなる。そのことを、痛いほど知っている。そして痛いほど、必死に対峙する自分の足が震え、逃げたがっていることも知っている。思嵐は振り子だ。あるいは針の先の断崖に立っており、一風吹けば、容易く折れ、右にも左にも振れ、正にも邪にも倒れるのだ。だから必死に立っているのだ。その必死さを笑いたくば笑えばいいのだ。

私は何でもする。どれほど惨めで無様だろうと、かつこうを気にしていられるほど余裕などない。

死者を踏みつけることも、本意ではないが、やらねばならぬのならやろう。

水面にけはいもなく青白い炎に包まれた小舟が浮かぶ。

思嵐は合掌した。

自然と頭が垂れた。

私も、先達のあなた方の一人であつたかもしれぬ。そして一人であつたと幻視し、それは真実か虚実かも分からぬことです。名も知らない。私であつたかもしれぬ先達の方々よ。あなた方を踏み台にしてゆきます。私は崇高な目的に身を捧げることはできず、私怨と私心のために西へ行くのです。私のような者のために、主が死に、母が死に、師が死にました。哀しく、辛く、苦しい。それでもまだ私は死にたくないと思い、そんな自分が惨めで仕方ありません。高潔でいらぬ自分が、高潔な人を踏みつけて生きてゆかれることが辛くて仕方ありません。辛さに耐えられぬ私は、そんな風に生きていたくないのです。死にたくない以上に、そう望むのです。いえ、死にたくないという気持ちはいつも私を脅かしています。常に揺れているのです。折れぬ為に、がむしゃらにひたすら進むよりないのです。進むために、私はなんとしても西へ征きます。どうか、お力お貸してください。あなた方も西へ往こうとした。どんな理由かは今となつては分からない。それでも行こうとしたあなた方は、こんなところで道絶たれ、どれほど無念であつただろう。叶うなら、あなた方を連れて行きたい。あなた方の痛みを苦しみを知ったことで、無性にそう思う。どうか許してくれませんか。無力で愚かで無様でどうしようもない。そんな私でも、私は生きてゆきたい。胸はつて生きるために、ここで無念に留まるあなた達の力を借りることを、どうか許してはくれませんか。

思嵐は合掌したまま、垂れた頭をゆっくりと上げ、目蓋を開いた。

ゆるされない……

茫洋と虚空を見つめる瞳からは光が失われる。

違う、許されたくなどない……

こみ上げてきた熱い塊が、涙となって滑り落ちる。

私は、許されたくない。許して欲しくなどない。

私が私を許せない。

お母さん。師父。高蘭。

知っているのよ。死者は何も云わない。許さない。怒りもしない。

だつてどこにもいない。

どこにもいないのだ。

残された生者だけが、死者の気持ちを狂ったように推し量るのだ。

許しを請うのは私。

許せないのも私。

全て私なのよ……

勝手に贖罪して、私が私に許されたいだけ。

そして、生きるための口実<代償>に、いつまでも許されたくなどないの。

そうすれば、罰を受け続ける自分に酔っていられるから。

死者の皮を被った己に己自身を捧げ続ける。

自己陶醉という酩酊の海に溺れ続けていれば、私は生きていけるから。

でもやっぱりごまかせないの。

そうでもしないと、生きていけない自分に気づかされてしまう。

どうか怨んで欲しい。浅ましいと怒って欲しい。

二度と会えない。そんなこと気づきたくない。

盲目のまままでいさせて欲しい。

許されたら、もう一步も進めない。  
だから。

けっして、けっして、許して欲しくなどないのよ……

「あら、これはこれは、三蔵法師御一行様」

場違いな甘い女の声。

ゆっくりと、思嵐は時間が停止したかのような倦怠感の中振り返る。

忘れもしない、かつての悪夢が女の形をとる。女の背中に翼がある。女の顔に見覚えがある。

『壁に叩きつけたらぐちゃって』

『きゃは、潰れ饅頭！』

お母さん。

思嵐は一瞬の思考の空白の後、視界を真っ赤に染めた。

目も眩む怒りによって、視覚が色を変えらるゝとは、知らなかつた。

指先の感覚がない。血が止っているのか、どくどくと脈打っているのか、全く分からない。

気がつけば、思嵐は絶叫していた。



気に食わない

風が蕭々と吹いている。

河面は平らかに静まっている。

音はなく、声もない。

名も知らぬ鳥が天高く鳴き、羽音が思嵐の耳を打った。  
ぶつり、と何かの糸が切れる音を思嵐は確かに聞いた。

「貴様あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！」

たちまち時は動きだし、己が喉も裂けよと絶叫していることに気づく。

この女。

ああ、この女だ。

知っている。忘れもしない。

あの日、あの時、思嵐をいたぶり、追い詰め、母を「潰れ饅頭」と囃し立てた。

あの化け物の一人。

「ごおおと強風のごとき音がする。思嵐の内を真っ黒な憎悪の化け物が荒れ狂い、叫ぶ。

憎い。許せぬ。

朱に染まる視界で、問う声がある。

何が憎い。

奴らが、殺した。

何が許せぬ。

奴らが、のうのうと生きていることが。

どうして許せる。どうして生きてゆける。喉元を突き上げる怒りに、憎しみに、言葉が刃となって奴らを貫けばよいと願う。それほどの舌鋒の鋭さをもって、その罪状をたたきつけてやれればと思うのに、思嵐の舌はもつれ、意味のある言葉を発することすらできなかった。

悔しい。

己の無様が悔しい。

指がぶるぶると震え、錫杖を握ることすらままならない。

今や武において力なく、言葉においてもまた無力なのか。

熱塊が氣道を塞ぐかのように、喉が引きつれる。

あまりの感情の昂ぶりに、言葉に詰まる思嵐を無視して、柳腰の女は大仰な仕草で悟空に拱手してみせた。

「ほほ、大兄は斉天大聖とお見受けする」

いかにも、と悟空が億劫げに顎をしゃくれば、

「お初にお目もじ仕る。鳳魔一族が末席、白雪と申します。<sup>バイシユエ</sup>大兄のご無事のご復活、一族よりお祝い申し上げます」

「そりやどうも」

やる気のない悟空の応答に白雪は拱手を解き、

「さても不思議なこと、何故法師殿に、これほど怒りを買いましたか、妾には理由が分からぬゆえ、ご縁をお聞かせ願いたいが」

そのまま口元に白い指先をあてがい艶笑を向ける。

「まあ、たかが卑しい人間風情のこと、どうでもよろしいですわね」その弓なりに弧を描く目つきは、虫螻を見るような嘲りに満ちている。いや、嘲りですらない。無関心なのだ。

人の生き死になど、この女にとって、興味関心の埒外なのだ。それが私にとっての全てであったとしても、この化け物にとってはどうでもよいこと。

だから、簡単に私の全てを奪って行った。そして簡単に忘れてしまふ。ああ、その時、気に留めてさえいないことを、どうして覚えておける。

許せない。

絶対に許せない。

畜生。

畜生。

知らずして、思嵐の唇は呪詛を吐き出していた。

羽を開閉し、白雪が「まあ嫌だ」と眉根を寄せる。

「経文の代わりに呪詛とは、とんだ生臭坊主ですこと。なあああにが許せないのかしら？ あらあら、妾つてばどこかで貴方の恨みでも買っていたのかしらああああ？ 見覚えがああああ、あるようなああ、ないようなああああ」

女の声は粘着質に間延びする。それは、かつての女達の狂乱を思い起こさせた。

『あのババア弱くてつまんなかったよねええ』

『壁に叩き付けたら、ぐちゅって潰れちゃったああん』

『きやはっ 潰れ饅頭っ』

『にいいいげええろおおおおおお』

耳鳴りが。

「ごとおと耳鳴りがする。

吹き上げる風。

真っ暗にあぎとを開けた隧道。

それは思嵐の恐怖の記憶であり、憎悪の咆哮の音でもある。

「……ま」

切れ切れに口を衝いて出た言葉に、白雪が「はあ？」といとわしげに聞き返す。

「貴様。殺してやる」

決して大きな声ではなかった。

先ほどの絶叫が嘘のように、恬淡とした声音でもあった。

あまりにも強い感情は、かえって<sup>なき</sup>風のような平静をもたらす。

だが、無理矢理抑圧されたそれは、高温に溶解し、どろどろと渦巻いて、その主にも制御ができない。

全身が心臓になってしまったかのような鼓動の音に突き動かされ、思嵐は前に一步踏み出そうとした。

そう、踏み出そうとしたのだ。

しかし、実際には、一步も前に進めなかった。

見えない壁が目前に立ちふさがるかのように、思嵐はその場から動けずにいた。

妖術ではない。

気圧されたわけでもない。

思嵐を足止めし、呪縛したのは 思嵐自身であった。

動けない。記憶が、恐怖が、思嵐を縛る。締め上げてなお、呼吸すらさせないばかりに縛り上げる。何もかも、危惧していた通りの茶番劇だ。

必死の怒りも、全ては誤魔化し。自分の卑しさを覆い隠すためのもの。

思嵐は憎悪よりも、恐怖が上回ることを何より恐れていたかもしれない。

現実に、あの化け物たちと対峙した時、己がどう振舞うのか、眠れぬ夜を数えて、何度も夢想した。

憎しみに囚われて、八つ裂きにせよと打ってかかるか。憤怒のあまり、声すら出ぬか。いつそ捨て鉢に石でも投げるのか。

許さない、憎い、と恨み辛みの声がする。殺せ、仇を討て、と声は命じる。

奴らを想像の中に何度も殺した。

化け物たちに剣や徒手で、あるいは身一つに、計算一つすらできぬほどの激情のまま食ってかかる自分は容易に想像できた。

だがそれ以上に、拳一つ振り上げられない、一步も動くことのできない自分の姿を描くことは、更に容易であった。

思嵐は動けなかった。

あの日、主人の屋敷の廊下で、へたり込み、動けなかった。

あの日、高蘭に屋内へと突き飛ばされ、身を隠したまま動けなかった。

あの日、逃げろと言う母を説得する時間を惜しみ、彼女を置き去りにした。

あの日、山の中でたった一つの反撃すらできず、必死に逃げ惑った。

あの日、師父を化け物どもの囿にすることをわかっていて、私は一人逃げた。

何にも。

何にも変わっていないじゃないか。

何で命が惜しい。惜しくて当たり前だ。

でも、どうして拳一つ振り上げられない。石ひとつ投げられない。怒りをしのぐ恐怖ゆえに理性を手放すこともできず、中途半端にいるのだろう。

口惜しくて、惨めで、悔しくて、それなのに、思嵐は動くことができない。

錫杖をぎりぎり握り締め、爪を立てる思嵐の手の内から、血が伝う。

「あーあーあーあああああああ！！！！」

急に白雪が身をよじり、頭をかきむしった。とつさに、思嵐はびっくり、と肩を揺らし、後退しかける。そうしかけた自分に吐き気とめまいを催す。全身が桶の水をかぶったかのように汗を噴出し、頭を打ち付ける狂ったような痛みに倒れてしまいそうになる。

ただ人の身に、膨れ上がる妖気は質量を持った毒でしかない。耐えられない、と今にも逃げ出しそうな自分を抑えるだけで必死だ。

嫌だ。逃げたくないのに、どうして身体がいうことを聞かな

い。怖い。怖いよ、母さん。震えが止まらないよ。あの日から、ずっと怖くて怖くて仕方ないのよ。こんな自分が嫌だ。

嫌なのに、逃げてしまいたい。救われない。今逃げてしまったら、もう二度と、立ち上がれない。

「なああああにい、こっちが下手に出ていればあ、人間ごときがああ、腹が立つてしまいましたわあ」

間延びした声が次第に殺気を帯びていく。

「大兄の前ではしたない真似をするのはと思ってたけれどおお、お前、潰してしまおうか、ええ？　潰れ饅頭にしてやろうかねえ、ええ？　あはは！　あ、あら。あれあれあれ！　思い出した。珍しいこと。お前、亜山で牛魔王様が……」

女怪は何か言いかけたのだろう。

しかし、二度とその先を紡ぐことはなかった。

「あば？」

自分の身に何が起こしたのか分からない。そんな顔だった。

「お前なあ、うるさいわ」

耳の穴をほじりながら、誠やる気のない態で、悟空が如意棒をその頭蓋に一閃させるや、女怪は殴打の形に陥没していた。

ただ一つの肉塊と成り果てた女に、

「俺、女の金切り声が嫌いなんだわ。ところで、今牛魔王がどうのって、あ、もう聞こえてねえか」

しまったしまった、俺ってばうっかりーとのどかにのたまう。

脳漿にまみれた鉄棒を八戒の衣服で拭うと、抗議の罵声もどこふく風に、すたすたと思嵐の眼前まで歩み寄る、

「すみません、腹あ立ったもんで、ぶっ殺しちゃいましたあ。慈心不殺って難しいもんですねえ」

わざわざ腰をかがめ、下から顔を覗き込んだ。

「で、聞いてますー？　お師さん、そこはあ、不肖の弟子に、仏法を説いてここぞとばかり説教かますところでしょう。まあ、その状態じゃあ、無理ってもんですかねえ」

思嵐は顔面蒼白のままに、ただ立ち尽くしていた。

「じ……悟空、お前……」

この大妖の意図がわからない。その不気味さが思嵐を混乱と恐怖の淵に追いやる。

「まあまあ、落ち着いて。とりあえずですねえ、勝手に喧嘩売らないでくれませんか？ 俺がいくら優秀な護衛だからって、自ら相手の怒りを買うことはないでしょう。俺、割とざるなんで、うつかりってことがあるかもしれないじゃないですか。ちつとばかり見物決め込むつもりが、魔が差して見殺しにしちゃうかもしれないし、そうすると具合が悪いでしよう、お互いに」

何を、とこわばった唇がかるうじて零すのをも無視して、悟空はぺらぺらと実に軽快に喋った。

「お師さまってば、本当に非力で紙装甲で、ぶったたかれても刺されても簡単に死んでしまいそうじゃないですか。うわあ、怖い怖い。俺の蚤の心臓にあんまり負担かけないでくださいや。消極的な自殺なんぞ止めてくださいよお。その気がなくても、その気があるとみなして死なない程度に痛めつけるのも俺はやぶさかじゃあないんですよ、面倒くさいからやらないけれど」

錫杖を握り締めたまま、固まってしまつて解けない思嵐の指を、一本一本引き剥がしながら、悟空は暗く赤と金に揺らめくその瞳に滴り落ちる血の色を映すと、ぞつとするような笑みを浮かべた。

「自傷行為とか、本当に引きますねえ。いいですか、俺の前で、二度とやらないでくださいよ。基本的に面倒くさいのは嫌いなんです、が、ええ、死なない程度に痛めつけることもやぶさかではないので」  
同じ言い回しを二回繰り返して、釘を刺すと、本当に晴れやかに笑った。

「おいおい、この人、気絶してるよ、俺けっこういいこと言ってる最中だったよな？」

笑顔ではあるが、額に血管が浮いているのを見咎めて、八戒は服の汚れを叩き落としながらぶつぶつ文句を言うのをやめて、

「そりゃ、兄貴。錫無理やり放させたから、緊張が切れたんでしょ  
うや。あと、そんだけ妖気ぶっ放してたら、俺でも気絶してえよ」

「おう、悪いな兄弟」

ぐにやりと弛緩した師を腰元を腕一本で抱えて、悟空はいかにも  
心のこもらぬ返答だ。

「ところで兄貴。今さっき、そのおぼはんから、なんか俺やーな単  
語聞いた気がするんですが、あれって空耳？ それとも兄貴口封じ  
？」

「空耳でもなけりゃ、口封じでもねえよ。俺だって最後まで聞いた  
方がよかったかなってちよつと後悔してるところだ。どうも穏やか  
じゃねえな。天数傾くというか、元に戻り始めたというべきか、ど  
うせろくでもねえ御仏のお導きならぬ陰謀というべきか。少なくと  
も……」

この変節の集中は偶然じゃねえな、と飲み込む。

不自然には、人為ならぬ天意がある。何がしかの意図が働いてい  
るとみるべきか。

しばし考え込む風の悟空であったが、腕の中の師にいまさら意識  
を向けると、再度腹が立ったものの、

「とりあえず、こいつは流沙河に捨てていくか！」

「ちよつと止めてください。兄貴それは鬼畜の仕業です」

どこまで本気かわからない悟空の言葉に、半ば本気の八戒の合い  
の手が入る。

存在を忘れ去られた水妖がのっそりと近寄って「己はどうしたら  
……」と尋ね、すげなく兄弟子たちにされるのは思嵐が目覚めるほ  
んの少し前のことであった。





## 玄奘三蔵 2 (前書き)

史実をモデルにしたフィクションです。

## 玄奘三蔵2

ところ変わって、玄奘三蔵である。

吉兆を得て、唐を密出国した後、玄奘は現在唐の西境の関門たる玉門関を目前とするに至っていた。

国境付近ではこの高僧の出奔にあたって次々と捕縛の手がかかり、危うきを逃れたのではあるが、次なる難が玄奘を待ち構えていた。これまで乗って来た馬が死に、仕方なく新しい馬を購入してはみたものの、今後の道中の馬子（馬を曳く人）が見つからずにいたのである。

玄奘は仏の道や語学に堪能であるが、砂漠を横断するに当たっては、直接的にそれらは役に立たない。だが、己の手札を駆使して、道中に詳しい水先案内人を雇うことで問題は解決した。はずであった。

この案内人は日によく焼けた胡人<sup>ソグド</sup>であつたが、砂漠の往路をよく知っているという。玄奘は砂漠越えには、若く美しい馬の方がよいのではないかと思つたが、彼の紹介してくれた老胡人が何度も砂漠を往復したこのある年老いた馬がよいと助言をくれるに従い、そういうものかとその言葉に従った。

経験則というものは、馬鹿にできないことを玄奘はよく知っていた。むろん、経験則ががちにかたまり、根拠を失って暴走すれば、理性を欠いた悪習と成りはてる危険性もいやというほど熟知していた。

昨今の中華における仏法の混迷、各々が諸説をほしいままにする有様は、その悪習の近しい親戚というところであろう。

玄奘は濁った池の水底で宝探しをするかのような閉塞感に悩まされていた。中華では玄奘の捜し物は見つからなかった。ならば、天竺に原本を求めよ。濁った池を決壊させるべく、一度河の源流を引き入れて、すべてを洗い流してしまわねばなるまいとの過激な思いもある。それが全ての動機ではないが、少なくともその一端ではある。

その高邁なのか傲慢なのか分からぬ思想も、やはり役には立たない。

玄奘は億劫そうに嘆息した。

己が喉元に鋭い刀が突きつけられているのを見るにつけ、実にやるせない気持ちに包まれながら。

玄奘に刀を突きつけているのは、かの砂漠の案内人だったのである。

「一つ疑問なのですが」

刺激せぬよう、ゆつくりと言葉を選ぶ。

「何故このような凶行を？ 何か私は気に障ることでしましたか？」

顔面がつるりとしていて、喜怒哀楽がどうも曖昧模糊であり、半ば解脱気味、飄々ともものりくらりとも形容される玄奘である。この問いも、実は挑発行為ととられても仕方のない真正面ざつくりな内容ではあったが、その半分外したようなとぼけた調子でもって、刃傷沙汰を起こそうとしている案内人の気を削がせることに成功していた。これを人徳というのは中々得難いことであろう。

とはいえ、玄奘の気質と加害者のそれがうまくぴたりとはまっただろう、元々案内人も凶行に及んでおきながら、どこか気の進まぬ風情であった。いかにもいたしかたなし、という思いがその浅黒い日焼けした面にありありと表れていたのである。

しかし、いかに気が進まぬ風であっても、実際ぐさりとやられてはたまらない。現実に鋭い刀は玄奘の喉元にあるのである。

「師よ。玉門関は中華と西域の境。これを過ぎて、ここから先は西

域となります。更に西北へは、五烽（烽火台）があり、その北は沙漠です。水は五烽の下でしか得られず、しかし夜に水を盗もうとすればたちまち見張りの兵に見つかって殺されるでしょう。私にも家族があります。これ以上進むことはできません。師もどうか引き返してください」

切々と訴える若い胡人に、玄奘は首を横にふった。

「出国が禁じられているのは元より分かっていたこと。行く先々で朝廷より私を捕らえるよう通牒がありました。しかし、朝廷の命に背いて通達を廃棄し、あるいは私を守って西へゆかせ、詔に逆らう死にも値するような援助をしてくれた人々もいました」

この通牒は、「玄奘という僧がいる。彼は西蕃に赴こうと欲している。各地の州県はよろしく警戒を厳しくして捉えよ」との内容であった。当時隋から唐へと行政が変わり、まだその支配が遠く西域に及ばぬにあたって、国民の出国を厳しく禁じるがゆえであった。

矢のような捕縛の謀文が行く手に回り、昼に潜んで夜に動く中、涼州の惠威法師やその遣わした弟子達、瓜州刺史の独孤達、州吏の李昌など、多くの人々が玄奘に同情し、また共感して、彼を西へ旅立たせてくれたのである。

「受けた恩義のためにも、今更引き返すことはできません」

彼らの犯した危険に報いなければならない。そして、それ以上に玄奘は諸説乱立の混迷の泥を雪いで、己の疑問を解き明かしたい熱夢のごとき衝動につかれていたのである。

まだ道半ばすら至らず、どうして東へとって引き返せよう。

死ぬ時は、一步でも西へ進んでみせる。それが真理へ一步でも近づくことであれば、命を対価にすることなど、どれほどのものか。それほどの対価を捧げねば、得られぬと知っている。捧げても、何一つかえってこないかもしれない。失うだけかもしれない。

だが、ただでは死なぬ。死ぬならば、得てこそ死ぬ。ならば得るまでは死なぬ。

惜しいのは命ではない。惜しいのは時間だ。命尽きるまでの有限

の時間、一秒たりとも無駄にはできぬ。

人の命は儚い。それを玄奘は目にしてきた。彼は隋が統一を失い、末期に乱れて新たに唐へと王朝が代わる変動の時代に、多感な幼少時を過ごした。

命は、誠にあつさりと突如として失われる。天災、飢饉、病魔疾病、人心の乱れによる災い、戦。

天下は乱れ、人民は斬殺された。

全ては怒濤のようだ。そして己は濁流にくると回る一枚の木の葉であり、川の流れに抗うこともできるはずがない。いや、己の命など、生成消滅流転する宇宙においては比して砂粒ほどの価値もない。幼い玄奘は、己もまたその生滅の法からは例外なく逃れ得ぬことを知り、一つの解法としてやがては仏門に入った。だがその仏門すらも、諸説千々に乱れて誰一人明晰に読みほどけぬ現状に解法たり得ぬを悟って、天竺に原点を求めることを決したのである。

苦難の道であろう。皇帝に逆らうことになる。

だがどこにいても、何をしていても、人はいつ死ぬかは分からない。いつでも人は死ぬ。

何かを成そうとすれば、命はあまりに短い。そのぎりぎりまで己が望む様に生きて、生きた証を残せば。

その命は果たして短いと言えようか。

比して矮小の命は、思ひは、後の世につながれていくのではないか。

玄奘という一個人ではない。仏教という有形無形の集合体の中で、その構成の一つでありながら、個が群体<全て>に影響を及ぼす。それが可能であれば、体は朽ちても私は死なぬ。

そして、私は、ただ、知りたい……

いかな供養にも溺れず、命をかけて仏門に尽くす無私の高僧。

しかし、その野心、まさに広大

胡人は、玄奘の穏和な容貌とは裏腹に獐犷ともいえる熱量のうねりを本能で感じたものか、気圧されたようにやや後ずさった。

「師よ、あなたのお気持ちは立派です。しかしどうか聞き届けてください。ここから先は監視兵だけではない」

彼ら以外いないにも関わらず、辺りの『誰か』の耳目を恐れるように声を潜め、胡人は大柄な身体を縮めた。

「五烽と伊吾<sup>ハミ</sup>国の間に広がる莫賀延磧<sup>はくがえんせき</sup>には、妖魔悪鬼の類が出るといいます。どうか思いとどまってください」

ふと、玄奘は目を瞬かせた。

「妖魔悪鬼ですか」

「ええ、そうです。きっと食われるか、殺されてしまいます」

勢い込んでぶるりと体を震わせる胡人に、玄奘はいかにも困惑気味に言った。

「それは……迷信でしょう。私は、隋が乱れて天下動乱の折に、人が大勢死ぬのを見ましたが、人を殺すのは人でありませんかでしたよ。妖魔も悪鬼も見ることがないし、それを知人友人が見たとうわさしても、己が眼で見たという人は聞いた例がありません。それとも君は己の目で見たというのですか」

「いえ、しかし噂は本当なのです、ですから」

刀を放さない胡人を恐れるでもなく、玄奘はぴしゃりと続けた。

「羅刹は人の内に巢食うもの。君の師を殺そうとする悪心もまた君の内の羅刹の仕業。これが悪鬼でなくて何が悪鬼か」

怒声を上げたわけではない。

しかし、胡人は雷うたれたかのように、恥じ入って刀を下ろした。月がしらしらと荒れ地を覆う中、玄奘は静かに、だがはつきりと呟いた。

「妖魔悪鬼など、いるはずもない」

そんなものは、存在しないと。





曲者は（前書き）

仙界です。短いです。

## 曲者は

仙界。

西王母の管理する蟠桃園ぱんとうえんの一角。

苛苛と、一人の少女が裳裾を翻して室内を歩き回る。

「なんとということ、なんとということ」

桃のような頬を苛立ちに赤く上気させ、桜花のような唇からは呪詛と聞き違えてもおかしくない呟きが零れ落ちる。

「おのれ、仏め。くそっ　くそっ　奴らめ、どういつつもりだっ」

激しい口調で、手元の扇を叩き折らんばかりに折り曲げる。

「太真王夫人たいしんおうふじん。あまり呪詛を撒き散らされませぬよう」

おろおろと少女付きの女仙の一人がたしなめる。

「お黙り！」

少女　太真王夫人の口から鋭い勘気が飛び出した。

天真爛漫で美しい、西王母の末娘。

その見る影もない。

「ああ、分からね！　くそっ　ナタク殿に色仕掛けで何があつたか聞き出したが、あの阿呆めっ　ちつとも要点を得ぬわ！　これだから、仏に抑えられた戦闘神などという役立たずは！！」

「あのう、どこでどなたが聞いておりますか分かりませぬゆえ、もうすこうし、お声を小さく」

「黙れというておる！！」

「はっ、はひいいいいっ」

今度こそ扇がしなり、卓を叩いて、真つ二つにする。

進言した女仙は涙目になって腰を抜かした。

「結界なぞ、とうに張っておるわ！　そもそも本拠地で仏どもに盗み聞きを許すようでは、もはや仙界も終了のお知らせだ！　馬鹿者！！　ふん、とうに終わっておるのかもしれないがな！　ああ、口惜しい、きやつらめ、今度こそ何を企んでおる！！」

どすん、と小柄な割りに大きな音と立てて椅子に腰を下ろすと、  
苛苛扇を弄繰り回した。

「高蘭。あの娘に何かがあるというのじゃ。私のお気に入りだったのだぞ！　くぬつ、くぬつ、これからつつこうと、いや、仲良くなるうとしておったのに！　あのぎらぎらとして……うふふふ、私を嫌うあの暗いどろどろした憎悪の眼差し……隠し通しておるつもりで駄々漏れよ。優しく優しくして、徐々に懐柔しようと思っておつた。いつ本性を明かして、脅えるさまを愉しもうと……なんじゃ、その目は」

「……軽蔑の目でございます、大真王夫人」

もう一人の夫人付きの背の高い女仙が汚物を見る目つきで夫人に答える。

「そのような性癖は控えてくださいませ。せめて胸の内にしまつていただきとうございます。耳が穢れますので」

この女仙、元九天弦女付で、ある意味太真王夫人へのお目付け役として遣わされたため、言うことには容赦がない。

「つち」

太真王夫人はあからさまに舌打ちすると、ぷいと横を向いた。

「小うるさい奴。私は弱い者苛めが大好きなのじゃ！　特に、ぶるぶる脅える奴を更にいたぶるのが大好きじゃ！！　でも愛を持ってやる！！　故に、相手も嫌悪しながらも徐々に私を受け入れていく……！　その過程、たまらぬ……！」

もう駄目だ、この主は……そのような何とも言えぬ雰囲気室内に蔓延した。

太真王夫人が、彼女いわくお気にいりの高蘭相手に、猫を何十匹も被って清らかな少女の言動を繰り返すたび、女仙達は内心七転八倒していたのである。不気味、気持ち悪い、かゆい、などと実に散々であった。

「まあ、それはそれとしてじゃ」

ぱん！　と扇を勢いよく開くと、そのまま口元を覆う。重たげな

簪がちりちりと揺れた。

「観世音菩薩。奴は策士よ。しかも悪辣な名手。如来の懐刀ゆえ、今回のこともきやつとの差し金であろつ。大掛かりに動いておる」

じつと空中を睨み、

「いずれか、平天大聖が蘇ったともきく。仏門千里の駒も名高い人間の三蔵法師計画。両界山に封じられし斉天大聖の解放。かつての天界の罪人どもも全て仏弟子に取り込んだというが。きな臭いとか言えぬ」

そこになぜ己のお気に入りが絡むのか。どういつつもりだ。なんの思惑もないとはとうてい思えぬ。

再び舌打ち。

「くそつたれめ。仙界には裏切り者があるからのう。誰とは言わぬが、あの使えぬ戦闘神の父兄どもじゃ。特にあの兄！！ あやつは許せぬ！！ 仏の手先になんぞなりおつて、我が物顔に内政干渉しておるわ！」

女仙達も「ああ、どこに耳目が」「言葉づかいが」と周囲をきよろきよる見回すが、内容自体には反論せず、黙って聞くばかりだ。

不意に、太王真夫人は、眉目を解いて、柔らかな絹の靴先に視線を落とした。

「こんなことは言いとうないが……土着神に期待するしかないのかのう」

『あれ』も、祖形はかの水神。原初に連なる者。その性も曲者ゆえ。

そう呟き、彼女は、はつと目を見開く。

菩薩は暮の名手。その布石も意味が……？ ならば、その布陣の意味。その中心が意味するものは？ まして、菩薩のその性は……やはり。ならば。

いや、まさか。

考えすぎだ。いくらなんでも、『できすぎている』。

「夫人？」

怪訝そうに聞かれ、太真王夫人は頭をふり、「なんでもない」と再度舌打ちした。

## 五莊觀

「ぶええええつくしよい！」

激しいくしゃみに、行李と九齒の馬鍬をかついだ八戒が反応した。  
「兄貴い、風邪ですかい？ あれ、馬鹿は風邪ひかねえってきいたんですがねえ」

「あーうん。馬鹿は風邪ひかねえな、まさに」

どん、と八戒を川面に蹴り落として、これは悟空。ぎゃあああ、と悲鳴が尾を引くが、浮き上がってくるたびに、鉄棒を食らわせて沈める笑顔の兄弟子に、思嵐は正直引きつる思いで言葉が出ない。

「ほーれほれ、馬鹿は風邪を引かない。己の言動の意味もわからないあい」

「やめつてえええええ、でももつとしてえええええうえー！」

悟空は急に無表情になつて鉄棒を引き上げた。

「萎えた」

一言である。

「ああつ、そんなつ」

何故残念そうなんだ、八戒。

思嵐は白馬の上から顔を背けた。同じく、顔色の悪い水妖……悟浄が我関せずと無言でざくざくと歩くのを見て、嘆息した。

なんと歩調の揃わない。

両界山にて水簾洞が元主の孫悟空。

高老荘にて元天蓬元帥の猪八戒。

流沙河にて元卷帘大将の沙悟浄。

恵岸行者に指示された三の従者は揃い、いよいよ大呪法の編纂に入った。

しかし。と思嵐は三者を見遣る。

何故この三者なのか。観世音菩薩のこと、何も意図がないとは思えぬが。

いや、この馬鹿騒ぎを見ているともしかして単に彼ら罪人への教化、救済措置なのではと思えなくもない。

それとも何か罪を犯したということ以外に、共通点でもあるのだろうか？

御仏の考えることは分からぬ。ただ人の身で、分かつはずもな  
いか。

ただ、ふと。

「ああ、白馬。お前を忘れていた。お前も元は竜だったね」

小さく声をかけると、白馬は「なあに？」とばかり馬首をめぐらし、幼げな真つ黒の瞳を上目遣いに向ける。

思嵐の口元にかすかに微笑が昇り、そつと指先を伸ばして白馬の頭上を撫でる。

「おっししようさまあ」

にゆう、と鉄棒が思嵐の鼻先に突きつけられる。

「な、わっ」

あやうく落馬しかけた思嵐は怒声を上げた。

「悟空！ 何をする、危ないではないか！」

怒鳴られた悟空は、反省の色もなく、酷笑ともとれる馬鹿にした笑いを浮かべ、肩をすくめた。

「すみませんね。お師さまってば、運動神経皆無のくせに片手で手綱を握って腰を浮かすなんて危険なことなさるんで、止めてくださいって口より先に手が」

「先に口を出せ！」

怒り倍増で怒鳴りつける。

怒鳴りつけながらも、この大妖が意外とまじめに自分の護衛をしていることを不気味に思う。飛頭蛮を始めとする様々な悪鬼妖魔、夜行遊女、今回は怪しいが、少なくとも彼なりに護衛を果たそうと

している。

実は、この孫悟空のことが一番よく分からない。残る二人の偽弟子に比べ、彼は仏に恭順する意思は全くない。

以前互いの目的はどうでもよいと啖呵を切ったことがあるが、実はそうでもない。彼は、いずれ道を違える。それが『いつ』なのか知らねばならぬ。

如来に落とし前をつけさせるといった発言からも、いずれ彼が造反を目論んでいることは明白。悟空が何を考えて思嵐との取引を呑んだのか、いまだ分からぬ。そして、いつまで味方の『ふり』をしているのか。

時期を見定めて、注意深くその時を推し量らねば、寝首をかかれるのは自分だろう。

その時。

私はどうするのだろうか。

そう煩悶した思嵐は、己のその問いにぎょつとした。どうもこうもない。その時はそれまでだ。

他に選択肢などない。

思嵐はゆつくりと深呼吸し、前を見据えた。振り返らぬ。これ以上は。

さて、一行の行く手の先に、一振りの剣のごとき高山が隆と天を突き刺している。

この山を、万寿山まんじゅさんといい、その山中には五莊觀ごそうかんという觀かんがあつて、その主は仙人であつた。

道号を鎮元子ちんげんし、その通称は与世道君よせいどうくんと呼ぶ。

仙人の位にも位階がある。天仙、地仙、人仙こと屍解仙しかいせんである。

思嵐などは、以前一番位階の低い人仙であつたが、この鎮元子と与世道君は、地仙の祖であり、その長でもあつた。また与世道君とは、その寿命を天地と同じくするという意味であり、思嵐とは比



ぶべくもない大仙であつた。

鎮元大仙は、ふとその白く長い立派な髭を扱いて、  
「ほう」

と下界を見下ろした。

「これは懐かしい者がおいでなすつたのう」

齡千を超える童子の一人が、不思議そうに師をみやつた。

「師父、いかがされましたか？」

「ふお、ふお。前生ぜんしやうにわしの知人であつたはずの者が、天地のそこ  
つ者とともによつてきおつたのよ」

いや待て、縁ゆかりの者というべきかのう、なんとも複雑じゃわい、と  
髭を更にしごく鎮元大仙に、童子は首をひねるばかりだ。

「ふうむ、旧交を温めたいところじゃが、なんと間の悪い。元始天げんしてん  
尊様そんから上清天じやうせいてんの弥羅宮みらくきゆうに招かれておるに、四十八の真人しんじんも連れて  
行くつもりじゃ。留守はお前達二人だけになる」

童子たち、清風せいふうと明月めいげつはお互いに顔を見合わせた。元始天尊は道  
教の最高神。まず師は聴講に行かれるであろうが、師に縁の者を二  
人で出向かえばならぬのであろうか。

「さて、お前達。荷が重いという顔をしておくれるでないわい。そ  
うじゃな、九千年に一度実を結ぶ『人参果にんじんか』が、ちょうど今の時期  
熟しておる。この粗果をかの三蔵法師に差し上げて、接待するがよ  
い」

この人参果は、五莊觀の宝果である。

三千年に一度花開き、三千年に一度実を結び、さらに三千年めに  
ようやく熟す。九千年もかけて、ただの三十果しかない貴重な  
くだものだった。

「はい、師父」

童子二人は畏まって留守番を申しつかった。内心、貴重な人参果  
を差し上げるなんて、もったいない、と思ひながら。

彼らの脳裏に浮かぶ人参果。

ひと嗅ぎするだけで三百六十年も生き、まして口にすれば四万七



大門が内側から開かれていく。思嵐は、はっとし、門の内側を凝視した。

光が溢れ、内側から小柄な人影が二つ。

小童二人が、拱手し、

「お待ち申し上げておりました。三蔵法師ご一行様」

あたかも思嵐たちが来ることは分かっていたとばかり、出迎えた。全ては幻聴だ。思嵐は力が抜けると同時に、法衣の下がびっしょり冷や汗でぬれているのに気づき、ゆっくりと呼吸した。胸が激しく上下している。

私は。

まだ。

今

一の門、二の門を過ぎ、一行はやがて立派な正殿へと案内された。思嵐は香をつまんで正面の『天地』の掛け布に三拝礼をして後、童子らを振り返り、

「洞主殿はいずこにか、ご挨拶申し上げたいが」

尋ねると、彼らは「いいえ、それには及びません」と応じる。

「我が師は元始天尊様のお招きで、高弟とともに上清天の弥羅宮に出かけており、ただいま不在でございます」

「ただ、出がけに我が師より、前生でご縁のありました三蔵法師様がおいでの際は、ていちょうにおもてなしするよう仰せつかります」

「我らではいたらぬかもしれませぬが、せいっぱいお世話させていただきますので、皆様方本日はお泊りの上、どうぞごゆるりとおくつろぎくださいませ」

交互にいう童子たちに、思嵐は面食らった。洞主が不在では仕方がない。しかし、その洞主、思嵐たちが来ることをすでに予見していたようだ。

更には、前生にての縁というが

思嵐は言葉にならずに口ごもったが、

「洞主殿が不在ではご挨拶も叶いませんが、お心遣い、嬉しく思います。ありがたく世話になります」

そう返したところ、こらえ性のない弟子たちが背後で苛苛しびれを切らしているのを感じた。

まずい。これはさつさと餌を与えぬと。

「八戒、悟浄、荷を解いて宿泊の準備をしてほしい。お弟子殿、申

し訳ないが馬屋をお借りしたいが」

「ああ、もちろんでございます」

快諾する童子に、思嵐は礼を言って、「悟空」と指名した。

「はいはい、俺が天界の弼馬温ひつばあん経験者だから、馬の世話はお手のものだということです」

「嫌味はよいから、さつさとしろ」

悟空は舌打ちして、嫌そうに正堂を出て行く。その後を八戒、悟空が一礼して追う。

「そこつな弟子が失礼した」

二人の童子は顔を見合わせると、明言を避け、

「あの、三蔵法師さま。実は師より、あなた様にもてなしとして粗果をお持ちするよう命ぜられております。急ぎもいで参りますので、しばしお待ちくださいませ」

思嵐が声をかける前に、彼らはばたばたと忙しく堂を後にした。一人残された思嵐は嘆息し、錫杖を手に、手近な椅子を借りるところとする。

前生での縁か。

落とした視線を正面の掛け布にうつし、天地の力強い大書を見つめた。

それは、私のことではあるまい。

本来の、三蔵法師。玄奘のことであろう。

私は、ただの身代わりだ。

それ以上でも、それ以下でもない。

そのことを、彼の大仙は知らぬのであろうか。それとも、身代わりの呪は、妖怪のみならず、地仙の目にも自分を玄奘三蔵として写す強力なものであるのか。

思嵐には分からないし、どうでもいい。

そう、委細などどうでもよい。目的さえ達すればそれでよい。気にするのは障害となるものだけだ。それに注意を払うのだけで、思嵐は精一杯なのだ。

身内ですら信用できず、気を張っているのだからな。

皮肉げに口元を歪め、掛け布から視線を外した折、ぱたぱたと軽い足音が聞こえて来た。

「お待たせいたしました！」

輝くような笑顔で、その捧げ持った朱の盆には

咄嗟に。

咄嗟に、思嵐は強く、錫杖を握り締めた。  
手の感覚がない。  
血の気がどつと引き、耳鳴りがした。

うまく、音が聞き取れない。息が、できない。

「 是人参果 申します。 長寿の 」

何。

これは何。

朱塗りの盆に、裸の赤ん坊がのせられている。  
目があり、耳があり、口がある。  
生まれたばかりの赤ん坊としか見えぬ。

「 人のように見えますが、これはくだもので 大変貴重な 」

童子らは何か言い募っている。

これがくだもの？

人ではないか。

人の赤子ではないか？

どうしたのか分からない。気がつく、童子らは退出していた。

がらんとした堂内。盆もない。

うまく対応できたのか分からないが、思嵐はなんとか体裁を取り繕って、人參果をさげてもらったようだ。

「はっ、」

つめていた息が吐き出された。血の塊を吐くような強烈な衝動が、呼吸となつて漏れる。喉が、焼ける。焼け付くように熱い。目をぎりぎり限界まで見開き、乾いても閉じることができない。

あれは赤ん坊だった。

赤ん坊だったのだ。

あの日、だって、私が。

私が殺した。

しゃあすい  
小翠。

妹を差し出せば助かるのかとも思った。

お前は、あの日泣いていた。

お前の口を塞いで。

恐ろしくて。

あの女怪どもが恐ろしくて。

助かりたくて。

泣き喚くお前が憎かった。泣けば助かるの？

ただ死ぬだけだ！

だから、口を塞いだ。

変な声が出た。気づいていた。知っていた。そうではないの？





もない。私を、何の見返りもなく大切に思ってくれる人は。もうどこにもいない。全部、私が。私のせいで、皆。死んでしまった。

たすけて。お願い。もう、壊れてしまう。

ぼとぼと涙が冷たい床石に滑り落ちる。

ずっとこらえていた。泣くまいと、必死に歯を食いしばってきた。仮初の強さでも、続けば力となると信じて、耐えてきた。泣く資格などもう私にはそんな立ち止まる資格もないと思っていた。

弱みを見せるまいと、そう思っていた。

でも、限界だ。助けて、本当に壊れてしまう。

息ができない。

苦しい。

お願い、お願いだから。

嘘だ。

こんなことでは壊れない。

人は、私は、生きて行く。

悲しみも、罪悪感も、全て、このどうしようもない『生』への執着の前には、幻のようなもの。

痛みは去る。悲しみも薄れる。まして罪悪感など。

でも、『今』、私は苦しい。

『今』、耐えられない。

きつと今だけだ。だから、今が過ぎればまた、誰を犠牲にしてでも生きようとする私に戻る。

でも、『今』はいつ過去になるの。この苦しい『今』はいつ風化するの。

いつたい、いつ。



どれほど時間が経ったのか。

再び、正堂に誰か近づいてくる乱暴な足音が聞こえてくる。

「……おっししょーさん、白馬の奴、馬屋つないどきましたぜー…

…」

足音の主　悟空の言葉は、不自然に途切れた。

「……」

息をのむけはいの後、ぞっとするような、威圧感が堂内に満ちる。

「おい、あんた」

何してる。

妖気が圧力となって塗り込められたような苛立ちをにじませ、伸ばされた手を、咄嗟に、思嵐は弾いた。

無言となる大妖に、身を竦ませながら、それでも思嵐はぎらつく目で吐き捨てた。

「私に触れるな」

おぞましいと、触れられた箇所を震える手で押さえる。

汚らしい、妖怪が。

そう、もう一度吐き捨てた。

## 触れるな

触れるな、と振り払った手が空中に彷徨う様を、どこか第三者の  
ような思いで見つめ、

ふと。

自分は何をしている、と思嵐は脳天から冷水を浴びせられたかに  
怖気を走らせた。

暗い堂内に、二人きりだ。そう、この忌むべき妖怪と、二人きり  
なのだ！！

柔らかな生木を裂くのにも似た、己の弱さを、この大妖の前に晒  
してよかったのか。

いや、よいわけがない。

味方ではない。

味方では、決してないのだと、肝に銘じた筈なのに、この惨憺た  
る結果はなんだ。

愚かに過ぎる。

何かの選択肢を間違えてしまったのではないか、という思いで頭  
がいっぱいになる。

致命的な失敗をしたのではないかと思に至り、さつと青ざめた思  
嵐の胸中とは別に、悟空は払われた手をしげしげと見つめ、ふと上  
げたその視線に、

恐ろしい勢いで、血の気が引く音を、思嵐は確かに聞いた。

己を哀れみ、辛い哀しいと落ちていく自己憐憫の苦しさとはまっ  
たく違う。

生存本能に根ざした、生粋の恐怖、それが思嵐を一気に正気づか  
せる。

所詮は、後悔し、自身を哀れむ行為など、命の危機に面していな

い時の戯れに過ぎぬ。そのことを、思嵐はよくよく知っていた。

そう、大いなる恐怖の前には、何もかもかすんで消え、ただ縮こまって災禍をやり過ごそうとする卑劣で惨めな己しか残らぬ。

それが本当の私。

見よ、『私』が炎を映す瞳に映っているではないか。彼の目を見て、思嵐の身体は文字通り凍りつく。

悟空の目は火眼金睛、かがんきんせい即ち火のひとみ、金の目である。

その目が、怖ろしく凪いで、一切の感情をうかがわせぬさまは、むしろ全身の毛が逆立つほどの危機感を覚えさせる。

圧倒的弱者である思嵐には、いつそ進退窮まったと思わせるに等しい暴力性の発揮される前の一瞬の静けさに感じられたのである。

野生の獣を前にした時、一番してはならぬ行為を知っているだろうか。

それは、『脅え』を悟られることである。

脅えて、一歩あとずさった瞬間に、均衡は破れ、獣は襲い掛かってくる。

だから、脅えてはならない。後ろに下がってはならない。

たとえ、『ふり』だとしても、せめて気持ちだけでも、対等にあるのだと、虚勢を張り続けなければならない。

そうわかっていたはずなのに、思嵐はとつさに、脅え、悟空から半身を離して、後ろに下がってしまった。

身体だけではなく、心が、脅え、折れ、下がってしまった。

賢しらの獣は、それを悟り、牙を剥いた。

おそろくは、嗤笑わいった。

たちまち、思嵐を襲ったのは、血と悲鳴と恐慌の全ての幻影だった。

何度も、他者がそうなるのを目にした。

だから、自分もそうなる姿を思い描くのは容易で、そして、それだけは、

「い、」

いやだ、と。

無様に椅子から転げ落ちて逃げようとする身体を、ほとんど感覚のうせた右手が、必死に握り締める九環の錫杖が支え、思嵐は最後の最後で体勢を立て直した。

そのはずだった。

しかし、中途半端な姿勢のまま緊張に耐えうることはできなかった。頼みの杖を握る手のひらさえ汗で滑り、気づいた時には、椅子ごとひっくり返って床に半身をひねるようにして倒れ込んでいた。

「っ」

言葉にならない痛みが、椅子の脚ごと引っ掛けて倒れた足の付け根を襲う。ひねったのかもしれない。

こんな痛みですら耐えられないで、どうしてもっと大きな暴力の前に耐えられる。

痛いのは嫌だ。

痛いのが怖い。

痛いことをされそうになるがとても怖い。

痛みに耐える思嵐の眼前に、黒い影が落ちた。

ぎよっとすると同時に、悟空が無表情に己の顔を覗き込んでいるのに既視感を覚える。

「……気に食わねえなあ」

低音で呟かれたそれは、思嵐に聞かせるというより、無意識に零れたかのように聞こえた。

「俺あ、これでも相当に我を抑えて、仮初なりとも礼節を尽くしているつもりなんですがねえ。ちっとも伝わりませんか、俺の誠意ってやつあ」

これも思嵐に尋ねるといふより、自問自答の響きがあった。

思嵐は是と応えたものか、否と応えたものか、むしろ何も応えぬ

のが正解であるのか、嵐の前の静けさに身動きすら恐ろしくてできずにいた。

悟空は触れない。

思嵐に触れずに、顔のすぐ真横を、人差し指の長い爪でこつこつと叩く。

「……苛々しますねえ。苛々するのに、苛々する」

怖い。怖い。怖い！

段々と床を叩く音が速くなっていく。

思嵐の心臓もまた、同調するかのように乱れがちに脈をはやめていく。

「元凶、」

と、床を叩く音が止まった。

「潰したら、すつきりするんですかね」

じつと見下ろす目には、何の感情も、光も浮かんでいなくて、思嵐の喉が痙攣した。

目を逸らせない。

一瞬か、永劫か。

その赤い瞳を覗き込み、また同時に思嵐も覗き込まれ、無音の中に互いが互いを拮抗した時。

極度に緊張状態、負荷状態におかれたためか、思嵐はふっとその暗く深い色合いの中に吸い込まれるかのような変性意識状態に陥った。

宗教における忘我、入神状態、恍惚、法悦状態ともいえる、魂が抜け出して深淵なるものを覗く脱魂型のそれになったのである。

巫女が水鏡や映りの悪い銅鏡などを用いて、神霊や異界と交信することがあるが、二人は知らずして、同時に互いの目を鏡とし、『何か』に触れようとしていた。

「おお、と音がする。」

「ごおおと、何かの音が聞こえる。

水音だ。

これは、水の音。

身体がうまく動かない。『私』の身体は、うまく動かない。

だが、行かねばならぬ。

『杖』をつき、『私』は歩く。

うねり歩き、やがて大河に辿り着き、白い、

「  
」

気がつくと、思嵐は暗い堂内に、全力疾走したあのような荒い呼吸で床に倒れ込んでいた。

呼吸が整わない。

全身にびっしょりと汗をかいている。気持ちが悪い。

いまのは、なんだ。

流沙河で見た幻影もまた恐るべき生々しさを伴っていたが、これは、違う。

もっと、圧倒的で、もっと、荘厳で、もっと、言葉にならない。

舌がもつれる。

うまく回らぬ舌で、必死に吐き出したのが、

「ぐ、ごくつ」

大妖の名で、続くべき「今のはいったいなんだ」という疑問は、乱れる息に言葉にすらならなかった。

血の気の多い口より先に手足の出る妖怪のくせに、気難しい顔をした弟子は、少し青ざめた面持ちで、再び思嵐を見下ろしていたが、先ほどのような恐ろしい緊張感は消えていた。

互いに触れない。触れないのに、何か、確かに今、つながった。

悟空は、ただ何かを考えるような、探るような目で、



「今、」

と何か続けようとしたのを、大音声で遮った。

夕日を背に、堂の戸口に、八戒が大きな鍋をごろんがらんごろんがらんごろんごろんごろんがらんがらんがらんがらん……と最後なにやらわびしげな風情で床に転がし、口をあんぐりあけたまま突っ立っている。

それから、彼はなんともいいがたい愛想笑いをして、

「あのう、俺、お邪魔でしたかね？」

十指を芋虫のように意味もなく動かしながら一歩二歩下がった。

「……如意棒」

表情を消した悟空が小さく呟いたのを、思嵐は、はっきりと耳にしまった。

八戒は、非常に変幻自在に弧を描く宝具により、正堂正面、縫い付けられ、おぶう、と嫌なうめき声とともに、何故か「もつと、もつと」と更に嫌な台詞を吐き出していた。

その間に、思嵐は半身を起こし、転げた拍子に乱れた袂を合わせながら、不意に思い立って、苦虫をつぶしたように磔の八戒をみやる悟空を見上げた。

「何か？」

悟空にしては珍しくぶっきらぼうな応答に、思嵐は、いや、と首を振りかけて、やはり喉元に小骨のつかえたような違和感を覚える。

触れない。

悟空の手指の先に今度は視線を落とし、今まで遠慮はなかった、と思う。

だから、他意なく、ぼろりと零れ落ちた。

「悟空、お前、まさか。さつき私が、」

皆まで言うことはなかった。

新たな闖入者のためであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3764s/>

---

夜行遊女

2011年8月30日00時21分発行